

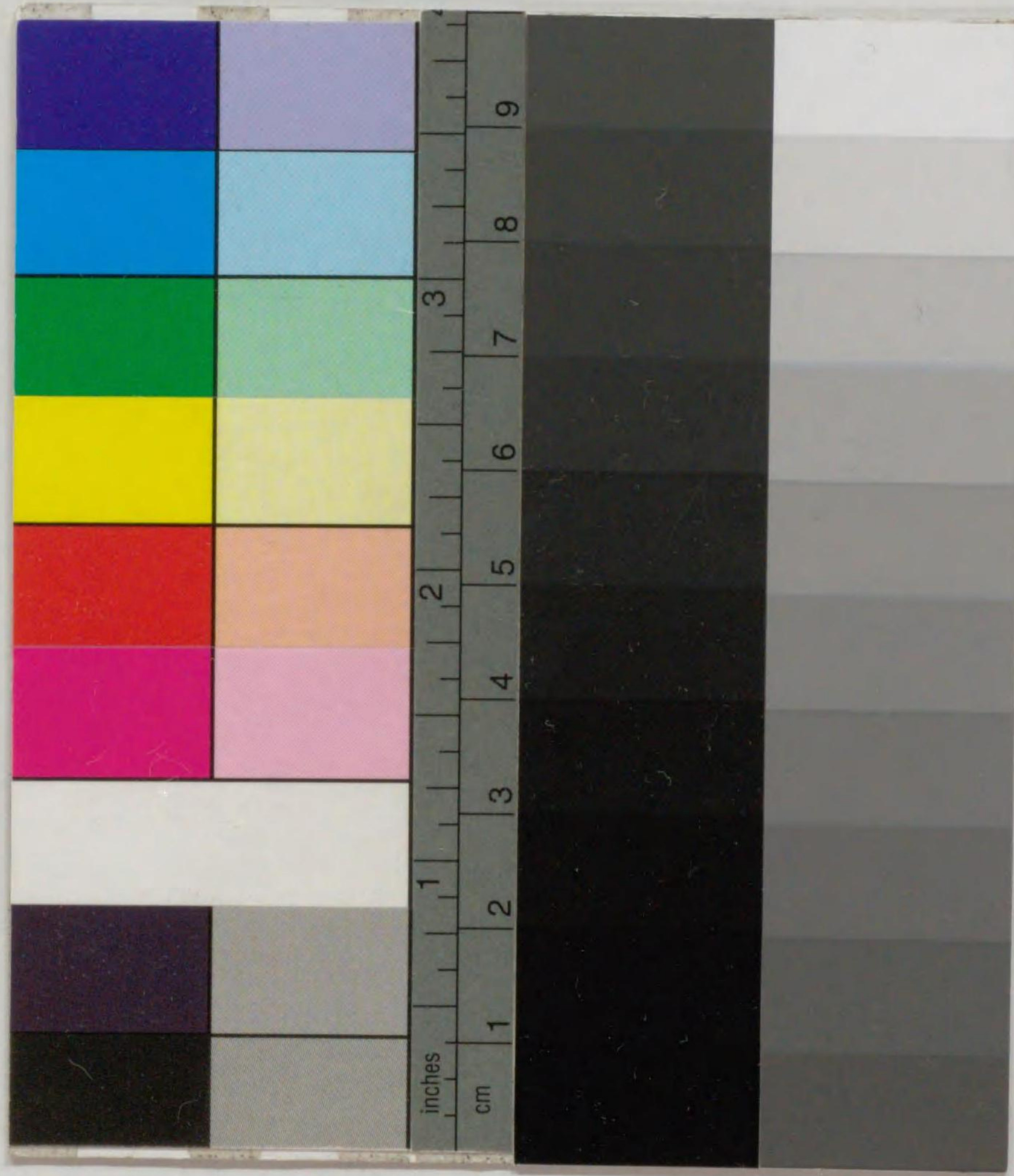
古事記

221  
10

221-10



\*1200800055841\*







古  
事  
記





22/10.

## 解題

大和國磯城郡多村大字多おほ安齋神社といふのがある。この安齋こそは古事記の撰者である。古事記は實に我國最古の史籍であつて、今は世界の學者間にも至寶と稱せられてゐる。撰者の姓は太又は多と書き、名は安齋又は安萬侶と書かれてゐる。元明天皇の和銅四年九月十八日に安齋が勅を奉じて、稗田阿禮といふ青年の舎人の誦誦してゐる古代史に據り、この書の撰を始め、翌年正月廿八に成就して進獻したのである。文字無き時代には傳ふべき事實を誦記してゐるを一つの務とする人があつた。所謂語部かたしべはこれである。阿禮もこの種の人であつたであらう。今思ふと不自然のやうに思はれるが、それは文字に慣れて記憶力が鈍つてゐるからである。今でも文字なき人はこれを爲し得てゐる。盲人は數百の歌曲を能く誦記してゐる。又目があつても全く一丁字無き人は複雑な事實を能く記憶してゐる。新教育を受けざるアイヌの老人中には、今も長編の傳説詩を誦記して居る者がある。安齋が阿禮の語に據つたと云ふことは、今思ふ程頼り無い事では無かつたのである。内容は開闢より推古天皇まで三卷に分れて居る。原書は漢文漢字を自由に驅使して、決して漢字の爲に内容を曲げず、古代獨特の語は其儘の發音を示してある。本書は讀易い爲に記載法だけを現時風にしてある。讀方は一に本居宣長の古事記傳に従つてある。古事記傳の讀方は悉く當時の讀方に當つてゐるかは問題であるが、決して遠いものではなく、且つ古事記傳の讀方は自ら莊重なる



韻律をなして、古事記の内容の句を如何にもよく顯はしてゐることは尊むべき事である。古事記を讀むと、天真流露といふことを深く感ずる。我等の祖先は形式の爲に事實を犠牲にしなかつた事を愉快に思ふ。日本武尊は普通君國の爲に一生を盡瘁した忠勇の方とのみ簡單に思はれてゐる。然るに古事記を見ると、尊は其の異常の力量あるが爲に帝に忌まれ、遠ざくる手段として遠征を命ぜられ、尊は自己の力を到る處に試みるを快として居給ひながら、時々己が一生の犠牲なるを思ひて帝を怨みて泣き給うたのである。斯くあつて始めて日本武尊といふ方がその儘の人間として我々の前に顯はるゝではないか。そして深刻なる意味を感じ得るでは無いか。やれ不穩だ、やれ猥褻だなど、神經質な植でコツ／＼事實を缺かすなど云ふ事は無かつた。古事記の有難みはこゝに在るのである。これを讀めば確に祖先に對する崇敬、邦國に對する愛護の念が起るのである。新しき人が新しき眼を以てこれを熟讀せば、今の淺はかな道學吏人の頭にある忠君愛國よりは更に深い、そして意味のある、忠君愛國の念が熾烈に起るであらう。

# 古事記 上卷

天地初發の時、高天原に成りませる神の御名は、天之御中主神。

次に、高御産巢日神。

次に、神産巢日神。

此の三柱の神は、並獨神成りまして御身を隠し給ひき。

次に、國稚く浮脂の如くにして海月如す漂へる時に、葦牙の如、萌騰る物に因りて、

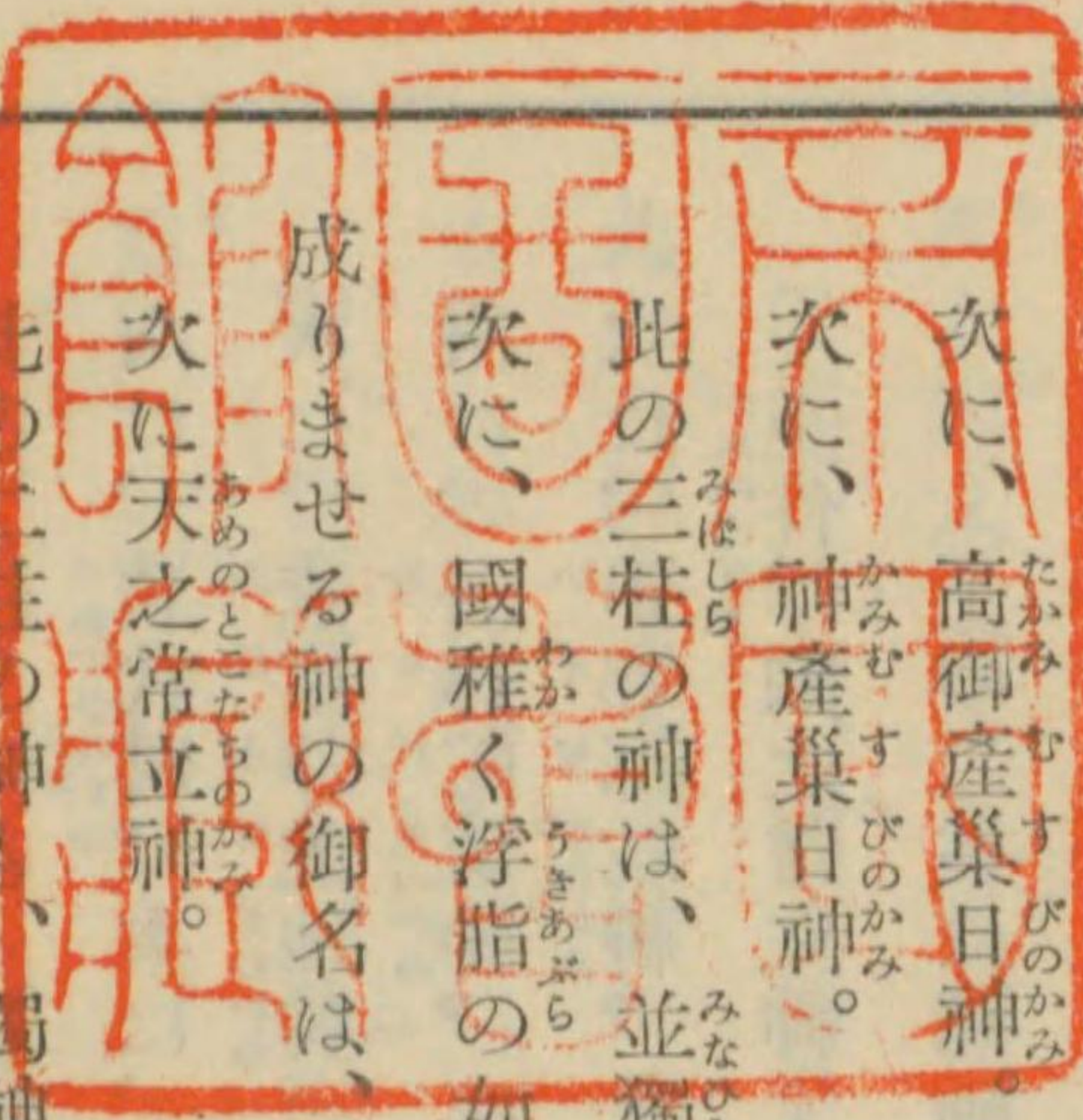
成りませる神の御名は、宇麻志阿斯訶備比古遲神。

次に天之常立神。

此の二柱の神も、獨神成りまして御身を隠し給ひき。

上件五柱の神は、別天神。

次に、成りませる神の御名は、國之常立神。





次に、豊雲野神。

此の二柱の神も、獨神成りまして御身を隠し給ひき。

次に、成りませる神の御名は、宇比地邇神。次に、妹、須比智邇神。

次に、角杵神。次に、妹、活杵神。

次に、意富斗能地神。次に、妹、大斗乃辨神。

次に、淤母陀琉神。次に、妹、阿夜訶志古泥神。

次に、伊邪那岐神。次に、妹、伊邪那美神。

上件、國之常立神より以下、伊邪那美神まで、并せて、神世七代と稱す。

申す。

於是、天つ神、諸の命以て、伊邪那岐命、伊邪那美命二柱神に、「此の漂へる國を、修理固めなせ」と詔言ちて、天の沼矛を賜ひて、言依し賜ひき。

故、二柱の神、天の浮橋に立たして、其の沼矛を指下して攪き給へば、潮こをろこ

をろに、攪き成して、引き上げ給ふ時に、其の矛の末より垂落る潮、積りて島と成る。是れ於能基呂島なり。

其の島に天降りまして、天の御柱を見立て、八尋殿を見立て給ひき。

於是、其の妹、伊邪那美命に、「汝が身は、如何に成れる」と問ひ給へば、「吾が身は

成り成りて成り合はざる處、一處あり」と曰し給ひき。

伊邪那岐命、詔り給ひつらく、「我が身は、成り成りて成り餘れる處、一處あり。故、

此の吾が身の成り餘れる處を、汝が身の成り合はざる處に、挿し塞ぎて、國土生み成

さむと思ふは、奈何に」と詔り給へば、伊邪那美命、「然、善けむ」と曰し給ひき。

爾、伊邪那岐命、「然らば、吾と汝と、是の天の御柱を行き廻り逢ひて、御所の目合

爲む」と詔り給ひき。

如此、言ひ期りて、乃ち、「汝は、右より廻り逢へ。我は、左より廻り逢はむ」と詔

り給ひ、約竟へて、廻ります時に、伊邪那美命、先づ、「あな美哉、可愛少男を」と言

り給ひ、後に、伊邪那岐命、「あな美哉、可愛處女を」と言り給ひき。



各言り給ひ竟へて後に、其妹に、「女人を、言先立ちて不良」と曰り給ひき。然れども、隱寢所に興して、御子水蛭子を生子給ひき。此の御子は、葦船に入れて、流し棄てつ。次に、淡島を生子給ひき。是も、御子の數には入らず。

於是、二柱の神、議り給ひつらく、「今、吾が生めりし御子、不良、猶、天神の御所に、自すべし」と宣り給ひて、即ち、共に參上りて、天神の命を請ひ給ひき。

爾、天神の命以て、太占に卜へて、詔り給ひつらく、「女を言先立ちしに因りて、不良、亦、還り降りて、改め言へ」と、詔り給ひき。

故、爾、還り降りまして、更に、彼の天の御柱を、先の如、往き廻り給ひき。

於是、伊邪那岐命、先づ、「あな美哉、可愛處女を」と、言り給ひ、後に、妹、伊邪那美命、「あな美哉、可愛少男を」と言り給ひき。

如是、言り給ひ竟へて、御合ひまして、御子、淡道の穗之狭別の島を生子給ひき。

次に、伊豫の二名島を生子給ふ。此の島は、身、一つにして、面、四つあり。面毎に、名あり。故、伊豫國を、愛比賣といひ、讚岐國を、飯依比古といひ、粟國を、大宜都

比賣といひ、土左國を建依別といふ。次に、隱伎の三子島を生子給ふ。亦の名は、天之忍許呂別。次に、筑紫島を生子給ふ。此の島も、身、一つにして、面、四つあり。面毎に名あり。故、筑紫の國を、白日別といひ、豊國を、豊日別といひ、肥の國を、建日向日豊久士比泥別といひ、熊曾國を、建日別といふ。次に、伊伎島を生子給ふ。亦の名は、天比登都柱といふ。次に、津島を生子給ふ。亦の名は、天之狭手依比賣といふ。次に、佐度島を生子給ふ。次に、大倭豊秋津島を生子給ふ。亦の名は、天御虛空豊秋津根別といふ。故、此の八島ぞ、先づ生みませる國なるに因りて、大八島國といふ。然て後、還りまし、時に、吉備の兒島を生子給ふ。亦の名は、建日方別といふ。次に、小豆島を生子給ふ。亦の名は、大野手比賣といふ。次に、大島を生子給ふ。亦の名は、大多麻流別といふ。次に、女島を生子給ふ。亦の名は、天一根といふ。次に、知訶島を生子給ふ。亦の名は、天之忍男といふ。次に、兩兒島を生子給ふ。亦の名は、天兩屋といふ。

吉備の兒島より、天兩屋島まで、并せて六島。



既に、國を生み竟へて、更に、神を生みます。故、生みませる神の御名は、大事忍男神。次に、石土毘古神を生みまし、次に、石巢比賣神を生みまし、次に、大戸日別神を生みまし、次に、天之吹男神を生みまし、次に、大屋毘古神を生みまし、次に、風木津別之忍男神を生みまし、次に、海神、御名は、大綿津見神を生みまし、次に、水戸神、御名は、速秋津日子神、次に妹、速秋津比賣神を生みましき。

大事忍男神より、秋津比賣神まで、并せて、十神。

此の速秋津日子、速秋津比賣二柱の神、河海に因りて、持ち別けて、生みませる神の御名は、沫那藝神。次に沫那美神。次に頰那藝神。次に頰那美神。次に、天之水分神。次に、國之水分神。次に、天之久比奢母智神。次に、國之久比奢母智神。

沫那藝神より、國之久比奢母智神まで、并せて、八神。

次に、風神、御名は、志那都比古神を生みます。次に木神、御名は、久久能智神を生みます。次に、山神、御名は、大山津見神を生みます。次に、野神、御名は、鹿屋野比賣神を生みます。亦の御名は、野椎神と謂す。

志那都比古神より、野椎神に至る、并せて四神。

此の大山津見神、野椎神二神、山野に因りて、持ち別けて、生みませる、神の御名は、天之狹土神。次に、國之狹土神。次に、天之狹霧神。次に、國之狹霧神。次に、天之闇戸神。次に、國之闇戸神。次に、大戸惑子神。次に、大戸惑女神。

天之狹土神より、大戸惑女神まで、并せて八神。

次に、生みませる神の御名は、鳥之石楠船神。亦の御名は、天之鳥船と謂す。次に、大宜都比賣神を生みまし、次に、火之夜藝速男神を生みます。亦の御名は、火之炫毘古神と謂し、亦の御名は、火之迦具土神と謂す。此の御子を生みますにより、御陰彘



えて、病み臥せり。吐氣に生りませる神の御名は、金山毘古神。次に、金山毘賣神。次に、尿に成りませる神の御名は、波邇夜須毘古神。次に、波邇夜須毘賣神。次に、尿に成りませる神の御名は、彌都波能賣神。次に、和久産巢日神。此の神の御子を、豊宇氣毘賣神と謂す。故、伊邪那美神は、火神を生みませるに因りて、遂に、神避りましぬ。

天鳥船より、豊宇氣毘賣神まで、并せて、八神。

凡て、伊邪那岐、伊邪那美二柱の神、共に生みませる島、壹拾肆島、神、參拾伍神。

(是は、伊邪那美神、いまだ、神避りまさざりし以前に、生みましつ。唯、意能碁呂島のみは、生みませるならず。又、蛭子と淡島とも、御子の數に入らず。)

故、爾、伊邪那岐命、詔り給はく、「愛しき、我が汝妹の命や、子の一木に易へつるかも」と詔り給ひて、御枕方に、匍匐ひ、御足方に、匍匐ひて、哭き給ふ時に、御涙

に成りませる神は、香山の畝尾の木の本に在す。御名は、泣澤女神。

故、其の神避りまし、伊邪那美神は、出雲國と、伯伎國との境、比婆の山に、葬しまつりき。

於是、伊邪那岐命、御佩せる、十拳劍を抜きて、其の御子、迦具土神の御頸を斬り給ふ。爾、其の御刀の鋒に著ける血、湯津石群に走り就きて、成りませる神の御名は、石拆神。次に根拆神。次に、石筒之男神。次に、御刀の本に著ける血も、湯津石群に走り就きて成りませる神の御名は、甕速日神。次に、樋速日神。次に、建御雷之男神。亦の御名は、建布都神、亦の御名は、豊布都神。次に、御刀の手上に集る血、手俣より漏き出て、成りませる神の御名は、闇淤加美神。次に、闇御津羽神。

上件、石拆神より以下、闇御津羽神以前、并せて、八神は、御刀に因りて生りませる神なり。

殺さえまし、迦具土神の御頭に、成りませる神の御名は、正鹿山津見神。次に、御



胸むねに成りませる神の御名は、淤藤山津見神おどやまつみの。次に、御腹みはらに成りませる神の御名は、奥山津見神おくやまつみの。次に、御陰みほとに成りませる神の御名は、闇山津見神くらやまつみの。次に左の御手みに、成りませる神の御名は、志藝山津見神しぎやまつみの。次に、右の御手みぎりに、成りませる神の御名は、羽山津見神はやまつみの。次に、左の御足みに、成りませる神の御名は、原山津見神はらやまつみの。次に、右の御足みぎりに、成りませる神の御名は、戸山津見神とやまつみの。

正鹿山津見神より、戸山津見神まで、并せて、八神。

故かれ、斬り給へる御刀みはかしの名は、天の尾羽張おへははりといふ。亦の名は、伊都の尾羽張いづのと謂ふ。於是こゝに、其の妹いも、伊邪那美命いせなみのみことを、相見あひまく欲おもして、黄泉國よもつくにに、追おひ往いましき。爾すなはち、殿戸どのより出いで迎むかへます時に、伊邪那岐命いせなはたけのみこと、語かたらひ給たまはく、「愛うつくしき我が汝妹命なにももの、吾あれ汝みましと作なれりし國くに、いまだ、作なり竟をへずあれば、還かへりまさね」と詔のり給たまひき。爾こゝに、伊邪那美命いせなみのみことの答こたへ給たまはく、「悔くやしきかも、速とく、來きまさずて、吾あは、黄泉竈食よもつへぐひしつ。然しかれども、愛うつくしき我が汝兄命なせの、入いり來きませる事こと、畏かしこければ、還かへりなむを、先まづ、

委曲つはらかに、黄泉神よもつかみと相論あひつらはむ、我あをな見給みひそ」斯まく白まして、其の殿内とのぬちに還かへり入り坐ませる間ま、甚いと、久ひさしくて待まちかね給たまひき。故かれ、左の御角髪みみづらに挿させる、湯津津間櫛ゆづつまぐしの、男柱おししら一つ取り闕かきて、一つ火燭びともして、入いり見みます時に、蛆集うじたかれ盪とろぎて、御頭みかしらには大雷居おほいかづちり、御胸みむねには火の雷居ほのかづちり、御腹みはらには黒雷居くろいかづちり、御陰みほとには柝雷居さくり、左の御手みぎりには若雷居わきり、右の御手みぎりには土雷居つちり、左の御足みには鳴雷居なるり、右の御足みぎりには伏雷居ふしり、并なせて八雷神やくさのちかづちがみ成なり居ゐりき。於是こゝに、伊邪那岐命いせなはたけのみこと、見畏かしこみて、逃にげ返かへります時に、其の妹いも、伊邪那美命いせなみのみこと、「吾あれに、恥見かたせ給たまひつ」と、言まし給たまひて、即やがて、泉津醜女いづみづしめを遣やはして、追おはしめき。爾かれ、伊邪那岐命いせなはたけのみこと、黒御鬘くろみかづらを取りて、投なげ棄すて給たまひしかば、乃すなはちち、蒲萄えびかづらの子こ、生なりき。是こを、拾ひひ食たむ間まに、逃にげ行いでますを、猶なほ、追おひしかば、亦また、其の右の御角髪みみづらに挿させる、湯津津間櫛ゆづつまぐしを引き闕かきて、投なげ棄すて給たまへば、乃すなはちち、筭生たかむなりき。是こを拔ひき食たむ間まに、逃にげ行いでましき。且また後のちには、彼かの八種やくさの雷神いかづちがみに、千五百ちひほの黄泉軍よもついくさを副そへて、追おはしめき。



爾、御佩せる十拳劔を抜きて、後手に振きつゝ、逃げ來ませるを、猶、追ひて黄泉比良坂の阪本に到る時に、其の阪本なる桃子を、三つ取りて、待ち撃ち給ひしかば、悉に逃げ返りき。

爾、伊邪那岐命、桃子に告り給はく、「汝吾を助けしが如、葦原の中つ國に、所有現しき青人草の、苦瀬に落ちて、患苦まむ時に、助けてよ」と告り給ひて、意富加牟豆美命といふ名を賜ひき。

最後に、其の妹、伊邪那美命、身、自ら追ひ來ましき。爾、千引石を、其の黄泉比良坂に、引き塞へて、其の石を中に置いて、相對立して、絶妻之誓を度す時に、伊邪那美命、言し給はく、「愛しき我が汝兄の命、斯く爲給はゞ、汝の國の人草、一日に千頭絞り殺さな」と申し給ひき。

爾、伊邪那岐命の詔り給はく、「愛しき我が汝妹の命、汝、然爲給はゞ、吾れはや、一日に、千五百産屋立ててな」と詔り給ひき。是を以て、一日に、必ず、千人死に、一日に必ず、千五百人なも産るゝ。

故、其の伊邪那美命を、黄泉津大神と謂す。亦、彼の追及きしによりて、道敷の大神と申すとも云へり。亦、其の黄泉の坂に、塞れりし石は、道反の大神とも號し、塞ります黄泉戸の大神とも謂す。

故、其の所謂、黄泉比良坂は、今、出雲國の伊賦夜坂となも謂ふ。

是を以て、伊邪那岐大御神、詔り給はく、「吾は、否醜目醜めき穢き國に到りて在りけり。故、吾は、大御身の禊せな」と詔り給ひて、竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原に、到まして、禊ぎ祓ひ給ひき。

故、投げ棄つる御杖に成りませる神の御名は、衝立船戸神。次に投げ棄つる御帶に、成りませる神の御名は、道之長乳齒神。次に、投げ棄つる御裳に、成りませる神の御名は、時置師神、次に投げ棄つる御衣に成りませる神の御名は、和豆良比能宇斯能神。次に、投げ棄つる御禪に、成りませる神の御名は、道俣神。次に、投げ棄つる御冠に、成りませる神の御名は、飽咋之宇斯能神。次に投げ棄つる左の御手の手纏に、成りませる神の御名は、奥疎神。次に、奥津那藝佐毘古神。次に、奥津甲斐辨羅神。次に、



投げ棄つる右の御手の手纏に、成りませる神の御名は、邊疎神。次に、邊津那藝佐毘古神。次に、邊津甲斐辨羅神。

右の件、船戸神より以下、邊津甲斐辨羅神以前、十二神は、御身に著ける物を、脱ぎ棄て給ひしに因りて、生りませる神なり。

於是、「上瀬は瀬速し、下瀬は瀬弱し」と詔り言ち給ひて、初めて、中瀬に、降り潜きて、滌ぎ給ふ時に、成りませる神の御名は、八十禍津日神。次に、大禍津日神。此の二神は、彼の穢き繁國に、到りまし、時の污垢に因りて、成りませる神なり。次に、其の禍を直さんとして、成りませる神の御名は、神直毘神。次に、大直毘神。次に、伊豆能賣神。(并せて、三神なり)。次に、水底に滌ぎ給ふ時に、成りませる神の御名は、底津綿津見神。次に、底筒之男命。中に滌ぎ給ふ時に、生りませる神の御名は、中津綿津見神。次に、中筒之男命。水の上に滌ぎ給ふ時に、生りませる神の御名は、上津綿津見神。次に、上筒之男命。此の三柱の綿津見神は、阿曇の連等が、祖神と以

ち齋く神なり。故、阿曇の連等は、此の綿津見神の御子、宇津志日金拆命の子孫なり。

其の底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命、三柱の神は、墨江の三前の大神なり。

於是、左の御目を洗ひ給ひし時に、成りませる神の御名は、天照大御神。

次に、右の御目を洗ひ給ひし時に、成りませる神の御名は、月讀命。

次に、御鼻を洗ひ給ひし時に、成りませる神の御名は、建速須佐之男命。

右の件、八十禍津日神以下、速須佐之男命以前、十四柱の神は、御身を滌ぎ給ふに因りて、生れませる神なり。

此の時、伊邪那岐命、大く歡喜して、詔り給はく、「吾は、御子生み生みて、生みの終に、三柱の貴子得たり」と詔り給ひて、即て、其の御頸珠の玉の緒、瑣々に、取り揺がして、天照大御神に賜ひて、詔り給はく、「汝命は、高天原を知らせ」と、事依して、賜ひき。故、其の御頸珠の名を、御倉板舉之神と謂す。

次に、月讀命に、詔り給はく、「汝命は、夜の食國を知らせ」と事依し給ひき。



次に、建速須佐之男命に、詔り給はく、「汝命は、海原を知らせ」と事依し給ひき。  
 故、各々、依し給へる御言の隨に、知ろしめす中に、速須佐之男命、所命し給へる  
 國を、知らさずして八拳鬚胸前に至るまで、哭泣ちき。其の泣き給ふ状は、青山を枯  
 山如す、泣き枯らし、河海は、悉に、泣き乾しき。是を以て、惡神の音なひ狭蠅如  
 す、皆沸き、萬物の妖ひ、悉に、發りき。

故、伊邪那岐大御神、速須佐之男命に、詔り給はく、「何とかも、汝は事依せる國を  
 知らさずて、哭泣ちる」と詔り給へば、答し給はく、「僕は、妣の國、根之堅洲國に罷  
 らむと欲ふが故に、哭くと申し給ひき。爾、伊邪那岐大御神、大く忿怒して、「然ら  
 ば、汝、此の國には勿住みそ」と詔り給ひて、乃ち、神逐ひに逐ひ給ひき。

故、其の伊邪那岐大御神は、淡海の多賀になも坐します。

故、於是、速須佐之男命の申し給はく、「然らば、天照大御神に請して、罷りなむ」と  
 申し給ひて、乃ち、天に參上ります時に、山川、悉に、動み、國土、皆、震りき。

爾、天照大御神、聞き驚かして、「我が汝兄の命の上り來ます由は、必ず、善しき心

ならじ。我が國を奪はむと欲すにこそ」と詔り給ひて、即ち、御髪を解き、御角髪に  
 纏かして、左右の御角髪にも、御鬘にも、左右の御手にも、各、八尺勾瓊の五百津の  
 御統の珠を纏き持たして、背には、千入之鞆を負ひ、五百入之鞆を附け、亦、稜威の  
 竹鞆を取り佩して、弓腹、振り立て、堅庭は、向股に蹈み没み、沫雪如す、蹶ゑ  
 散して、稜威の男建び、蹈み建びて、待ち問ひ給はく、「何故、上り來ませる」と問  
 ひ給ひき。

爾、速須佐之男命の答し白く、「僕は、邪心無し。唯、大御神の御言以ちて、僕が哭  
 泣ちる事を問ひ給ひし故に、白しつらく、僕は、妣の國に、往らむと欲ひて、哭くと  
 申し、かば、大御神、汝は此の國には勿住みそと、詔り給ひて、神逐ひ逐ひ給ふ故に、  
 罷往むとする状を、申さむと欲ひてこそ、參上りつれ。異心無し」と申し給へば、天  
 照大御神、「然らば、汝の心の清明きことは、何に以て知らまし」と詔り給ひき。於是、  
 速須佐之男命、「各々誓ひて、御子生まな」と答し給ふ。

故、爾、各々、天の安河を中に置きて、誓ふ時に、天照大御神、先づ、建速須佐之



男命の佩せる、十拳劍を乞ひ度して、三段に打ち折りて、瓊音も瑤々に、天の眞名井に振り滌ぎて、蹙齧に齧みて、吹き棄つる、氣吹きの狹霧に、成りませる神の御名は、多紀理毘賣命、亦の御名は、奥津島比賣命と謂す。次に、市寸島比賣命、亦の御名は、狭依毘賣命と謂す。次に、多岐都比賣命。

速須佐之男命、天照大御神の、左の御角髪に纏かせる、八尺勾瓊の、五百津の御統の珠を乞ひ度して、瓊音も瑤々に、天の眞名井に振り滌ぎて、蹙齧に齧みて、吹き棄つる、氣吹きの狹霧に、成りませる神の御名は、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命。亦、右の御角髪に纏かせる、珠を乞ひ度して、蹙齧に齧みて、吹き棄つる、氣吹きの狹霧に、成りませる神の御名は、天之菩卑能命。亦、御鬘に纏かせる、珠を乞ひ度して、蹙齧に齧みて、吹き棄つる、氣吹きの狹霧に、成りませる、神の御名は、天津日子根命。又、左の御手に纏かせる、珠を乞ひ度して、蹙齧に齧みて、吹き棄つる、氣吹きの狹霧に、成りませる神の御名は、活津日子根命。亦、右の御手に纏かせる、珠を乞ひ度して、蹙齧に齧みて、吹き棄つる、氣吹きの狹霧に、成りませる神の御名は、熊

野久須毘命。

於是、天照大御神、速須佐之男命に、告り給はく、「是後に生れませる、五柱の男子は、物實、我が物に因りて、成りませり。故、自ら、吾が御子なり。先に生れませる、三柱の女子は、物實、汝の物に因りて、成りませり。故、乃ち、汝の御子なり。」斯く、詔り別け給ひき。

故、其の先に生れませる神、多紀理毘賣命は、胸形の奥津宮に坐す。次に、市寸島比賣命は、胸形の中津宮に坐す。次に、田寸津比賣命は、胸形の邊津宮に坐す。此の三柱の神は、胸形の君等が、以ち齋く、三前の大神なり。

故、此後に生れませる、五柱の御子の中に、天菩比命の御子、建比良鳥命。  
 (此は、出雲國造、無邪志國造、上菟上國造、下菟上國造、伊自牟國造、津島縣直、遠江國造等の祖なり。)

次に、天津日子根命は、

凡河内國造、額田部湯坐連、木國造、倭田中直、山代國造、馬來多國造、道



尻岐閉國造、周芳國造、倭淹知造、高市縣主、蒲生稻寸、三枝部造等の祖なり。

爾、速須佐之男命、天照大御神に、白し給はく、「我が心、清明き故に、我が生めりし御子、弱女を得つ。此に因りて言さば、自ら我勝ちぬ」と云ひて、勝ち進びに、天照大御神の營田の畔離ち、溝埋め、亦、其の大嘗食し召す殿に、糞脱散らしき。

故、然すれども、天照大御神は、咎めずて、告り給はく、「尿なすは、酔ひて吐き散らすところ、我が汝兄の命、斯く爲つめら、又、田の畔離ち、溝埋むるは、地を可憎しところ、我が汝兄の命、斯く爲つらめ」と詔り直し給へども、猶、其の悪しき態止まずて、轉進あり。

天照大御神、忌服屋に坐しまして、神御衣織らしめ給ふ時に、其の服屋の頂を穿ちて、天の斑馬を逆剝に剝ぎて、墮し入る、時に、天の御衣織女、見驚きて、梭に陰上を衝きて、死せき。

故、於是、天照大御神、見畏みて、天の石屋戸を開て、刺し隠りましき。爾

高天原、皆暗く、葦原の中つ國、悉に闇し。此に因りて常夜往く。

於是、萬の神の聲は、狹蠅如す皆涌き、萬の妖、悉に發りき。

是を以て、八百萬神、天の安河原に、神集ひ集ひて、高御産巢日神の御子、思金神に思はしめて、常夜の長鳴鳥を集へて、鳴かしめて、天の安河の河上の、天の堅石を取り、天の金山の、鐵を取りて、鍛人、天津麻羅を求ぎて、伊斯許理度賣命に科せて、鏡を作らしめ、玉祖命に科せて、八尺の勾瓏の、五百津の御統の珠を作らしめて、天の兒屋命、布刀玉命を召びて、天香山の眞男鹿の肩を全抜きに抜き、天香山の、天の朱櫻を取りて、占へ度はしめて、天香山の五百津眞賢木を、根抜に掘じて、上枝に、八尺の勾瓏の、五百津の御統の珠を取り著け、中枝に、八咫鏡を取り繫け、下枝に、白和幣、青和幣を取り垂で、此の種々の物は、布刀玉命、太御幣帛と、取り持たして、天兒屋命、太祝詞事、禱ぎ白して、天手力男神、御戸の側に、隠り立たして、天受賣命、天香山の天の蘿を、襷に繫けて、天の眞拆葛を鬘として、天香山の小竹葉を、手草に結ひて、天の石屋に、空笥伏せて、蹈み動響し、神懸りして、胸乳を搔き



出で、裳緒を陰上に押垂れき。爾、高天原、動りて、八百萬の神、共に咲ひき。

於是、天照大御神、怪しと思ほして、天の石屋戸を細目に開きて、内より告り給へるは、「吾が隠りますに因りて、天原自ら闇く、葦原の中つ國も、皆闇けむと思ふを、何故、天宇受賣は樂びし、亦、八百萬神、諸、咲ふぞ」と詔り給ひき。

爾、天宇受賣、「汝が命に益りて、貴き神坐すが故に、歡喜咲樂ぶ」と言しき。斯く言す間に、天兒屋命、布刀玉命、其の鏡を指し出で、天照大御神に、示せ奉る時に、天照大御神、愈、奇しと思ほして、稍、戸より出で、臨みます時に、其の隠り立てる、天手力男神、其の御手を取りて、引き出しまつりき。即ち、布刀玉命、注連繩を其の御後方に、引き度して、「此より内にな還り入りましそ」と白しき。故、天照大御神、出でませる時に、高天原も葦原の中つ國も、自ら照り明りき。

於是、八百萬の神、共に議りて速須佐之男命に、千位置戸を負せ、亦、鬚を切り、手足の爪をも抜かしめて、神逐ひ逐ひき。又、食物を、大氣津比賣の神に乞ひ給ひき。爾、大氣都比賣、鼻口又尻より、種々

の美味物を取り出で、種々作り具へて、進る時に、速須佐之男命、其の態を立ち伺ひて、穢汚物進ると思ほして、乃ち其の大宜津比賣神を殺し給ひき。故、殺さえ給へる神の、身に、生れる物は、頭に、蠶生り、二つの目に、稻種生り、二つの耳に、粟生り、鼻に小豆生り、陰に、麥生り、尻に、大豆生りき。故、是に、神産巢日御祖命、茲を取らしめて、種となし給ひき。

故、逐はえて、出雲國の肥の河上なる、鳥髪の地に降りましき。此時しも、箸、其の河より、流れ下りき。於是、須佐之男命、其の河上に人ありけりと思ほして、尋覓上り往でまし、かば、老夫と老女と二人在りて、童女を中に置ゑて泣くなり。「汝等は誰ぞ」と問ひ給へば、其の老夫、「僕は國つ神、大山津見神の子なり。僕が名は、足名椎、妻が名は、手名椎、女が名は、櫛名田比賣と謂す」と答す。亦、「汝の哭く由は何ぞ」と問ひ給へば、「我が女は、本より八稚女ありき。是に、高志の八俣大蛇なも、年毎に來て、喫ふなる。今、其れ、來ぬべき時なるが故に、泣く」と答白す。「其の形は、如何さまにか」と問ひ給へば、「彼が目は、赤加賀知なして、身一つに、頭八つ、



尾八つあり。亦、其の身に、蘿及、檜楳生ひ、其の長さ、谿八谷、尾八尾を度りて、其の腹を見れば、悉に、常も、血爛れたり」と、答す。（此に、赤加賀知といへるは今の酸漿なり）。

爾、速須佐之男命、其の老夫に、「是れ、汝の女ならば、吾に奉らむや」と詔り給ふに、「恐れれど、御名を知らず」と答せば、「吾は、天照大御神の同母兄なり。故、今、天より降りましつ」と答詔へ給ひき。爾、足名椎手名椎神、「然まさば、恐し、奉らんと白しき。」

爾、速須佐之男命、乃ち、其の童女を、湯津爪櫛に取り化して、御角髪に刺さして、其の足名椎、手名椎神に告り給はく、「汝等、八鹽折の酒を醸み、且、垣を作り廻し、其の垣に、八つの門を作り、門毎に、八つの假殿を結び、其の假殿毎に、酒船を置き、船毎に、其の八鹽折の酒を盛りて、待ちてよ」と詔り給ひき。故、告り給へる隨にして、如此設け備へて待つ時に、其の八俣大蛇、信に、言ひしが如來つ。乃ち、船毎に、己頭を垂入て、其の酒を飲みき。於是、飲み酔ひて、皆、伏し寝たり。

爾、速須佐之男命、其の御佩せる、十拳劔を抜きて、其の蛇を切り散り給ひしかば、肥の河、血に變りて流れき。故、其の中の尾を切り給ふ時、御刀の刃毀けき。怪しと思ほして、御刀の前以て、刺し割きて、見そなはし、かば、都牟刈の大刀あり。故、此の大刀を取らして、異物ぞと思ほして、天照大御神に、白し上げ給ひき。是は、草薙の大刀なり。

故、是を以て、其の速須佐之男命、宮造るべき地を、出雲國に、求ぎ給ひき。爾、須賀の地に到りまして、詔り給はく、「吾、此に來まして、我が御心清々し」と詔り給ひて、其地になも、宮作りて坐ましける。故、其地をば、今に、須賀とぞいふ。

茲の大神、初め須賀の宮作らし、時に、其地より雲立ち騰りき。爾、御歌作し給ふ。其の御歌は

彌雲起つ 出雲彌重垣 夫妻隱みに 彌重垣造る 其の彌重垣を  
於是、彼の足名椎神を喚して、「汝は我が宮の首たれ」と告り給ひ、且、名を稻田の宮主、須賀之八耳神と、負せ給ひき。



故、其の櫛名田比賣を以て、隱寢所に起して、生みませる神の御名を八島士奴美神といふ。又、大山津見神の御女、名は神大市比賣に娶ひて、御子、大年神。次に、宇迦之御魂神を生みましき。

御兄、八島士奴美神、大山津見神の御女、名は木花知流比賣に娶ひて、生みませる御子、布波能母遅久奴須奴神。此の神、淤迦美神の女、名は日河比賣に娶ひて、生みませる御子、深淵之水夜禮花神。此の神、天之都度閉知泥神に娶ひて、生みませる御子、淤美豆奴神、此の神、布怒豆怒神の女、名は、布帝耳神に娶ひて、生みませる御子、天之冬衣神。此の神、刺國大神の女、名は、刺國若比賣に娶ひて、生みませる御子、大國主神、亦の名は、大穴牟遲神と謂し、亦の名は、葦原色許男神と謂し、亦の名は八千矛神と謂し、亦の名は、宇都志國玉神と謂す。并せて、御名五つあり。故、此の大國主神の御兄弟、八十神在しき。然れども、皆、國は、大國主神に避りまつりき。

避りまつりし所以は、其の八十神、各々、稻羽の八上比賣を婚はむの心ありて、共

に、稻羽に行きける時に、大穴牟遲神に、袋を負せ、從者として率て往きき。於是、氣多の前に到りける時に、赤裸なる菟伏せり。八十神、其の菟に言ひけらく、「汝、爲むは、此の潮を浴み、風の吹くに當りて、高山の尾上に、伏してよ」といふ。故、其の菟、八十神の教ふる從にして伏しき。爾其の潮の乾く隨に、其の身皮、悉に、風に吹き拆えし故に、痛みて泣き伏せれば、最後に來ませる大穴牟遲神、其の菟を見て、「何故汝泣き伏せる」と問ひ給ふに、菟、答言く、「僕、淤岐島に在りて、此の地に、度らまく欲りつれども、度らむ因なかりし故に、海の鰐を欺きて、言ひけらく、吾と汝と、族の多き少きを競べてむ。故、汝は、其の族のありの悉、率て來て、此の島より氣多の前まで、皆列み伏し度れ、吾、其の上を踏みて、走りつ、讀み度らむ。於是、吾が族と、何れ多きといふ事を知らむ。かく言ひしかば、欺かえて列み伏せりし時に、吾、其の上を踏みて、讀み度り來て、今、地に下りむとする時に、吾、汝は、我に欺かえつと、言ひ竟れば、即ち、最端に伏せる鰐、我を捕へて、悉に、我が衣服を剥ぎき。此に因りて、泣き患ひしかば、先立ちて行でまし、八十神の御言以て、潮を浴



みて、風に當り伏せれと、誨へ給ひき。故、教の如爲しかば、我が身、悉に、傷はえつ」と告す。是於、大穴牟遲神、其の菟に教へたまはく、「今、急く、此の水門に往きて、水以て、汝が身を洗ひて、即ち、其の水門の蒲黄を取りて、敷き散らして、其の上に輾轉びてば、汝が身、本の膚の如、必ず癒えなむものぞ」と教へ給ひき。故、教の如爲しかば、其の身、本の如くになりき。此、稻羽の素菟といふ者なり。今に、菟神となもいふ。故、其の菟、大穴牟遲神に白さく、「此の八十神は、必ず、八上比賣を得給はじ、帛を負ひ給へれども、汝が命ぞ獲給ひなむ」と白しき。

於是、八上比賣、八十神に答へけらく、「吾は、汝等の言は聞かじ、大穴牟遲神に嫁はな」といふ。

故、爾、八十神怒りて、大穴牟遲神を殺さむと、共議りて、伯伎國の山本の山に至りて、云ひけるは、「此の山に、赤猪あるなり。故、我共追ひ下りなば、汝、待ち取れ。若し、待ち取らずば、必ず、汝を殺さむ」といひて、猪に似たる大石を、火以て焼きて、轉ばし落しき。爾、追ひ下り、取る時に、其の石に焼き著かえて、死せ給ひ

き。

爾、其の御祖命、哭き患ひて、天に參上りて、神産巢日之命に請し給ふ時に、乃ち、蜺貝比賣と蛤貝比賣とを遣せて、作り活さしめ給ふ。爾、蜺貝比賣、研磨焦して、蛤貝比賣、水を持ちて、母の乳汁と塗りしかば、麗しき壯夫に成りて、出で遊行きき。

於是、八十神見て、且欺きて、山に率て入りて、大樹を切り伏せ、矢を茹め、其の木に打ち立て、其の中に入らしめて、即ち、其の氷目矢を打ち離ちて、拷殺しき。

爾、亦、其の御祖命、哭きつゝ、求げば、見得て、即ち、其の木を拆きて、取り出で活して、其の御子に、告り給はく、「汝、此間にあらば、遂に、八十神に滅さえなむ」と詔り給ひて、乃ち、木の國の大屋毘古神の御所に、速がし遣り給ひき。

爾、八十神、覓ぎ追ひ至りて、矢刺す時に、木の俣より、漏き逃れて、去り給ひき。御祖命、御子に告り給はく、「須佐能男命の坐します、根堅洲國に、參向てよ。必ず、其の大神、議り給ひなむ」と詔り給ふ。

故、詔命の隨、須佐之男命に御所に、參到たりしかば、其の御女、須勢理毘賣出で



見て、目交ひして相婚ひまして、還り入りて、其の御父に、「甚麗しき神參來つ」と言し給ひき。

爾、其の大神、出で見て、「此は、葦原色許男といふ神ぞ」と告り給ひて、即て、喚び入れて、其の蛇の室屋に寝しめ給ひき。於是、其の御妻、須勢理毘賣命、蛇の振物を、其の夫に授けて、曰り給はく、「其の蛇、喰はむとせば、此の振物を三度擧りて、打ち撥ひ給へ」と詔り給ふ。故、教の如、爲給ひしかば、蛇、自ら静りし故に、平く寝て、出で給ひき。亦、來日の夜は、吳公と蜂との室屋に、入れ給ひしを、且、吳公、蜂の振物を授けて、先の如教へ給ひし故に、平くて出で給ひき。亦、鳴鏑を大野の中に射入れて、其矢を採らしめ給ふ。故其の野に入ります時に、即ち、火以て、其の野を焼き廻らしつ。於是、出でむ所を知らざる間に、鼠來て、いひけるは、「内は洞々、外は窄々」斯くいふ故に、其處を蹈みしかば、落ち入り、隠りし間に、火は焼け過ぎぬ。爾、其の鼠、其の鳴鏑を咋ひ持ち出で來て奉りき。其の矢の羽は、其の鼠の子等、皆喫ひたりき。

於是、其の御妻、須世理毘賣は、喪具を持ちて、哭きつ、來まし、其の父の大神は、既に死せぬと思ほして、其の野に出で立たせば、爾、其の矢を持ちて奉る時に、家に率て入りて、廣間の大室に、喚び入れて、其の御頭の鼠を取らせ給ひき。故、其の御頭を見れば、吳公多かり。於是、其の御妻、椋の木の実と赤土とを、其の夫に授け給へば、其の木の實を咋ひ破り、赤土を含みて唾出し給へば、其の大神、吳公を咋ひ破りて唾きいだすと、思ほして、御心に愛しく思ほして、御寝ましき。

爾、其の大神の御髪を握りて、其の室の椽毎に、結び著けて、五百引岩を、其の室の戸に、取り塞へて、其の御妻、須世理毘賣を負ひて、其の大神の生大刀、生弓矢、又、其の天の詔琴を取り持たして、逃げ出でます時に、其の天の詔琴、樹に衝突れて、地、動鳴きき。

故、其の御寝ませる大神、聞き驚かして、其の室を引き出し給ひき。然れども、椽に結へる御髪を、解かする間に、遠く逃げ給ひき。故、爾、黄泉比良坂まで、追ひ至でまして、遙に望けて、大穴牟遲神を呼ばひて曰り給はく、「其の汝が持たる生大刀、



生弓矢を以て、汝が庶兄弟どもをば、坂の御尾に追ひ伏せ、河の瀬に追ひ撥ひて、汝、大國主の神と爲り、亦、宇都志國玉の神と爲りて、其の我が女、須世理毘賣を嫡妻として、宇迦の山の山本に、底津石根に、宮柱太知り、高天原に氷椽高知りて居れ。是奴よ」と詔り給ひき。

故、其の大刀、弓を持ちて、其の八十神を追ひ避くる時に、坂の御尾毎に、追ひ伏せ、河の瀬毎に、追ひ撥ひて、國作り始め給ひき。

故、其の八上比賣は、先の期の如、御寢處與しつ。故、其の八上比賣は、率て來ましつれども、其の嫡妻、須世理毘賣を畏みて、其の生みませる御子をば、木の俣に挿し挟みて、返りましき。故、其の御子の御名を、木俣神と云す。亦の御名は、御井神とも謂す。

此の八千矛神、高志國の沼河比賣を婚ひに幸行し、時、其の沼河比賣の家に到りて、歌ひ曰く。

八千矛の

神の命は

八島國

妻覓ぎ不得て

遠々し

越の國に

賢し女を

有りと聞かして

麗し女を

有りと聞こして

眞結婚に

在り立たし

結婚に

在り通はせ

大刀が緒も

未だ解かずて

覆面をも

未だ解かねば

處女の

鳴すや板戸を

押ぶらひ

吾が立たせれば

引づらひ

吾が立たせれば

青山に

鶴は鳴き

さ野つ鳥

雉は響む

庭つ鳥

鶏は鳴く

慨れたくも

鳴くなる鳥哉

此の鳥も

打ち病め乞望ね

いしたふや

天馳せ使

事の

語り言も

是をば

爾、其の沼河日賣、未だ戸を開かずて、内より歌ひ給はく、

八千矛の

神の命

萎草の

女にしあれば

吾が心

浦渚の鳥ぞ

今こそは

千鳥にあらめ

後は

平和にあらむを

命は

莫死せ給ひそ



いしたふや

天馳せ使

事の

語り言も

是をば

日は隠らば

烏玉の

夜は出でなむ

青山に

日が隠らば

烏玉の

夜は出でなむ

朝日の

咲み榮え來て

拷綱の

白き腕

沫雪の

手弱る胸を

静叩き

叩き互抱り

眞玉手

玉手差纏き

股長に

寝はなさむを

あやに

勿戀詔し

八千矛の

神の命

事の

語り言も

是をば

故、其の夜は、娶さずて、明くる日の夜、娶ひ爲給ひき。

又、其の神の後嫡、須勢理比賣命、甚く嫉妬し給ひき。

出雲より倭の國に、上りまさむとして、束装し立たす時に、片御手は、御馬の鞍に懸

け、片御足、其の御鏡に踏み入れて、歌ひ曰く、

烏玉の

黒き御衣を

眞具さに

取り装ひ

奥つ鳥

胸見る時

緒揚ぎも

此は宜はず

邊つ波

磯に脱ぎ棄て

鳩鳥の

青き御衣を

眞具さに

取り装ひ

奥つ鳥

胸見る時

緒揚ぎも

此も宜はず

邊つ波

磯に脱ぎ棄て

山縣に

求ぎし

茜春き

染め木が汁に

染め衣を

眞具さに

取り装ひ

奥つ鳥

胸見る時

緒揚ぎも

此し宜し

最愛子やの

妹の命

群鳥の

吾が群れ往なば

引け鳥の

吾が引け往なば

泣かじとは

汝は言ふとも

山處の

一本薄

項傾し

汝が泣かさまく

朝雨の

狭霧に起たむぞ

若草の

妻の命

事の

語り言も

是をば

爾、其の後、大御酒杯を取らして、立ち寄り指擧げて、歌ひ給はく、





八千矛の

神の命や

吾が大國主こそは

男に坐せば

打ち見る

島の崎々

搔き見る

磯の崎落ちず

若草の

妻持たせらめ

吾はもよ

女にしあれば

汝除きて

夫はなし

汝除きて

夫はなし

綾帷帳の

輕やが下に

蒸し被

柔やが下に

栲被

清ぐが下に

沫雪の

手弱る胸を

栲綱の

白き腕

静叩き

叩き互抱り

眞玉手

玉手差纏き

股長に

寝をしなせ

豊御酒

獻らせ

斯く歌ひて、即ち、契して、親並居りて、今に至るまで鎮ります、此を神語といふ。

故、此の大國主命、胸形の奥津宮に坐す神、多紀理毘賣命に娶ひて、生みませる御

子、阿遲鉏高日子根神。次に、妹、多比賣命、亦の御名は、下光比賣命。此の阿遲鉏

高日子根神は、今、迦毛大御神と申す神なり。

大國主神、亦、神屋楯比賣命に娶ひて、生みませる御子、事代主神。亦、八島牟遲

能神の女、鳥耳神に娶ひて、生みませる御子、鳥鳴海神。此の神、日名照額田毘道男

伊許知邇神に娶ひて、生みませる御子、國忍富神。此の神、葦那陀迦神、亦の名は、

八河江比賣に娶ひて、生みませる御子、速甕之多氣佐波夜遲奴美神。此の神、天之甕

主神の女、前玉比賣に娶ひて、生みませる御子、甕主日子神。此の神、淤迦美神の女、

比那良志毘賣に娶ひて、生みませる御子、多比理岐志麻流美神。此の神、比比羅木之

其花麻豆美神の女、活玉前玉比賣神に娶ひて、生みませる御子、美呂浪神。此の神、

敷山主神の女、青沼馬沼押比賣に娶ひて、生みませる御子、布忍富鳥鳴海神。此の神、

若晝女神に娶ひて、生みませる御子、天日腹大科度美神。此の神、天狹霧神の女、遠

津待根神に娶ひて、生みませる御子、遠津山岬多良斯神。

右の件、八島士奴美神より以下、遠津山岬帶神以前、十七世の神といふ。

故、大國主神、出雲の御大の御前に坐す時に、波の穂より、天の蘿の船に乗りて、

蛾の皮を全剝に剝ぎて、衣服にして、依り來る神あり。爾、其の名を問はずれども、



答へず。且、御從の諸神に問はずれども、皆、「知らず」と白しき。

爾、蟾蜍白さく、「此は久延毘古そ必ず知りたむ」と申せば、即ち、久延毘古を召して、問はず時に、「此は、神産巢日神の御子、少名毘古那神なり」と答白しき。

故、爾、神産巢日御祖命に白し上げしかば、「此は、實に、我が御子なり。御子の中に、我が手僕より漏墮し御子なり。故、汝、葦原色許男命と、兄弟と爲りて、其の國作り堅めよ」と詔り給ひき。

故、それより、大穴牟遲と少名毘古那と、二柱の神相並ばして、此の國作り堅め給ひき。然後には、其の少名毘古那神は、常世の國に度りまじき。故、其の少名毘古那神を顯し申せりし、所謂久延毘古は、今に山田の案山子といふ者なり。此の神は、足は歩行かねども、天の下の事を、盡に知れる神にもありける。

於是、大國主神愁ひまして、「吾獨りして、いかでかも此の國を得作らむ。孰れの神と共に、吾は、此の國を相作らまし」と告り給ひき。是の時に、海を光して寄り來る神あり。其の神の言り給はく、「我が御前を能く治めてば、吾、共與に、相作り成して

む。若し然らずば、國成り難まし」と言り給ひき。爾、大國主神曰し給はく、「然らば、治め奉らむ状は奈何ぞ」と曰し給へば、吾をばも、倭の青垣東山の上に、齋き祀れ」と答言給ひき。此は、御諸の山の上に坐す神なり。

故、其の大年神、神活須毘神の女、伊怒比賣に娶ひて、生みませる御子、大國御魂神。次に、韓神。次に、曾富理神。次に、白日神。次に、聖神。(五神)

又、香用比賣に娶ひて、生みませる御子、大香山戸臣神。次に、御年神。(二柱)

又、天知迦流美豆比賣に娶ひて、生みませる御子、奥津日子神。次に、奥津比賣命、亦の名は、大戸比賣神。此は、諸人の以ち拜く竈の神なり。次に、大山咋神、亦の名

は、山末之大主神。此の神は、近淡海國の日枝山に坐す。又、葛野の松の尾に坐す、鳴鏑に化りませる神なり。次に、庭津日神。次に、阿須波神。次に、波比岐神。次に、香山戸臣神。次に、羽山戸神。次に、庭高津日神。次に、大土神。亦の名は、土之御祖神。(九神)

上の件、大年神の御子、大國御魂神より以下、大土神以前、并せて十六神。



羽山戸神、大氣都比賣神に娶ひて、生みませる御子、若山咋神。次に、若年神。次に、妹若沙那賣神。次に、彌豆麻岐神。次に、夏高津日神。亦の名は、夏之賣神。次に、秋毘賣神。次に、久久年神。次に、久久紀若室葛根神。

上の件、羽山戸神の御子、若山咋神より以下、若室葛根神以前、并せて八神。

天照大御神の御言以て、「豊葦原之千秋長五百秋之水穗國は、我が御子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の知らさむ國」と言依さし給ひて、天降し給ひき。

於是、天忍穗耳命天の浮橋に立たして、詔り給はく、「豊葦原之千秋長五百秋水穗國は、甚く喧擾ぎてありけり」と告り給ひて、更に、還り上らして、天照大御神に、請し給ひき。

爾、高御産巢日神、天照大御神の御言以て、天の安河の河原に、八百萬の神を、神集へに集へて、思金神に思はしめて、詔り給はく、「此の葦原の中國は我が御子の知らさむ國と、言依さし給へる國なり。故、此の國に、千早振る荒ぶる國神等の多なる」と

思ほすは、何れの神を使はしてか、歸服まし」と詔り給ひき。

爾、思金神、又、八百萬の神等議りて、「天菩比神、是れ遣はしてむ」と白しき。故、天菩比神を遣はしつれば、乃て、大國主神に、媚び附きて、三年になるまで、復言奏さざりき。

是以、高御産巢日神、天照大御神、亦、諸の神等に問ひ給はく、「葦原の中國に遣はせる、天菩比神、久しく復言奏さす。亦、何れの神を使はしては吉けむ」爾、思金神、答白しけらく、「天津國玉神の子、天若日子を遣はしてむ」と白しき。

故、爾、天之眞鹿兒弓、天之羽張矢を、天若日子に賜ひて遣しき。於是、天若日子、其の國に降り到きて、即ち、大國主神の女、下照比賣を娶とし、亦、其の國を獲むと慮りて、八年に至る迄、復言奏さざりき。

故、爾、天照大御神、高御産巢日神、亦、諸の神等に問ひ給はく、「天若日子、久しく復言奏さす。又、何れの神を遣はしてか、天若日子が久しく留る所由を、問はしめむ」と問ひ給ひき。於是、諸の神等、及、思金神答白さく、「雉名鳴女を遣はしてむ」



と白す時に、詔り給はく、「汝、行きて、天若日子に問はむ状は、汝を葦原の中國に使はせる所以は、其の國の荒ぶる神等を、歸服和せとなり。何ぞや、八年に至るまで、復言奏さざると、問へ」と詔り給ひき。

故、爾、鳴女、天より降り到きて、天若日子が門なる、湯津楓の上に居て、委曲に、天つ神の詔命の如、言りき。爾、天の探女、此の鳥の言ふことを聞きて、天若日子に、「此鳥は、鳴く音甚惡し。射殺し給ひね」と言ひ進むれば、即ち、天若日子、天つ神の賜へる、天の櫛弓、天の鹿兒矢を持ちて、其の雉を射殺しつ。

爾、其の矢、雉の胸より通りて、逆に、射上げらえて、天の安河の河原に坐します、天照大御神、高木神の御所に逮りき。是の高木神は、高御産巢日神の別の御名なり。故、高木神、其の矢を取らして、見すれば、其の矢の羽に、血、著きたりき。

於是、高木神、「此の矢は、天若日子に賜へりし矢ぞかし」と告り給ひて、諸の神等に示せて、詔り給へらくは、「或、天若日子、御命を誤へず、惡神を射たりし矢の來つるならば、天若日子に中らざれ。或、邪心しあらば、天若日子、此の矢に凶れ」

と云り給ひて、其の矢を取らして、其の矢の穴より、衝き返し給ひしかば、天若日子が胡床に寝たる、高胸に中りて死せにき。亦、其の雉還らず。故、今に、諺に、雉の單使といふ本、是れなり。

故、天若日子が妻、下照比賣の哭せる聲、風の輿響きて、天に到りき。於是天なる天若日子が父、天津國玉神、又、其の妻子ども聞きて、降り來て哭き悲みて、乃ち、其處に、喪屋を作りて、河鴈を死者食持とし、鷺を掃持とし、翠鳥を御食人とし、雀を碓女とし、雉を哭女とし、斯く行ひ定めて、日八日、夜八夜を樂びたりき。

此の時、阿遲志貴高日子根神來まして、天若日子が喪を弔ひ給ふ時に、天より降り到つる天若日子が父、亦、其の妻、皆哭きて、「我が子は死なずてありけり、我が君は死なずてましけり」といひて、手足に取り懸りて、哭き悲みき。其の過てる所以は、此の二柱の神の容姿、甚、能く似たり、故、是を以て、過てるなりけり。

於是、阿遲志貴高日子根神、大く怒りて曰らく、「我は、愛しき友なれこそ、弔ひ來つれ。何とかも、吾を穢き死人に比ふる」と云ひて、御佩せる十掬劍を抜きて、其の



喪屋を切り伏せ、足以て蹶離ち遣りき。此は、美濃國の藍見河の河上なる喪山といふ山なり。其の持ちて切れる大刀の名は、大量といふ。亦の名は、神度劍ともいふ。故、阿治志貴高日子根神は、忿りて飛び去り給ふ時に、其の同母妹、高比賣命、其の御名を顯さんと思ひて、歌ひけらく、

天在や

弟機織女の

頸懸せる

玉の御統る

御統るに

穴玉映や

眞谷

二巨らす

阿治志貴

高比古根の

神ぞや

此の歌は夷振なり。

於是、天照大御神、詔り給はく、「亦、何れの神を遣はしては吉けむ」。爾、思金神、及、諸の神等白しけらく、「天の安河の河上の天の石屋に坐す、名は、伊都之尾羽張神、是れ遣はすべし。若し又、此の神ならずば、其の神の御子、建御雷之男神、此れ遣はすべし。且、其の天の尾羽張神は、天の安河の水を、逆に塞ぎ上げて、道を塞ぎ居れば、佗神は得行かじ。故、別に、天迦久神を遣はして、問ふべし」と白しき。

故、爾、天迦久神を使はして、天尾羽張神に問ふ時に、「畏し、仕へ奉らむ。然れども、此の道には、僕が子、建御雷神を遣はすべし」と答して、乃ち、貢進りき。爾、天鳥船神を建御雷神に副へて遣はしき。

是を以て、此の二神、出雲國の伊那佐之小濱に、降り到きて、十拳劍を抜きて、浪の穂に、逆に刺し立て、其の劔の前に、跌坐て、其の大國主命に、問ひ給はく、「天照大御神、高木神の御命以て、問ひに使はせり。汝が所領る、葦原の中つ國は、我が御子の知らさむ國、と言依さし給へり。故、汝が心、奈何にぞ」と問ひ給ふ時に、答へ白らく、「僕は、得白さじ。我が子、八重言代主神、是れ白すべきを、鳥狩の遊、捕魚しに、御大の前に往きて、未だ還り來ず」と白しき。

故、爾、天鳥船神を遣はして、八重言代主神を徵して、問ひ給ふ時に、其の父の大神に、「恐し、此の國は、天つ神の御子に奉り給へ」といひて、即ち、其の船を踏み傾けて、天の逆手を青柴垣に拍ち化して隠りましき。故、爾、其の大國主神に問ひ給はく、「今、汝が子、事代主神、斯く白しぬ。亦、白



すべき子ありや」と問ひ給ひき。

於是、亦、白しつらく、「亦、我が子、建御名方の神あり。此れを除きてはなし」  
如此、白し給ふ折しも、其の建御名方神、千引岩を手端に攀ぎて来て、「誰れぞ、我が  
國に来て、密々、斯く物言ふ、然らば、力競べせむ。故、我、先づ其の御手を取らむ」  
といふ。故、其の御手を取らしむれば、即ち、立氷に捉り化し、亦、劔刃に捉り化し  
つ。故爾、懼れて、退き居り。爾、其の建御名方神の手を取らむと、乞ひ返して取れ  
ば、若輩を取るが如、握み搾ぎて、投げ離ち給へば、即ち逃げ去にき。故、追ひ往き  
て、科野國の洲羽海に迫め到りて、殺さむとし給ふ時に、建御名方神、白しつらく、  
「恐し、我をな殺し給ひそ。此の地を除きては、佗所に行かじ。亦、我が父、大國  
主神の御命に違はじ。八重事代主神の言に違はじ。此の葦原の中つ國は、天つ神の御  
子の御言の隨に、獻らむ」と白し給ひき。

故、更に、且、還り来て、其の大國主神に問ひ給はく、「汝が子等、事代主神建御名  
方神二神は、天つ神の御子の御言の隨に、違はじと白しぬ。故、汝が心、奈何ぞ」と  
問ひ給ひき。爾、答へ白らく、「僕が子等二神の白せる隨に、僕も違はじ。此の葦原の  
中つ國は、御命の隨に、既に獻らむ。唯、僕が住所をば、天つ神の御子の、天つ日嗣  
知しめさむ、富足る天の御巢如して、底つ石根に、宮柱太知り、高天の原に、氷木高  
知りて、治め給はゞ、僕は、百足らず八十隅道に、隠りて侍ひなむ。亦、僕が子等、  
百八十神は、八重事代主神、神の御前後となりて、仕へ奉らば、違ふ神はあらじ」如  
此白して、乃ち、隠りましき。

故、白し給ひし隨に、出雲國の多藝志之小濱に、天の御舎を造りて、水戸神の孫、  
櫛八玉神を膳夫として、天の御饗獻る時に、禱ぎ白して、櫛八玉神、鶺鴒に化りて、海  
底に入りて、底の埴を咋ひ出でて、天の八十平瓮を作りて、海布の莖を茹りて、燧白  
に作り、海蓴の莖を燧杵に作りて、火を鑽り出で、云しけらく、「是の我が燧れる火は、  
高天の原には、神産巢日御祖命の、富足る天の新巢の煉煙の、八拳垂るまで焼き擧げ、  
地の下は、底つ石根に、焼き凝して、栲繩の千尋繩打延へ、釣らせる海人が、大口の  
小鰭鱸、噪々に、引き寄せ揚げて、拆竹の撓々に、天の眞魚咋獻らん」と白しき。



故、建御雷神、返り參上りて、葦原の中つ國、歸服和平しぬる狀を、復奏白し給ひ

爾、天照大御神、高木神の御命以て、太子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命に、詔り給はく、「今、葦原の中つ國、平け訖へぬと白す。故、言依し給へりし隨に、降りまして

知しめせ」と、詔り給ひき。  
爾、其の太子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の答白し給はく、「僕は降りなむ裝束せし間に、御子、生れました。御名は、天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命。此の御子を降すべし」と、白し給ひき。

此の御子は、高木神の御女、萬幡豊秋津師比賣命に御合ひまして、生みませる御子、天之火明命。次に、日子番能邇邇藝命（二柱）にます。

是を以て、白し給ふ隨に、日子番能邇邇藝命に、詔負せて、「この豊葦原の水穗國は、汝、知らさむ國なりと、言依し給ふ。故、御命の隨に、天降ますべし」と詔り給ひき。爾、日子番能邇邇藝命、天降りまさむとする時に、天の八衢に居て、上は、高天の原

を光し、下は、葦原の中つ國を光す神、是にあり。

故、爾、天照大御神、高木神の御命以て、天宇受賣神に詔り給はく、「汝は、手弱女なれども、射向ふ神と而勝つ神なり。故、専ら、汝、往きて問はむは、吾が御子の、天降りまさむと爲る道を、誰れぞ斯くて居ると、問へ」と詔り給ひき。

故、問はせ給ふ時に、答へ白さく、「僕は、國つ神、名は、猿田毘古神なり。出で居る所以は、天つ神の御子、天降りますと聞きつる故に、御前に仕へ奉らむとして、參向へ侍ふ」と白し給ひき。

爾、天兒屋命、布刀玉命、天宇受賣命、伊斯許理度賣命、玉祖命、并せて、五部屬の長を分り加へて、天降りまさしめ給ひき。

於是、其の招禱し八尺の勾瓊、鏡、及、草薙の劍、亦、常世思金神、手力男神、天門石別神を副へ賜ひて、詔り給ひつらくは、「此の鏡は、専ら、我が御魂として、吾が御前を拜くが如、齋き奉り給へ。次に、思金神は、御前の事を取り持ちて、爲政給へ」と、詔り給ひき。



此の二柱の神は、裂釧五十鈴の宮に齋き祭る。次に、豊宇氣神。此は、外宮の度相に坐す神なり。次に、天石戸別神、亦の名は、櫛石窓神と謂し、亦の名は、豊石窓神とも謂す。此の神は、御門の神なり。次に、手力男神は、佐那縣に坐せり。

故、其の天兒屋命は、中臣連等が祖。布刀玉命は、忌部首等が祖。天宇受賣命は、猿女君等が祖。伊斯許理度賣命は、鏡作連等が祖。玉祖命は、玉祖連等が祖なり。

故、爾、天津日子番能邇邇藝命、天の石座を離れ、天の八重棚引雲を押し分けて、稜威の道別きくして、天の浮橋に、浮洲在、櫓、乗發して、竺紫の日向の、高千穂の久士布流峯に、天降りまじき。

故、爾、天忍日命、天津久米命二人、天の石鞆を取り負ひ、頭槌の大刀を取り佩き、天の櫛弓を取り持ち、天の眞鹿兒矢を手挟み、御前に立たして仕へ奉りき。

故、其の天忍日命、此は、大伴連等が祖。天津久米命、此は、久米直等が祖なり。於是、背肉の空國を、笠沙之御崎に、覓ぎ通過りて詔り給はく、「此地は、朝日の直

刺す國、夕日の日照る國なり。故、此地ぞ甚吉地」と詔り給ひて、底つ石根に、宮柱太知り、高天の原に、冰椽高知りて、坐しまじき。

故、爾、天宇受賣命に詔り給はく、「此の御前に立ちて、仕へ奉れりし、猿田毘古大神をば、専ら、顯はし申せる汝、送り奉れ。亦、其の神の御名は、汝、負ひて仕へ奉れ」と詔り給ひき。是を以て、猿女君等、其の猿田毘古神の男神の名を負ひて、女を猿女君と呼ぶ事、是れなり。

故、其の猿田毘古神、阿邪訶に坐しける時に、漁りして、比良夫貝に、其の手を咋ひ合はさえて、海潮に、沈溺れ給ひき。故、其の底に、沈み居給ふ時の御名を、底度久御魂と謂し、其の海水の粒立つ時の御名を、都夫多都御魂と謂し、其の沫咲く時の御名を、阿和佐久御魂と謂す。

於是、猿田毘古神を送りて、罷り到りて、乃ち、悉に、鰭の廣物、鰭の狭物を追ひ聚めて、「汝は、天つ神の御子に仕へ奉らむや」と問ふ時に、諸の魚ども、「皆仕へ奉らむ」と白す中に、海鼠、白さず。爾、天宇受賣命、海鼠に謂ひけらく、「此の口や、答



へせぬ口」といひて、紐小刀以ちて、其の口を拆きき。故、今に、海鼠の口拆けたり。是を以て、御世御世、島の速贄獻れる時に、猿女の君等に給ふなり。

於是、天津日高日子番能邇邇藝能命、笠沙の御崎に、麗き美人の遇へるに、「誰が女ぞ」と問ひ給ひき。答へ白し給はく、「大山津見神の女、名は、神阿多都比賣、亦の名は、木花之佐久夜毘賣」と謂し給ひき。又、汝が兄弟ありや、と問ひ給へば、「我が姉、石長比賣あり」と、答白し給ひき。

爾、詔り給はく、「吾、汝に、目合せむと欲ふは奈何に」と、詔り給へば、「僕は、得白さじ、僕が父、大山津見神ぞ、白さむ」と白し給ひき。故、其の父、大山津見神に、乞ひに遣はしける時に、大く歡喜びて、其の姉、石長比賣を副へて、百持の、机代の物を、持たしめて奉出しき。故、爾、其の姉は、甚、凶醜に因りて、見畏みて、返し送り給ひて、唯、其の弟木花之佐久夜毘賣をのみ留めて、一宿婚しつ。

爾、大山津見神、石長比賣を返し給へるに因りて、大く恥ぢて、白し送り給ひける言は、「我が女、二並べて奉れる由は、石長比賣を使はしては、天つ神の御子の御命

い、雨零り、風吹けども、恒なる石の如く、常堅不動に坐せ、亦、木花之佐久夜毘賣を使はしては、木花の榮ゆるが如、榮えませと、誓約ひて、貢進りき。此に、今、石長比賣を返して、木花之佐久夜毘賣、獨り留め給ひつれば、天つ神の御子の御壽は、木の花の、脆弱のみ、ましなむとす」と白し給ひき。故、是を以て、今に至るまで、天皇命等の御命、長くはまさざるなり。

故、後に、木花之佐久夜毘賣、參出て白し給はく、「妾、妊身を、今、臨産べき時になりぬ。是の天つ神の御子、私に、産みまつるべきにあらず。故、請す」と白し給ひき。

爾、詔り給はく、「佐久夜毘賣、一宿にや妊める、是は我が御子に非じ。必ず、國つ神の子にこそあらめ」と答白給へば、「吾が妊める御子、若し、國つ神の子ならむには、産むこと幸からじ。若し、天つ神の御子にまさば、幸からむ」と白して、即ち、戸無き八尋殿を作りて、其の殿内に入りまして、土以て塗り塞ぎて、産ます時に方りて、其の殿に、火を著けてなも産ましける。故、其の火の眞盛りに焼ゆる時に生れませる



御子の御名は、火照命。(此は、隼人阿多君の祖)。次に、生まれませる御子の御名は、火須勢理命。次に、生まれませる御子の御名は、火遠理命。亦の御名は、天津日高日子穗穗手見命。(三柱)

故、火照命は、海幸取毘古として、鱧の廣物、鱧の狭物を取り給ひ、火遠理命は、山幸取毘古として、毛の麤物、毛の柔物を取り給ひき。

爾、火遠理命、其の兄、火照命に、「各に、幸取具を易へて、用ひてむ」といひて、三度乞はし、かども、許さざりき。然れども、遂に、纒に、得易へ給ひき。爾、火遠理命、海幸取具を以て、魚、釣らすに、都て、一魚も得給はず。亦、其の鉤をさへ、海に失ひ給ひき。

於是、其の兄、火照命、其の鉤を乞ひて、「山幸取具も、己が佐知佐知、海幸取具も、己が佐知佐知、今は、各、幸取具返さむ」と謂ふ時に、其の弟、火遠理命、答白給はく、「汝の鉤は、魚釣りしに、一魚も得ずて、遂に、海に失ひてき」と詔り給へども、其の兄、強に、乞ひ徴りき。

故、其の弟、御佩の十拳劔を銷鏢りて、五百鉤を作りて、償ひ給へども取らず。亦、一千鉤を作りて、償ひ給へども受けずて、猶、其の正本の鉤を得むとぞいひける。

於是、其の弟、海邊に泣き憂ひ居ます時に、鹽椎の神、來て問ひけらく、「何にぞ、虚空津日高の泣き憂ひ給ふ所由は」と問へば、答白へ給はく、「我、兄と鉤を易へて、其の鉤を失ひてき。斯くて、其の鉤を乞ふ故に、多の鉤を償ひしかども、受けずて、猶、其の本の鉤を得むといふなり。故、泣き憂ふ」と詔り給ひき。

爾、鹽椎の神、「我、汝が命の御爲に、善き議せむ」といひて、即ち、無目堅目の小船を造りて、其の船に載せ奉りて、教へけらく、「我れ、其の船を押し流さば、差暫し、往でませ、甚善し御路あらむ。乃ち、其の道に乗りて往しなば、魚鱗の如造れる宮室、其れ、綿津見神の宮なり。其の神の御門に到りましなば、傍の井の上に、湯津香木あらむ。故、其の木の上に坐しまさば、其の海の神の御女、見て、相議らむものぞ」と、教へまつりき。

故、教へし隨に、小し行ましけるに、備に、其の言の如くなりしかば、即ち、其の



香木に登りて、坐しましき。爾、海神の御女、豊玉毘賣の從婢、玉器を持ちて、水酌まむとする時に、井に光あり、仰ぎて見れば、麗しき壯夫あり。甚、異奇と思ひき。爾、火遠理命、其の婢を見給ひて、「水を得しめよ」と乞ひ給ふ。婢、乃ち、水を酌みて、玉器に入れて貢進りき。

爾、水をば飲み給はずして、御頸の璣を解かして、御口に含みて、其の玉器に唾き入れ給ひき。於是、其の璣、器に著きて、婢、璣を待離たす。故、璣著けながら、豊玉比賣命に進りき。爾、其の璣を見て、婢に、「若し、門の外に人ありや」と問ひ給へば、「我が井の上の香木の上に、人坐す。甚、麗しき壯夫にます。我が王にも益りて、甚、貴し。故、其の人、水を乞はせる故に、奉りしかば、水をば飲まさずて、此の璣をなも唾き入れ給へる、是れ、得離たぬ故に、入れながら持ち參來て獻りぬ」と白しき。

爾、豊玉毘賣命、奇しと思ほして、出で見て、乃ち、見感で、目合ひして、其の父に、「吾が門に、麗しき人坐す」と白し給ひき。爾、海神、自ら、出で見て、此の人

は、天津日高之御子、虚空津日高にませり」といひて、即ち、内に率て入れ奉りて、海鹽の皮の疊、八重を敷き、亦、繩疊、八重を其の上に敷きて、其の上に坐せ奉りて、百取の机代の物を具へて、御饗して、即ち、其の御女、豊玉毘賣を婚せ奉りき。故、三年といふまで、其の國に住み給ひき。

於是、火遠理命、その初の事を思ほして、大きな歎き一つし給ひき。故、豊玉毘賣命、其の御歎を聞かして、其の父に白し給はく、「三年、住み給へども、恒は歎かすこともなかりしに、今夜、大きな歎き一つし給ひつるは、若し、何の由故あるにか」と白し給へば、其の父の大神、其の御聲夫に問ひまつらく、「今旦、我が女の語るを聞けば、三年坐しませども、恒は歎かす事もなかりしに、今夜、大きな歎きし給ひつと申せり。若し、由ありや。亦、此間に、來ませる由は、奈何にぞ」と問ひまつりき。爾、其の大神に、備に、其の兄の、失せにし鉤を罰れる状を、語り給ひき。是を以て、海神、悉に、海之大小魚を召集めて、「若し、此鉤を取れる魚ありや」と問ひ給ふ。故、諸の魚ども白さく、「頃者、赤海鯽魚なも、喉に鰓ありて、物得食は



すと、愁ふなれば、必ず、是れ、取りつらむ」と白しき。

於是、赤海鯽魚の喉を探りしかば、鉤あり。即ち、取り出で、清洗して、火遠理命に奉る時に、その綿津見大神、誨へ奉りけらく、「此の鉤を、其の兄に給はむ時に、言り給はむ状は、此の鉤は、鬱悞鉤、愈進鉤、貧鉤、癡騃鉤といひて、後手に賜へ。然して、其の兄、高田を作らば、汝が命は、下田を營り給へ。其の兄、下田を作らば、汝が命は、高田を營り給へ。然爲給はゞ、吾、水を掌れば、三年の間、必ず、其の兄、貧窮くなりなむ。若し、其れ、然爲給ふ事を恨怨みて、攻戦なば、潮盈つ珠を出して溺らし、若し、其れ、愁ひ請さば、潮乾る珠を出して活し、斯くして、惚苦め給へ」と云して、潮満つ珠、潮乾る珠、并せて兩箇を授け奉りて、即ち、悉に、鰐魚共を召び集めて、問ひ給はく、「今、天津日高の御子、虚空津日高上つ國に出幸まさむとす。誰は、幾日に送り奉りて、復奏さむ」と問ひ給ひき。

故、各己、身の尋長の隨に、日を限りて白す中に、一尋鰐魚、「僕は、一日に送り奉りて、還り來なむ」と白す。

故爾、其の一尋鰐魚に、「然らば、汝、送り奉りてよ。若し、海中を渡る時、な惶畏ませ奉りそ」と詔りて、即ち、其の鰐魚の頸に載せ奉りて、送り出し奉りき。故、如期、一日の内に送り奉りき。其の鰐魚返りなむとせし時に、御佩かせる、紐小刀を解かして、其の頸に著けてなも返し給ひける。故、その一尋鰐魚をば、今に、鋤持の神とぞいふなる。

是を以て、備に、海神の教へし言の如くして、其の鉤を興へ給ひき。故、それより以後、稍愈、貧しくなりて、更に、荒き心を起して迫め來。攻めむとする時は、潮盈つ珠を出して溺らし、其れ、愁ひ請せば、潮乾る珠を出して救ひ、如此して、惚苦め給ふ時に、稽首白さく、「僕は、今より以後、汝が命の、晝夜の守護人となりてぞ、仕へ奉らむ」と白しき。故、今に至るまで、其の溺れし時の種々の態、絶えず仕へ奉るなり。

於是、海神の御女、豊玉毘賣命、自ら參出て白し給はく、「妾、已より妊身るを、今、御子産む時になりぬ。此を思ふに、天つ神の御子を、海原に生み奉るべきにあらず。



故、參出で、來つ」と白し給ひき。

爾、即ち、其の海邊の波限に、鶉の羽を葺草にして、産殿を造りき。是於、其の産殿、未だ、葺き合へぬに、御腹忍へ難くなり給ひければ、産殿に入りまじき。爾、御子、産みまさむとする時に、其の日子に白し言はく、「凡て、佗國の人は、臨産時になれば、本つ國の形になりてなも産むなる。故、妾も、今、本の身になりて産みなむとす。妾を勿見給ひそ」と白し給ひき。

於是、其の言を奇しと思ほして、其の方に御子産み給ふを、竊伺給へば、八尋鰐魚に化りて、匍匐委蛇き。即、見驚き畏みて、遁げ退き給ひき。

爾、豊玉毘賣命、其の伺見給ひし事を知らして、心恥かしと思ほして、其の御子を産み置きて、「妾、恒は、海つ道を通して、往來はむところ欲ひしを、吾が形を伺見給ひしが、甚、恥かしき事」と白して、即ち、海坂を塞きて、返り入りまじき。是を以て、其の産れませる御子の御名を、天津日高日子波限建鶉葺草葺不合命と謂す。

然れども、後は、其の伺見給ひし御情を恨みつゝも、戀しきに得忍へ給はずて、其

の御子を治養し奉る縁に因りて、其の弟、玉依毘賣に附けて、歌をなも獻り給ひける。

其の歌、

赤玉は 緒さへ光れど

白玉の 君が容儀し

貴くありけり

爾、その日子、答へ給ひける御歌

奥つ鳥 鴨着く島に

吾が率寝し 妹は忘れじ

世の盡々に

故、日子穗穗手見命は、高千穂の宮に、五百八十歳坐しまじき。御陵は、即て、そ

の高千穂の山の西の方に在り。

是の天津日高日子波限建鶉葺草葺不合命、其の御姨、玉依毘賣命に娶ひて、生みませる御子の御名は、五瀬命。次に、稻氷命。次に、御毛沼命。次に、若御毛沼命、亦



の御名は、豊御毛沼命、亦の御名は、神倭伊波禮毘古命。(四柱)  
 故、御毛沼命は、波の穂を跳みて、常世の國に渡りまし、稻氷命は、御妣の國として、海原に入りましき。

古事記中卷

白檮原宮(神武天皇)

神倭伊波禮毘古命、其の同母兄、五瀬命と二柱、高千穂宮に坐しまして、議り給はく、「何れの地に坐さばか、天の下の政をば、平らけく、聞看さむ。猶、東の方にこそ行でまさめ」と云り給ひて、即ち、日向より發して、筑紫に幸御ましき。  
 故、豊國の宇沙に到りませる時に、其の土人、名は宇沙都比古、宇沙都比賣二人、足一騰の宮を作りて、大御饗獻りき。其地より遷移して、筑紫の岡田宮に、一年ましましき。亦、其の國より上幸でまして、阿岐の國の多祁理宮に、七年坐しましき。  
 亦、其の國より遷り上幸でまして、吉備の高島宮に八年坐しましき。  
 故、其の國より上幸でます時に、龜の甲に乗りて、釣しつ、袖打振り來る人、速吸



門に遇ひき。爾、喚び歸せて、「汝は、誰ぞ」と問はしければ、「僕は、國つ神、名は、宇豆毘古」と曰しき。又、「汝は、海つ道を知れりや」と問はしければ、「能く知れり」と申しき。又、「御從に仕へ奉らむや」と問はしければ、「仕へ奉らむ」と答白しき。故、爾、棹竿を指度して、其の御船に引き入れて、槁根津日子と號ふ名を賜ひき。（此は、倭の國の造等が祖なり。）

故、其の國より上り行ます時に、浪速の渡を経て、青雲の白肩津に泊て給ひき。此の時、登美的那賀須泥毘古、軍を興して、待ち向ひて戦ひしかば、爾、御船に入れたる楯を取りて、下り立ち給ひき。故、其地の號を、楯津と謂けつるを、今に、日下の蓼津とも云ふ。

於是、登美毘古と戦ひ給ふ時に、五瀬命、御手に、登美毘古が痛矢串を負はしき。故、爾、詔り給はく、「吾は、日の神の御子として、日に向ひて戦ふ事、良はず。故、賤奴が痛手をなも負ひつる。自今はも行き廻りて、日を背負ひてこそ撃ちてめ」と期り給ひて、南の方より、廻り幸ます時に、血沼の海に到りて、其の御手の血を洗ひ給

ひき。故、血沼の海とはいふなり。其地より廻り幸まして、紀の國の男の水門に到りまして、詔り給はく、「賤奴が手を負ひてや死なむ」と男叱びして、崩りましぬ。故、其の水門を、男水門とぞ謂ふ。御陵は、即て、紀の國の竈山に在り。

故、神倭伊波禮毘古命、其地より廻り幸まして、熊野の村に到ませる時に、大なる熊、山より出で、即ち失せぬ。爾、神倭伊波禮毘古命、倏忽に、瘁えまし、及、御軍も皆瘁えて伏しき。此の時に、熊野の高倉下（此は人名）、一横刀を齎ちて、天つ神の御子の伏せる地に到て、獻る時に、天つ神の御子、即ち、寤起まして、「長寢しつるかも」と詔り給ひき。故、其の横刀を受け取り給ふ時に、其の熊野の山の荒ぶる神、自ら、皆切り仆さえて、爾其の惑伏せる御軍、悉に、寤起たりき。

故、天つ神の御子、其の横刀を獲つる所由を問ひ給へば、高倉下、御答へ白さく、「己れ、夢に、天照大神、高木神、二柱の神の御命以て、建御雷神を召して、詔り給はく、葦原の中つ國は、甚く喧擾ぎてありけり。我が御子等、不平ますらし。其の葦原の中つ國は、専ら、汝が言向けつる國なれば、汝、建御雷神降りてよと詔り給ひき。



爾、御答へ曰さく、僕、降らずとも、専ら、其の國平けし横刀あれば、降してむ。(此の刀の名は、佐士布都神といふ。亦の名は、甕布都神といふ、亦の名は、布都御魂。此の刀は、石上神宮に坐す。此の刀を降さむ状は、高倉下が倉の頂を穿ちて、其より墮し入れむと、答し給ひき。故、建御雷神、教へ曰はく、汝が倉の頂を穿ちて、此の刀を墮し入れむ。故、朝目吉く、汝、取り持ちて、天つ神の御子に獻れと教へ給ひき。故、夢の教への如に、且、己が倉を見しかば、信に、横刀ありき。故、是の横刀は、獻るにこそ」と答しき。

於是、亦、高木大神の御命以て、覺し白し給はく、「天つ神の御子、此より奥つ方に、莫入幸ましそ。荒ぶる神、甚、多かり。今、天より八咫鳥を遣せむ。故、其の八咫鳥、道引きなむ。其の立たむ後より幸行ますべし」と教し白し給ひき。

故、其の御教しの隨、其の八咫鳥の後より幸行まし、かば、吉野河の河尻に到りましき。時に、筌を作ちて、魚取る人ありき。爾、天つ神の御子、「汝は、誰ぞ」と問はしければ、「僕は、國つ神、名は、贄持の子」と答白しき。(此は、阿陀の鶺鴒の祖)

其地より幸行ませば、尾ある人、井より出で來。其の井光れり。爾、「汝は、誰ぞ」と問はせば、「僕は、國つ神、名は、井冰鹿」と答白しき。(此は、吉野の首等が祖なり) 即て、其の山に入りまし、かば、亦、尾ある人、遇へり。此の人、巖を推分けて、出で來。爾、「汝は、誰ぞ」と問はせば、「僕は、國つ神、名は、石押分の子。今、天つ神の御子、幸行ますと聞きける故に、參向へまつるにこそ」と答白しき。(此は、吉野の國巢の祖) 其地より踏み穿ち越えて、宇陀に幸ましき。故、宇陀の穿といふ。故、爾、宇陀に、兄宇迦斯、弟宇迦斯と二人ありけり。故、先づ、八咫鳥を遣はして、二人に問はしめ曰はく、「今、天つ神の御子、幸行ませり。汝等、仕へ奉らむや。」於是、兄宇迦斯、鳴鏑を以て、其の御使を待ち射返しき。故、其の鳴鏑の落ちたりし地を、訶夫羅前といふ。「待ち撃たむといひて、軍人を聚めしかども、得聚めざりしかば、仕へ奉らむ」と欺りて大殿を作りて、其の殿内に、押機を作りて、待ちける時に、弟宇迦斯、先づ、參向へて、拜みて曰さく、「僕が兄、兄宇迦斯、天つ神の御子の御使を射返し、待ち攻めむとして、軍を聚むれども得聚めざれば、大殿を作り、其の



内に、押機を張りて、待ち取らむとす。故、參向へて、顯し白す」と白しき。  
 爾、大伴連等が祖、道臣命、久米直等が祖、大久米命二人、兄宇迦斯を召して、罵  
 置て云ひけらく、「爾が、作り仕へ奉れる、大殿内には、汝奴、先づ入りて、其の仕へ  
 奉らむと爲る状を、明白し申せ」といひて、横刀の手上取握り、弄槍、矢刺して、追  
 ひ入る、時に、己が作り置ける押機に、打たれて死にき。爾即ち、控出して、斬り散  
 りき。故、其地を宇陀の血原となもいふ。  
 然して、其の弟宇迦斯が獻れる大饗をば、悉に、其の御軍人共に賜ひき。此の時に、  
 御歌曰し給はく、

宇陀の

高城に

鳴羅張る

我が待つや

鳴は障らず

勇細し

鯨障る

前妻が

魚乞はさば

立松稜の

實のなけくを

幾許薄剝ね

後妻が

魚乞はさば

拾實の

多けくを

幾許薄剝ね

疊々 (音引)

志夜胡志夜

此は伊碁能布曾

阿々 (音引)

志夜胡志夜

此は嘲咲ふぞ。

故、其の弟宇迦斯 (此は、宇陀の水取等が祖なり。)  
 其地より幸行まして、忍坂の入室に到りませる時に、尾ある土蜘蛛、八十建、其の  
 室に在りて、待ち怒吼る。故、爾、天つ神の御子の御命以て、八十建に饗を賜ひき。  
 於是、八十建に宛て、八十膳夫を設けて、人毎に、刀佩けて、其の膳夫等に、「歌を  
 聞かば、一時共に斬れ」と誨へ給ひき。故、其の土蜘蛛を打たむとすることを明せる  
 歌。

忍坂の

大室屋に

人多に

來入り居り

人多に

入り居りとも

満々し

久米の子が

頭椎

石椎以ち

撃ちてし止まむ

満々し

久米の子等が

頭椎

石椎以ち

今撃たば善らし



如此、歌ひて、刀を抜きて、一時に、打ち殺しつ。

然後、登美毘古を撃ち給はむと爲し時の歌曰

満々し 久米の子等が 栗生には 臭葦一莖

其根が莖 其根芽繋ぎて 撃ちてし止まむ

又歌曰 久米の子等が 垣下に 植ゑし葦

満々し 吾は忘れじ 撃ちてし止まむ

口響く 吾は忘れじ 撃ちてし止まむ

又歌曰 伊勢の海の 大石に 蔓延廻ろふ

神風の 蔓廻り 撃ちてしやまむ

細螺の 蔓廻り 撃ちてしやまむ

又、兄師木、弟師木を撃ち給へる時に、御軍、暫は疲れたりき。爾の歌曰

楯並めて いなさの山の 樹の間よも 行き候ひ

戦へば 吾はや飢ぬ 島つ鳥 鶉養が徒

今助けに来ね

故、爾、邇藝速日命、參赴て、天つ神の御子に白さく、「天つ神の御子、天降りまし

ぬと聞きつる故に、追ひて參降り來つ」と白して、即ち、天つ瑞を獻りて仕へ奉りき。

故、邇藝速日命、登美毘古の妹、登美夜毘賣に娶ひて、生める子、宇摩志麻遲命。(此

は、物部の連、穗積の臣、姦の臣の祖なり)

故、此の如、荒ぶる神等を言向け平和し、伏はぬ人等を退ひ撥げ給ひて、畝火の白

禱原の宮に坐しまして、天の下治しめしき。

故、日向に坐しし時、阿多の小椅君の妹、名は阿比良比賣を娶して、生みませる御

子、多藝志美美命。次に、岐須美美命。二柱ませり。

然れども、更に、太后と爲む美人を求ぎ給ふ時に、大久米命の曰さく、「此間に、神

の御子なりと謂す媛女あり。其を神の御子なりと謂す所以は、三島の湟咋の女、名は

勢夜陀多良比賣、其れ容姿麗美りければ、美和の大物主神見感でて、其の美人の大便

に入れる時に、丹塗矢に化りて、其の大便の溝流下より、其の美人の陰を突き給ひき。



爾、其の美人驚きて、立ち走り、狼狽ぎき。乃て、其の矢を持ち来て、床邊に置きしかば、忽ちに、麗しき壯夫に成りて、即ち、其の美人に娶ひて、生みませる御子、名は、富登多々良伊須々岐比賣命、亦の名は、比賣多々良伊須氣余理比賣と謂す。(是は、其の富登と云ふ事を惡みて、後に、改へつる御名なり) 故、是を以て、神の御子とは謂すなり」と、白しき。

於是、七媛女、高佐士野に遊行べる、伊須氣余理比賣、其の中に在りき。爾、大久米命、其の伊須氣余理比賣を見て、歌を以て、天皇に曰しけらく、

倭の 高佐士野を 七行く  
誰をし覓かむ 媛女等

爾、伊須氣余理比賣は、其の媛女等の前に立てりき。乃、天皇其の媛女等を御見して、御心に、伊須氣余理比賣の、最前に立てる事を知り給ひて、御歌以て、答へ曰はく。

且々も 最前立てる 可愛をし覓かむ

爾、大久米命、天皇の御命を、其の伊須氣余理比賣に詔れる時に、其の大久米命の裂ける利目を見て、奇しと思ひて、

あめつ、 ちどりましと、 何裂ける利目  
と歌ひければ、爾、大久米命、  
媛女に 直に逢はむと 吾が裂ける利目

と歌ひて、答へける。故、其の媛女、「仕へ奉らむ」と白しき。  
於是、其の伊須氣余理比賣命の家、狹井川の上に在りき。天皇、其の伊須氣余理比賣之許幸行して、一宿、御寝ましき。(其の河を佐韋河と謂ふ由は、其の河の邊に、山由理草多かりき。故、其山由理草の名を取りて、佐韋河と號けき。山由理草の本の名佐韋と云ひき。)

後に、其の伊須氣余理比賣、宮内に參入れる時に、天皇、御歌曰し給はく。  
葦原の 醜き小屋に 菅壘  
朕が二人寝し 彌清敷きて



然して、生れませる御子の御名は、日子八井命。次に、神八井耳命。次に、神沼河耳命。(三柱)

故、天皇、崩りまして後に、其の庶兄、當藝志美美命、其の嫡后、伊須氣余理比賣に奸くる時に、其の三柱の弟子御等を殺せむとして、謀つ間に、其の御祖、伊須氣余理比賣患苦まして、歌みして、其の御子等に、知らしめ給へりし其の御歌。

狭井河よ

雲立ち亘り

畝火山

木の葉騒ぎぬ

風吹かむとす

又歌曰

畝火山

晝は雲と居

夕去れば

風吹かむとぞ

木の葉騒げる

於是、其の御子等、聞き知りまして、驚きて、乃ち、當藝志美美を殺せむと爲給ふ時に、神沼河耳命、其の兄、神八井耳命に曰し給はく、「阿兄汝が命、兵器を持ちて入りて、當藝志美美を殺せ給へ」と曰し給ひき。故、兵器を持ちて入りて、殺せむとし

給ふ時に、手足戦慄きて、得殺せ給はざりき。故、爾、其の弟、神沼河耳命、其の兄

の持たせる兵器を乞ひ取りて、入りて、當藝志美美を殺せ給ひき。故、亦、其の御名を稱へて、建沼河耳命と謂しき。

爾、神八井耳命、弟、建沼河耳命に譲りて、曰し給はく、「吾は、仇を得殺せず。汝

が命、既に、得殺せ給ひぬ。故、吾は、兄なれども、上とあるべからず。是を以て、

汝が命、上と爲して、天の下治しめせ。僕は、汝が命を扶けて、忌人と爲りて、仕へ

奉らむ」と曰し給ひき。

故、其の日子八井命は、(茨田連、手島連の祖)

神八井耳命は、(意富臣、小子部連、坂合部連、火君、大分君、阿蘇君、筑紫二家連、

雀部臣、雀部造、小長谷造、都祁直、伊余國造、科野國造、道奥石城國造、常道仲國

造、長狭國造、伊勢舟木直、尾張丹羽臣、島田臣等が祖なり。)

神沼河耳命は、天の下治しめしき。

凡て、此の神倭伊波禮毘古天皇、御年、壹佰參拾漆歳。御陵は、畝火山の北の方、





白檮の尾の上に在り。

高岡の宮（綏靖天皇）

神沼河耳命、葛城の高岡の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、師木縣主の祖、河俣毘賣を娶して、生みませる御子、師木津日子玉手見命。（二柱）  
この天皇、御年、肆拾五歳。御陵は衝田の岡に在り。

浮穴の宮（安寧天皇）

師木津日子玉手見命、片鹽の浮穴の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、河俣毘賣の兄、縣主殿延の女、阿久斗比賣を娶して、生みませる御子、常根津日子伊呂泥命。次に、大倭日子鉏友命。次に、師木津日子命。  
此の天皇の御子等、并せて、三柱の中、大倭日子鉏友命は、天の下治しめしき。次に、師木津日子命の御子、二王ませる。一子孫は、（伊賀の須知の稻置、那婆理の稻

置、三野の稻置の祖）一柱の御子、知知都美命は、淡道の御井の宮に坐しき。故、此の王、女、二女まさしき。兄の名は、蠅伊呂泥、亦の名は、意富夜麻登久邇阿禮比賣命。弟の名は、蠅伊呂杼。  
この天皇、御年、肆拾玖歳。御陵は、畝火山の御陰に在り。

境岡の宮（懿德天皇）

大倭日子鉏友命、輕の境岡の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、師木の縣主の祖、賦登麻和訶比賣命、亦の名は、飯日比賣命を娶して、生みませる御子、御眞津日子訶惠志泥命。次に、多藝志比古命。（二柱）  
故、御眞津日子訶惠志泥命は、天の下治しめしき。次に、多藝志比古命は、（血沼の別、多遲麻の竹の別。葦井の稻置の祖）  
此の天皇、御年、肆拾伍歳。御陵は、畝火山の眞名子谷の上に在り。



掖上の宮（孝昭天皇）

御眞津日子訶惠志泥命、葛城の掖上の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、尾張の連の祖、奥津余曾の妹、名は、余曾多本毘賣命を娶して、生みませる御子、天押帶日子命。次に、大倭帶日子國押人命。（二柱）

故、弟帶日子國忍人命は、天の下治しめしき。兄、天押帶日子命は、春日臣、大宅臣、粟田臣、小野臣、柿本臣、壹比韋臣、大坂臣、阿那臣、多紀臣、羽栗臣、知多臣、牟邪臣、都怒山臣、伊勢の飯高君、壹師君、近淡海國造の祖なり。此の天皇、御年、玖拾參歲。御陵は、掖上の博多の山の上に在り。

秋津島の宮（孝安天皇）

大倭帶日子國押人命、葛城の室の秋津島の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、御姪、忍鹿比賣命に娶ひまして、生みませる御子、大吉備諸進命。次に、大

倭根子日子賦斗邇命。（二柱）

故、大倭根子日子賦斗邇命は、天の下治しめしき。此の天皇、御年、壹佰貳拾參歲。御陵は、玉手の岡の上に在り。

黒田の宮（孝靈天皇）

大倭根子日子賦斗邇命、黒田の廬戸の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、十市の縣主の祖、大目の女、名は、細比賣命を娶して、生みませる御子、大倭根子日子國玖琉命。（一柱）又、春日の千々速眞若比賣を娶して、生みませる御子、千々速比賣命。（一柱）又、意富夜麻登玖邇阿禮比賣命に娶ひまして、生みませる御子、夜麻登登母母曾毘賣命。次に、日子刺肩別命。次に、比古伊佐勢理毘古命、亦の名は、大吉備津日子命。次に、倭飛羽矢若屋比賣。（四柱）又其の阿禮比賣命の弟、蠅伊呂杼に娶ひまして、生みませる御子、日子寤間命。次に、若日子建吉備津日子命。（二柱）此の天皇の御子等、并せて、七柱ませり。（男王五柱、女王三柱）



故、大倭根子日子國玖琉命は、天の下治しめしき。大吉備津日子命と、若建吉備津日子命とは、二柱、相副はして、針間の氷河の前に、忌瓮を居ゑて、針間を道の口として、吉備の國を言向け和し給ひき。

故、此の大吉備津日子命は(吉備の上道臣の祖なり)。次に、若日子建吉備津日子命は(吉備の下道臣、笠臣の祖なり)。次に、日子寤間命は、(針間の牛鹿臣の祖なり)。次に、日子刺肩別命は(高志の利波臣、豊國の國前臣、五百原君、角鹿の海直の祖なり)。

此の天皇、御年、壹佰陸歲。御陵は片岡の馬坂の上に在り。

境原の宮(孝元天皇)

大倭根子日子國玖琉命、輕の境原の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、穗積の臣等が祖、内色許男命の妹、内色許賣命を娶して、生みませる御子、大毘古命。次に、少名日子建猪心命。次に、若倭根子日子大毘古命。(三柱)又、内色許男命の女、

伊賀迦色許賣命を娶して、生みませる御子、比古布都押之信命。又、河内の青玉が女、名は、波邇夜須毘賣を娶して生みませる御子、建波邇夜須毘古命。(一柱)此の天皇の御子等、并せて、五柱ませり。

故、若倭根子日子大毘古命は、天の下治しめしき。其の御兄、大毘古命の御子、建沼河別命は、(阿倍臣等が祖)次に、比古伊那許志別命、(此は、膳臣の祖なり)比古布都押之信命、尾張の連等が祖、意富那毘が妹、葛城の高千那毘賣に娶ひて、生みませる御子、味師内宿禰(此は、山城の内臣の祖なり)。又、木の國造の祖、宇豆比古が妹、山下影日賣に娶ひて、生みませる子、建内宿禰。

此の建内宿禰の子、并せて、九人、(男七、女二)。波多の八代宿禰は(波多臣、林臣、波美臣、星川臣、淡海臣、長谷部君の祖なり)次に、許勢の小柄宿禰は(許勢臣、雀部臣、輕部臣の祖なり)次に、蘇賀の石河宿禰は(蘇我臣、川邊臣、田中臣、高向臣、小治田臣、櫻井臣、岸田臣等の祖なり)次に、平群の都久宿禰は(平群臣、佐和良臣、馬御檝連等の祖なり)次に、木の角宿禰は(木臣、都奴臣、坂本臣の祖)次



に、久米能麻伊刀比賣、次に、怒能伊呂比賣、次に、葛城の長江の曾都毘古は（玉手臣、的臣、生江臣、阿藝那臣等の祖なり。）又、若子宿禰は（江野財臣の祖）。此の天皇、御年、伍拾漆歳。御陵は、劔池の中の岡の上に在り。

伊邪河の宮（開化天皇）

若倭根子日子大毘毘命、春日の伊邪河の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、且波の大縣主、名は、由基理が女、竹野比賣を娶して、生みませる御子、比古由牟須美命。（一柱）又、庶母、伊賀迦色許賣命に娶ひまして、生みませる御子、御眞木入日子印惠命。次に、御眞津比賣命。（二柱）又、丸邇臣の祖、日子國意祁都命の妹、意祁都比賣命を娶して、生みませる御子、日子坐王。（一柱）又、葛城の垂見宿禰の女、鷓比賣を娶して、生みませる御子、建豊波豆羅和氣王。（一柱）此の天皇の御子等、并せて、五柱。（男王四、女王一）

故、御眞木入日子印惠命は、天の下治しめしき。其の兄、比古由牟須美王の御子、

大筒木垂根王。次に、讚岐垂根王（二王）。此の二王子の女、五柱ましき。

次に、日子坐王、山代の荏名津比賣、亦の名は、荻幡戸辨に娶ひて、生みませる御子、大俣王。次に、小俣王。次に、志夫美宿禰王。（三柱）又、春日の建國勝戸賣が女、名は、沙本之大闍見戸賣に娶ひて、生みませる御子、沙本毘古王。次に、袁邪本王。次に、沙本毘賣命、亦の名は、佐波遲比賣。（此の沙本毘賣命は、伊久米の天皇の后とまよせり）次に室毘古王（四柱）。又、近淡海の御上の祝が以ち拜く、天の御影神の御女、息長水依比賣に娶ひて、生みませる御子、丹波比古多須美知能宇斯王。次に、水穗眞若王。次に、神大根王、亦の名は、八瓜入日子王。次に、水穗五百依比賣。次に、御井津比賣。（五柱）又、御母の弟、袁祁都比賣命に娶ひて、生みませる御子、山代之大筒木眞若王。次に、比古意須王。次に、伊理泥王。（三柱）。凡て、日子坐王、并せて、十一王。

故、兄、大俣王の御子、曙立王。次に、菟上王。（二柱）此の曙立王は（伊勢の品遲部君、伊勢の佐那造の祖）。菟上王は（比賣陀君の祖）。次に、小俣王は（當麻の勾君の



祖)。次に、志夫美宿禰王は（佐々君の祖）。次に、沙本毘古王は（日下部連、甲斐國造の祖）。次に、袁邪本王は（葛野別、近淡海の蚊野別の祖なり。）次に、室毘古王は（若狭の耳別の祖）。

其の美知能宇志王、丹波の河上の摩須郎女に娶ひて、生みませる御子、比婆須比賣命。次に、眞砥野比賣命。次に、弟比賣命。次に、朝廷別王。（四柱）此の朝廷別王は、（三川の穂別の祖）。此の美知能宇斯王の弟、水穂眞若王は（近淡海の安直の祖）。次に、神大根王は（三野の國の造、本巢の國の造、長幡部連の祖）。

次に、山代の大筒木眞若王、同母弟、伊理泥王の御女、母泥能阿治佐波毘賣に娶ひて、生みませる御子、迦邇米雷王。此の王、丹波の遠津臣の女、名は、高材比賣に娶ひて、生みませる御子、息長宿禰王。此の王、葛城の高額比賣に娶ひて、生みませる御子、息長帯比賣命。次に、虚空津比賣命。次に、息長日子王、（三柱、此の王は、吉備の品遅君、針間阿宗君の祖）。又、息長宿禰王、河俣稻依毘賣に娶ひて、生みませる御子は、大多牟坂王、（此は、多遲摩國造の祖なり）。

上に謂へる、建豊波豆羅和氣王は（道守臣、忍海部造、御名部造、稻羽の忍海部、丹波の竹野別、依網の阿毘古等が祖なり。）  
此の天皇、御年、陸拾參歳。御陵は、伊邪河の坂の上に在り。

水垣の宮（崇神天皇）

御眞木入日子印惠命、師木の水垣の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、木の國造、名は、荒河刀辨が女、遠津の年魚群目微比賣を娶して、生みませる御子、豊木入日子命。次に、豊鉏入日賣命。（二柱）  
又、尾張連の祖、意富阿麻比賣を娶して、生みませる御子、大入杵命。次に、八坂之人日子命。次に、沼名木之入日賣命。次に、十市之入日賣命。（四柱）  
又、大毘古命の御女、御眞津比賣命に娶ひまして、生みませる御子、伊玖米入日子伊沙知命。次に、伊邪能眞若命。次に、國片比賣命。次に、千千都久和比賣命。次に、伊賀比賣命。次に、倭日子命。（六柱）



此の天皇の御子等、并せて、十二柱まじしき。(男王七、女王五)  
 故、伊久米伊理毘古伊佐知命は、天の下治しめしき。次に、豊木入日子命は、(上毛野君、下毛野君等が祖なり)妹、豊鉏比賣命は(伊勢の大神の宮を拜き祭り給ひき)。次に、大入杵命は、(能登臣の祖なり)次に、倭日子命、(此の王の時に、始めて、御陵に人垣を立てたりき。)

此の天皇の御世に、役病、多に起り、人民死せて盡きなむとす。

爾、天皇、愁歎ひ給ひて、神床に坐しませる夜、大物主大神、御夢に顯はれて曰り給はく、「是は、我が御心ぞ。故、意富多多泥古を以て、我が御前を祭らしめ給はゞ、神氣起らず、國、安平ぎなむ」と詔り給ひき。

是を以て、早馬使を四方に班ちて、意富多多泥古と謂ふ人を求むる時に、河内の美努村に、其の人を見得て、貢進りき。爾、天皇、「汝は、誰が子ぞ」と問ひ給ひき。「僕は、大物主大神、陶津耳命の女、活玉依毘賣に娶ひて、生みませる御子、名は、櫛御方命の子、飯肩巢見命の子、建甕槌命の子、僕、意富多多泥古」と白しき。

於是、天皇、大く、歡び給ひて、「天の下平ぎ、人民榮えなむ」と詔り給ひて、即ち、此の意富多多泥古命を神主として、御諸山に、意富美和之大神の御前を拜き祭り給ひき。又、伊迦賀色許男命に仰せて、天の八十平瓮を作り、天神、地祇の社を定め奉り給ひき。又、宇陀の墨坂の神に、赤色の楯矛を祭り、又、大坂の神に、黒色の楯矛を祭り、又、坂の御尾の神、河瀬の神まで、悉に、遺念なく、幣白奉り給ひき。此に因りて、役氣、悉に、息みて、國家安平ぎき。

此の意富多多泥古と謂ふ人を、神の御子と知れる所以は、上にいへる活玉依毘賣、其れ容姿端正りき。於是、神壯夫ありて、その形姿威儀、時に比ひなきが、夜半之時に、倏忽來つ。故、相感でて、共婚供住之間に、幾時もあらねば、其の美人妊身みぬ。爾、父母、其の妊身める事を怪みて、其の女に、「汝は、自ら妊めり。夫なきに何由してかも妊身める」と問へば、答へけらく、「麗美しき壯夫の、其の姓名も知らぬが、毎夕に來つ、供住る間に、自然、懷妊みぬ」といふ。是を以て、其の父母、其の人を知らまく欲りて、其女に誨へつらくは、「赤土を床前に散らし、綜麻苧を針に貫きて、



其の衣きぬの欄すそに刺せ」と教ふ。故かれ、教へし如ごとして、旦あした時に見れば、針著けたりし麻をは、戸の鉤穴かぎあなより引き通り出て、唯、遣のこれる麻は、三勾みわのみなりき。爾かれこ即、鉤穴かぎあなより出でし状さまを知りて、糸の隨まにまに、尋ね行きしかば、美和山みやまに至りて、神の社とどまに留りにき。故かれ、其の神の御子なりとは知りぬ。故かれ、其の麻をの三勾みわ遣れるに因りてなも、其地そこを美和とは謂ひける。(此の意富多多泥古命は、神君、鴨君の祖なり。)

又、此の御世に、大毘古命をば、高志の道に遣はし、其の御子、建沼河別命をば、東ひむがしの方かた、十一道とをまりふたみちに遣はして、其の不伏人等を和まつろはぬひとら平さしめ、又、日子坐王をば、旦波たにはの國に遣はして、玖賀耳くがみみの御笠を殺しめ給ひき。(此は人の名なり) 故かれ、大毘古命、高志の國へ罷り往す時に、腰裳服こしちりけせる少女をとめ、山代やましろの幣羅坂へらさかに立てりて、歌ひけらく、

こはや	御眞木	入日子はや	御眞木
入日子はや	己が命を	入日子はや	後つ戸よ
い行き違ひ	前つ戸よ	い行き違ひ	窺はく

不知と

御眞木

入日子はや

於是こゝに、大毘古命、怪しと思ひて、馬を返して、其の少女をとめに「汝いましが謂へる言、何いかに言ふことぞ」と問ひ給へば、少女、「吾あれ、物言はず、唯、歌をこそ詠うたひつれ」と答へて、即ち行方ゆくへも見えず、忽ちたちに、失せにき。

故かれ、大毘古命、更に、還り參上りて、天皇に請す時に、天皇、答詔のり給はく、「此こは思ふに、山代の國なる、汝なが庶兄ませ、建波邇安王たけはにやすのみこの、邪心よこころを起せる表しるしにこそあらめ。伯父おぢ、軍を興して、行かせ」と詔り給ひて、即ち、丸邇わにの臣おみの祖、日子國夫玖命ひこくにぶくのを副へて、遣はす時に、丸邇坂わにさかに、忌翁いはひべを居ゑて、罷り往しき。

於是こゝに、山代やましの和訶羅河わからがはに到れる時に、其の建波邇安王たけはにやすのみこ、軍を興して、待ち遮り、各おのれ、河を中なかに挾おきて、對立むきたちて相挑あひいどみき。故かれ、其地そこの號を伊杼美いどみと謂ひしを、今は、伊豆美いづみとぞいふ。

爾こゝに、日子國夫玖命ひこくにぶくの、「其方そなたの人、先づ、忌矢いはひやはな彈て」と乞ふまゝに、建波邇安王たけはにやすのみこ、射つれども、得中あてざりき。於是こゝに、國夫玖命くにぶくのの彈はなてる矢は、建波邇安王たけはにやすのみこに射中いあて、死しにき。



故、其の軍、悉に、破れて、逃げ散けぬ。爾、其の逃ぐる軍を追ひ迫めて、久須婆の度わたに到る時に、皆迫めらえ窘みて、尿出で、禪ぜんに懸りき。故、其地の號を尿禪といひしを、今は久須婆といふ。又、其の逃ぐる軍を遮りて斬れば、鵜うの如、河に浮きたりき。故、其の河を鵜河といふ。亦、其の軍士を斬屠りし故に、其地の號を波布理會能なとなもいふ。如此、平ことむけ訖へて、參上りて、復言奏しき。

故、大毘古命は、先の御命の隨に、高志の國に罷り行しき。爾東の方より遣し、建沼河別、其の父、大毘古と共に、相津に往き遇ひ給ひき。故、其地を相津と謂ふ。是を以て、各、遣つる國の政、和平けて、復言奏しき。爾、天の下太平ぎ、人民富み榮えき。於是、初めて、男の弓端の調、女の手末の調を貢らしめ給ひき。故、其の御世を稱へまつりて、初國知らし、御眞木天皇と謂す。

又是の御世に、依網の池を作り、亦、輕の酒折の池を作らしき。此の天皇、御歲壹佰陸拾捌歲、御陵は、山邊の道の勾の岡の上へに在り。

玉垣の宮（垂仁天皇）

伊久米伊理毘古伊佐知命、師木の玉垣の宮に坐しまして、天の下治しめしき。

此の天皇、沙本毘古命の妹、佐波遲比賣命に娶ひまして、生みませる御子、品牟都和氣命。（一柱）又、且波の比古多須美知能宇斯王の御女、冰羽州比賣命に娶ひまして、生みませる御子、印色之入日子命。次に、大帶日子淤斯呂和氣命。次に、大中津日子命。次に、倭比賣命、次に、若木入日子命（五柱）。又、其の冰羽州比賣命の弟、沼羽田之入毘賣命に娶ひまして、生みませる御子、沼帶別命。次に、伊賀帶日子命。（二柱）。又、其の沼羽田之入日賣命の弟、阿邪美能伊理毘賣命に娶ひまして、生みませる御子、伊許婆夜和氣命。次に、阿邪美都比賣命。（二柱）。又、大筒木垂根王の女、迦具夜比賣命を娶して、生みませる御子、袁邪辨王（一柱）。又、山代の大國之淵が女、苜羽田刀辨を娶して、生みませる御子、落別王。次に、五十日帶日子王。次に、伊登志別王。又、其の大國之淵が女、弟苜羽田刀辨を娶して、生みませる御子、石衝別王。



次に、石衝毘賣命、亦の御名は、布多遲能伊理毘賣命。(二柱)。凡て、此の天皇の御子等、十六王。(男王十三、女王三にます。)

故、大帶日子淤斯呂和氣命は、天の下治しめしき。(御身の長、一丈二寸、御脛の長四尺一寸まじき。)

次に、印色之入日子命は、血沼の池を作り、又、狭山の池を作り、又、日下の高津の池を作り給ひき。又、鳥取の河上の宮に坐しまして、横刀壹仟口を作らしめ給ひき。是を石上の神宮に納め奉りき。即ち、其の宮に坐しまして、河上部を定め給ひき。

次に、大中津日子命は、(山邊の別、三枝の別、稻木の別、阿太の別、尾張の國の三野の別、吉備の石無の別、許呂母の別、高巢鹿の別、飛鳥の君、牟禮の別等の祖なり。)次に、倭比賣命は、(伊勢大神の宮を拜き祭り給ふ。)次に、伊許婆夜和氣王は、(沙本の穴太部の別の祖なり。)次に、阿那美都比賣命は、(稻瀬毘古王に嫁ひまじき。)次に、落別王は、(小月の山の君、三川の衣の君の祖なり。)次に、五十日帶日子王は、(春日の山の君、高志の池の君、春日部の君の祖。)次に、伊登志和氣王は、御子無るにより

て、御子代として、伊登志部を定む。)次に、石衝別王は、(羽咋の君、三尾の君の祖。)次に、布多遲能伊理毘賣命は、(倭建命の后と爲り給ひき。)

此の天皇、沙本毘賣を后と爲給へる時に、沙本毘賣命の兄、沙本毘古王、其の同母妹に、「夫と兄とは、孰れか愛しき」と問へば、「兄ぞ愛しき」と答へ給ひき。爾、沙本毘古王、謀曰く、「汝、寔に、我を愛しく思ほさば、吾と汝と天の下を知りてむとす」といひて、即ち八鹽折の紐小刀を作りて、其の同母妹に授けて、「此の小刀以て、天皇の御寢坐せらむを、刺殺しまつれ」といふ。

故、天皇、其の謀を知しめさずて、其の後の御膝を枕きて、御寢坐しき。爾、其の后、紐小刀以て、其の天皇之御頸を刺しまつらむとして、三度まで舉り給ひしかども、忍へ難に、哀情して、得刺しまつらずて、泣き給ふ。御涙、大御面に落ち流れき。乃、天皇、驚起まして、其の後に問ひ給はく、「吾は、異夢見たり。沙本の方より、暴雨の零り來て、急に、吾が御面を洽しつ。又、錦色なる小蛇、我が御頸にも纏繞りし。如此の夢は、何の表にかあらまし」と、問ひ給ひき。



爾、其の后、争はえじと思ほして、曰し給はく、「妾が同母兄、沙本毘古王、妾に、夫と同母兄とは、孰れか愛しき、と問ひたりき。是く問ふには、得面勝たずてなも、同母兄ぞ愛しき、と答へつれば、妾に誂へ曰く、吾と汝と天の下を治らさむ。故、天皇を殺せまつれといひて、八鹽折の紐小刀を作りて、妾に授けつ。是を以て、大御頸を刺しまつらむとして、三度まで舉りしかども、急ち、哀情起りて、得刺しまつらで、泣きつる涙の落ちて、大御面を治らしつる、必ず、是の表にこそあらめ」と白し給ひき。

爾、天皇、「殆に、欺かえつるかも」と詔り給ひて、乃ち、軍を興して、沙本毘古王を撃りに遣はず時に、其の王、稻城を作りて、待ち戦ふ。此の時、沙本毘賣命、其の同母兄を思ほしかねて、後門より逃げ出でて、其の稻城に納りましき。此の時しも、其の后、妊身したりき。

於是、天皇、其の後の愛重し給ふことも、三年になりぬるに、懷妊してさへあることを、甚哀しと思ほしき。故、其の軍を廻はしめつ、急げくも、攻迫め給はざりき。

如此逗留れる間に、其の懷妊せりし御子、産れましぬ。故、其の御子を出して、稻城の外に置きまつりて、天皇に、白さしめ給はく、「若し、此の御子をば、天皇の御子と思ほしめさば、養育め給へ」と白さしめ給ひき。

於是、天皇、其の同母兄をこそ怨ひ給へれ。猶、后をば、甚愛しと思ほせりければ、夫れ得給はむの御心ましき。是を以て、軍士の中に、力士の輕捷を選び聚へて、宣り給ひつらくは、「其の御子を取らむ時、其の母王をも掠取りてよ。御髪にまれ、御手にまれ、取り獲む隨、掬みて控き出でまつれ」と宣り給ひき。

爾、其の后、豫め、其の御情を知り給ひて、悉に、其の髪を剃りて、其の髪以て、其の御頭を覆ひ、亦、玉の緒を腐して、御手に三重纏かし、且、酒以て、御衣を腐して、全き御衣の如、服せり。斯く、設備へて、其の御子を抱きて、城外に差出で給ひき。

爾、其の力士等、其の御子を取りまつりて、即ち、其の御親を握りまつらむと、其の御髪を握れば、御髪自ら落ち、其の御手を握れば、玉の緒、且、絶え、其の御衣を



握れば、御衣、便ち、破れつ。是を以て、其の御子を取得まつりて、其の御親をば得取りまつらざりき。故、其の軍士等、還り參來て、奏言しつらく、「御髪自ら落ち、御衣亦破れ、御手に纏かせる玉の緒も絶えにしかば、御親をば獲まつらず。御子を取り得まつりつ」と白す。爾、天皇、悔い恨み給ひて、玉作りし人等を惡まして、其の地を皆奪り給ひき。故、諺に、地得ぬ玉作り、とぞいふなる。

亦、天皇、其の後に、詔らしめ給はく、「凡て、子の名は、必ず、母なも付くるを、是の御子の御名をば何とか稱けむ」と詔らしめ給ひき。爾、御答へ白し給はく、「今、稻城を焼く時しも、火中に生まれませれば、其の御名は、本牟知和氣御子とぞ稱けまつるべき」と白さしめ給ひき。又、「何に爲て、治養し奉らむ」と詔らしめ給へるに、「御乳母を取り、大湯坐、若湯坐を定めて、治養し奉るべし」と答白し給ひき。故、其の後の白し給ひの隨、治養し奉りき。又、其の後に、「汝の堅めし瑞の下紐は、誰かも解かむ」と問はしめ給へば、「旦波比古多須美智能宇斯王の御女、名は兄比賣、弟比賣、茲の二女王ぞ淨き公民にませば、使ひ給ふべし」と答白さしめ給ひき。然ありて、

遂に、其の沙本比古王を殺り給へるに、其の同母妹も從ひ給ひき。

故、其の御子を率て、遊べる状は、尾張の相津なる二俣榎を、二俣小舟に作りて、持ち上り來て、倭の市師の池、輕の池に浮べて、其の御子を率て遊びき。然るに、是の御子い、八拳鬚心前に至るまで、眞言問はず。故、今、高往く鶴が音を聞かして、始めて、吾君問ひ爲給ひき。爾、山邊之大鶴（此の人名）を遣はして、其の鳥を取らしめき。

故、是の人、其の鶴を追ひ尋ねて、木の國より針間の國に到り、亦、追ひて、稻羽の國に越え、即ち、旦波の國、多遲麻の國に到り、東の方に追ひ廻りて、近淡海の國に到り、乃ち、三野の國に越え、尾張の國より傳ひて、科野の國に追ひ、遂に、高志の國に追ひ到りて、和那美の水門に網を張り、其の鳥を取りて、持ち上りて獻りき。故、其の水門を和那美の水門とは謂ふなり。復、其の鳥を見給へば、物言はむと思はして、思ほすが如、言ひ給ふことなかりき。

於是、天皇、患ひ給ひて、御寢ませる時に、御夢に覺し曰はく、「我が宮を天皇の御



舎の如、修理り給はば、御子、必ず、眞言問はむ」如此覺し給ふ時に、太占に卜へて、何れの神の御心ぞと求むるに、爾の祟は、出雲の大神の御心なりき。

故、其の御子をして、其の大神の宮を拜ましめに遣り給はむとする時に、誰人を副はしめば吉けむと占ふに、曙立王、御卜に合へり。故、曙立王に科せて、誓ひ白さしむらく、「此の大神を拜むに因りて、誠、驗あらば、是の鷺巢の池の樹に住める鷺や、誓ひ落ちよ」如此詔り給ふ時に、其の鷺、地に墮ちて死にき。又、「誓ひ活きよ」と詔り給へば、更に、活きぬ。又、甜白檮の前なる、葉廣熊白檮を誓ひ枯し、亦、誓ひ生かしき。

爾、其の曙立王に、倭者師木登美豊朝倉曙立王といふ名を賜ひき。即ち、曙立王、菟上王二王を其の御子に副へて遣はす時に、「那良戸よりは、跋盲遇はむ、大阪戸よりも、跋盲遇はむ、唯、木戸ぞ掖戸の吉戸」と卜へて、出で行かす時に、到ります地毎に、品遅部を定めき。故、出雲に到りまして、大神を拜み訖へて、還り上ります時に、肥河の中に、黒櫛橋を作り、假宮を仕へ奉りて坐さしめき。

爾、出雲の國造の祖、名は、岐比佐都美、青葉の山を飭りて、其の河下に立て、大御食獻らむとする時に、其の御子、詔り給ひつらく、「是の河下に、青葉の山如るは、山と見えて、山に非ず、若し、出雲の石碕の曾宮に坐す、葦原色許男大神を以ち齋く、祝が大庭か」と問ひ給ひき。

爾、御伴に遣はさえたる王等、聞き歡び、見喜びて、御子をば、檳榔の長穗の宮に坐せまつりて、早馬使を貢上りき。

爾、其の御子、一宿、肥長比賣に婚ひましき。故、其の美人を竊伺み給へば蛇なりき。即ち、見畏みて、遁げ給ひき。爾、其の肥長比賣、患みて、海原を光らして船より追ひ來れば、益、見畏みて、山の陰より御船を引き越して、逃げ上り行でましつ。

於是、復奏言さく、「大神を拜み給へるによりて、大御子、物詔り給へる故に參上り來つ」と言す。故、天皇、歡喜して、即ち、菟上王を返して、神の宮を造らしめ給ひき。

於是、天皇、其の御子に因りて、鳥取部、鳥甘部、品遅部、大湯坐、若湯坐を定め



給ひき。

又、其の後の白し給ひの隨、美知能宇斯王の女等、比婆須比賣命、次に、弟比賣命、次に、歌凝比賣命、次に、圓野比賣命、并せて、四柱を喚上げ給ひき。然るに、比婆須比賣命、弟比賣命、二柱を留めて、其の弟王二柱は、甚凶醜かりしに因りて、本土に返し送り給ひき。於是、圓野比賣、「同じき兄弟の中に、姿醜きによりて、還さゆること、隣りに聞えむは、甚慚し」といひて、山代の國の相樂に到りませる時に、樹の枝に取り懸りて、死なむとぞ爲給ひける。故、其地の號を懸木と謂ひしを、今は、相樂と云ふなり。又、弟國に到りませる時に、遂に、峻淵に、墮入りてぞ死せ給ひぬる。故、其地の號を墮國と謂ひしを、今は、弟國と云ふなり。

又、此の天皇、三宅連等が祖、名は、多遲摩毛理を常世の國に遣はして、非時の香の木の實を求めしめ給ひき。故、多遲摩毛理、遂に、其の國に到りて、其の木の實を採りて、纒八纒、矛八矛を持ちて、參來つる間に、天皇、既に、崩りましぬ。爾、多遲摩毛理、纒四纒、矛四矛を分けて、大后に獻り、纒四纒、矛四矛を、天皇の御陵の

戸に、獻り置きて、其の木の實を擧げて、叫び哭びて、「常世の國の非時の香の木の實を持ちて、參上りて侍ふ」と白して、遂に、叫哭び死にき。其の非時の香の木の實といふは、是れ、今の橘なり。

此の天皇、御年、壹佰伍拾參歲。御陵は、菅原の御立野の中に在り。又、其の大后、比婆須比賣命の時、石棺作を定め給ひ、又、土師部を定め給ひき。此の後は、狹木の寺間の御陵に葬しまつりき。

日代の宮（景行天皇）

大帶日子淤斯呂和氣天皇、纏向の日代の宮に坐して、天の下治しめしき。此の天皇、吉備臣等が祖、若建吉備津日子の御女、名は、針間之伊那毘能大郎女に娶ひまして、生みませる御子、櫛角別王。次に、大碓命、次に、小碓命、亦の御名は、倭男具那命。次に、倭根子命、次に、神櫛王（五柱）。又、八尺入日子命の御女、八坂之入日賣命に娶ひまして、生みませる御子、若帶日子命。次に、五百木之入日子命。次に、押別命。



次に、五百木之入日賣命。又妾の御子、豊戸別王。次に、沼代郎女。又妾の御子、沼名木郎女。次に、香余理比賣命。次に、若木之入日子王。次に、吉備之兄日子王。次に、高木比賣命。次に、弟比賣命。又、日向之美波迦斯毘賣を娶して、生みませる御子、豊國別王。又、伊那毘能大郎女の弟、伊那毘能若郎女を娶して、生みませる御子、眞若王。次に、日子人之大兄王。又、倭建命の御曾孫、名は、須賣伊呂大日子王の女、訶具漏比賣を娶して、生みませる御子、大枝王。

凡て、此の大帶日子天皇の御子等、書に録せる、廿一王。記さざる、五十九王。并せて、八十王ませる中に、若帶日子命と、倭建命、亦、五百木之入日子命と、此の三王ぞ、太子と白す御名を負はして、其より餘、七十七の王等は、悉に、國々の國の造、亦、別、稻置、縣主に別け賜ひき。

故、若帶日子命は、天の下治しめしき。小碓命は、東西の荒ぶる神、不伏人等を平け給ひき。次に、櫛角別王は、(茨田下連等が祖。)次に大碓命は、(守君、大田君、島田君の祖。)次に、神櫛王は、(木國の酒部の阿比古、宇陀の酒部の祖。)次に、豊國別王は、

(日向の國造の祖なり。)

於是、天皇、三野の國造の祖、神大根王の御女、名は兄比賣、弟比賣二嬢子、其、容姿麗美を聞き召し定め、其の御子、大碓命を遣はして、喚上げ給ふ。故、其の遣はさえたる大碓命、召上げずて、即、己と自ら其の二嬢子に妬けて、更に、他女人を求めて、其の嬢女と詐して、貢上りき。於是、天皇、其他女なることを知しめして、恒に、長目を經しめ、亦、婚しもせずて、物思はしめ給ひき。故、其の大碓命、兄比賣に娶ひて、生みませる御子、押黒之兄日子王。(此は、三野の宇泥須の別の祖。)亦、弟比賣に娶ひて、生みませる御子、押黒之弟日子王。(此は、牟宜都君等が祖なり。)

此の御世に、田部を定め給ひ、又、東の淡の水門を定め給ひ、又、膳の大伴部を定め給ひ、又、倭の屯家を定め給ひ、又、坂手の池を作りて、其の堤に、竹を植ゑしめ給ひき。

天皇、小碓命に詔り給はく、「何とかも、汝の同母兄、朝夕の大御食に參出來ざる、



専ら、汝、希ぎ教へ覺せ」と詔り給ひき。如此、詔り給ひて後、五日といふ迄に、猶、參出給はざりき。爾、天皇、小碓命に問ひ給はく、「何ぞ、汝の兄、久しく參出來ざる、若し、未だ、誨へずありや」と問ひ給へば、「既に、希ぎつ」と、答白し給ひき。又、「如何様にか希ぎつる」と詔り給へば、答白し給はく、「朝曙に厠に入りたりし時、捕へて搯批ぎて、其の四肢を引き闕きて、薦に裹みて、投棄てつ」とぞ答し給ひける。

於是、天皇、其の御子の猛く荒き情を惶みまして、詔り曰く、「西の方に、熊曾建二人あり。是れ不伏、无禮人等なり。故、其の人等を取殺れ」と詔り給ひて遣はしき。此の時に當りて、其の御髮、御額に結はせり。

爾、小碓命、其の御姨、倭比賣命の御衣御裳を給はり、劍を御懷に納れて、幸行しき。故、熊曾建が家に到りて見給へば、其の家の邊に、軍兵、三重に圍み、室を作りてぞ居りける。於是、「新室宴樂爲む」と言ひ動みて、食物を設け備へたりき。故、其の傍を遊行きて、其の宴樂する日を、待ち給ひき。

爾、其の宴樂の日に臨りて、其の結はせる御髮を、童女の髮の如、梳り垂れ、其の内に入りまじき。

御姨の御衣御裳を服して、既に、童女の姿に成りて、女人の中に交り立ちて、其の室内に入りまじき。

爾、熊曾建兄弟二人、其の嬢子を見感でて、己が中に坐せて、盛りに、宴樂げたり。故、其の酣なるに臨りて、御懷より劍を出し、熊曾が衣の衿を取りて、劍以て、其の胸より刺し通し給ふ時に、其の弟建、見畏みて、逃げ出でき。乃ち、其の室の階の下に、追ひ至りて、其の背を取へ、劍以て、尻より刺し通し給ひき。

爾、其の熊曾建、白言らく、「其の御刀をな動かし給ひそ。僕白言すべきことあり」と白す。爾、暫時、許して押し伏せ給ふ。於是、白言つらく、「汝が命は、誰にますぞ」。

「吾は、纏向の日代の宮にましまして、大八島國知しめす、大帯日子淤斯呂和氣天皇の御子、御名は、倭男具那王にます。汝奴、熊曾建二人、不伏無禮と聞しめして、汝奴を取殺れと、詔り給ひて、遣はせり」と詔り給ひき。

爾、其の熊曾建、「信に然まさまむ。西の方に、吾二人を除きて、猛く強き人なし。然るに、大倭の國に、吾二人に益して、建き男は坐しけり。是を以て、吾、御名を獻ら



む、自今以後、倭建御子と稱へ申すべし」と白しき。是の事、白し訖へつれば、即ち、熟菘の如、振り拆きて殺し給ひき。

故、其の時よりぞ御名を稱へて、倭建命とは謂しける。然して、還り上ります時に、山神、河神、又、穴戸神を、皆言向け和して參上りましき。即ち、出雲國に入りまして、其の出雲建を取殺らむと欲して到りまして、即ち、結友爲給ひき。故、竊に、赤檮以て、刀に詐作して、御佩かして、共に、肥河に沐し給ひき。爾、倭建命、河より先づ上りまして、出雲建が、解き置ける横刀を取り佩かして、「刀易へせむ」と詔り給ふ。故、後に、出雲建、河より上りて、倭建命の詐刀を佩きき。於是、倭建命「誘、刀合はさむ」と誂へ給ふ。爾、各、其の刀を抜く時に、出雲建、詐刀を得抜かず。即ち、倭建命、其の刀を抜かして、出雲建を打殺し給ひき。

爾、御歌曰し給はく、

八雲立す

出雲建が

佩ける太刀

黒葛多纏き

眞身無しに哀れ

故、如此、撥ひ治げて、參上りて復奏し給ひき。

爾、天皇、亦、頻て、倭建命に、「東の方、十二道の荒ぶる神、及、不伏人等を言向け和平せ」と詔り給ひて、吉備臣等が祖、名は、御鉏友耳建日子を副へて遣はす時に、枸骨の八尋矛を給ひき。故、御命を受け給はりて、罷り行でます時に、伊勢大神宮に參りまして、神の御門を拜み給ひて、即、其御姨、倭比賣命に白し給へらくは、「天皇、既く、吾を死ねとや、思ほすらむ。何なれか、西の方の悪人等を撃りに遣はして、返り參上り來し間、幾時も未經ば、軍衆をも賜はずて、今更に、東の方の十二道の悪人等を、平けには遣はすらむ。此に因りて思惟へば、猶、吾、既く死ねと思ほしめすなりけり」と白して、患ひ泣きて罷ります時に、倭比賣命、草薙劍を賜ひ、亦、御囊を賜ひて、「若し、急事あらば、茲の囊の口を解き給へ」となも詔り給ひける。

故、尾張國に到りまして、尾張の國造の祖、美夜受比賣の家に入りましき。乃ち、婚さむと思ほし、かども、亦、還り上りたらむ時にこそ、婚さめと思ほして、期り定きて、東の國に幸まして、山河の荒ぶる神、及、不伏人等を、悉に、言向け和平し給



ひき。

故、爾、相武國に到りませる時に、其の國造、詐り白さく、「此の野の中に、大沼あり、是の沼の中に住める神、甚く、逸速振る神なり」と白す。

於是、其の神を看行しに、其の野に入りましつれば、其の國造、其の野に、火をなも著けたりける。故、欺かえぬと知ろしめして、其の御姨、倭比賣命の給へる御囊の口を、解き開けて見給へば、其の裏に、火打ぞありける。於是、先づ、其の御刀以て、草を刈り撥ひ、其の火打を以ちて、火を打ち出で、向火を著けて、焼き退けて、還り出でまして、其の國造等を、皆切り滅し、即ち火を著けて、焼き給ひき。故、其地をば、今に、燒遣とぞ謂ふ。

其れより入幸して、走水の海を渡ります時に、其の渡の神、浪を興て、御船廻ひて、得進み渡りまさず。爾、其の後、御名は、弟橋比賣命の白し給はく、「妾、御子に易りて、海中に入りなむ。御子は、所遣の政遂げて、復、奏し給ふべし」と白して、海に入りまさむとする時に、菅壘八重、皮壘八重、繩壘八重を、波の上に敷きて、其

の上を下り坐しき。

於是、其の暴浪、自ら伏ぎて、御船、得進みき。爾、其の後、歌曰

眞佐斯 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて

問ひし君はも

故、七日ありて後に、其の後の御櫛、海邊に依りたりき。乃ち、其の御櫛を取りて、

御陵を作りて、治め置きき。

其れより入幸まして、悉に、荒ぶる蝦夷等を言向け、亦、山河の荒ぶる神等を平和して、還り上幸ります時に、足柄の坂本に到りまして、御糧食す處に、其の坂の神、白鹿に化りて、來立ちき。爾、其の咋遣の蒜の片端以て、待ち打ち給ひしかば、其の目に申りて、乃、打殺さえたりき。故、其の坂に、登り立ちて、三歎して、「吾孀はや」と詔り給ひき。故、其の國を、阿豆麻とは謂ふなり。

即ち、其の國より越えて、甲斐に出で、酒折の宮に坐しましける時に、歌曰、

新治 筑波を過ぎて 幾夜か宿つる



爾、其の御火燒の老人、御歌を續ぎて、

日日並べて 夜には九夜 日には十日を

とぞ歌ひける。是を以て、其の老人を譽めて、東の國造にぞ爲し給ひける。

其の國より、科野國に越えまして、科野の阪の神を言向けて、尾張國に還り來まし

て、先に、期りおかし、美夜受比賣の許に入りましつ。

於是、大御食獻る時に、其の美夜受比賣、大御酒盞を捧げて獻る。爾、美夜受比

賣、其れ、被衣の欄に、月經著きたり。故、其を見はして、御歌曰し給はく、

久方の 天の香山 利鎌に 眞渡る杵

弱細 手弱腕を 枕かむとは 吾は爲れど

眞寝むとは 吾は思へど 汝が著せる 襲の欄に

月立ちにけり 吾は思へど 汝が著せる

爾、美夜受比賣、御歌に答へて曰ひけらく、

高光る 日の御子 安見爲し 吾が大君

新玉の 年が來經れば 新玉の 月は來經往く

諾な諾な 君待ち難に 吾が著せる 襲の欄に

月立たなむよ

故、爾、婚ひまして、其の御刀の草薙の劔を、其の美夜受比賣の許に置きて、伊服

岐の山の神を取りに、幸行ましき。

於是、詔り給はく、「茲の山の神は、徒手に、直に、取りてん」と詔り給ひて、其の

山に騰ります時に、山邊に、白猪逢へり。其の大きさ、牛の如くなりき。爾、揚言し

て詔り給はく、「是の白猪に化れる者は、其の神の使者にこそあらめ。今、殺らすとも、

還らむ時に、殺りてむ」と詔り給ひて、騰りましき。於是、大氷雨を零らして、倭建

命を打惑はしまつりき。(此の白猪に化れる者は、其の神の使者には非ずて、其の神の

正身にぞありけむを、揚言し給へるに因りて、惑さえ給へるなり。故、還り下りまし

て、玉倉部の清水に到りて、息ひませる時に、御心、稍、寤めましき。故、其の清水

を居寤清水とぞ謂ふ。



其處より發して、當藝野の上に到りまし、時に、詔り給へるは、「吾が心、恒は、虚空よりも翔り行かむと念ひつるを、今、吾が足、得歩まず、舵の形に成れり」とぞ詔り給ひける。故、其地を當藝と謂ふ。

其地より差少し幸行ますに、甚く疲れませるによりて、御杖を衝かして、稍に、歩みましき。故、其地を杖衝坂と謂ふ。

尾津前の一松の許に、到りませるに、先に、御食せし、時、其地に忘らしたりし御刀、失せず猶ありき。爾、御歌曰し給はく、

尾張に

直に向へる

尾津の前なる

一松吾兄を

ひとつまつ

人にありせば

大刀佩けましを

衣著せましを

一松吾兄を

其地より幸まして、三重村に到りませる時に、亦、「吾が足、三重の勾餅如して、甚く、疲れたり」と詔り給ひき。故、其地を三重と謂ふ。  
其地より幸行まして、能煩野に到りませる時に、國思ばして、歌曰く、

倭は

國の眞秀ば

疊付く

青垣山

隠れる

倭し

美はし

又歌曰

命の

全けむ人は

疊菰

平群の山の

隱白禱が葉を

髻華に挿せ

其の子

此の御歌は、思國歌なり。又、歌曰く、

愛けやし

吾家の方よ

雲起ち來も

此は、片歌なり。此の時、御病、甚急になりぬ。爾、御歌曰

嬢女の

床の邊に

吾が置きし

劔の大刀

其の大刀はや

と歌ひ竟へて、即ち、崩りましぬ。爾、早馬使を貢上りき。

於是、倭に坐す后等、及、御子等、諸下到まして、御陵を作りて、其地の靡附き田

に、匍匐廻りて、哭しつ、歌曰く、



懷きの

田の稻幹に

稻幹に

蔓延廻るふ

薺葛

於是、八尋白父鳥に化りて、天に翔りて、濱に向きて、飛び行しぬ。爾、其の后、及御子等、其地なる小竹の荻株に、御足傷破るれども、其の痛きをも忘れて、哭く哭く追ひいでましき。此の時の歌曰

浅小竹原

腰煩む

虚空は行かず

足よ行くな

又、其の海鹽に入りて、滞み行きまし、時の歌曰

海行けば

腰煩む

大河原の

植草

海は

躊躇ふ

又、飛びて、其地の磯に居給へる時の歌曰

濱つ千鳥

濱よは行かず

磯傳ふ

是の四歌は、皆、其の御葬に歌ひたりき。故、今に、其の歌は、天皇の大御葬に歌ふなり。

故、其の國より飛び翔り行まして、河内國の志幾に留りましき。故、其地に、御陵を作りて、鎮りまさしめき。其の御陵を白鳥の御陵とぞ謂ふ。然れども、亦、其地より、更に天翔りて飛び行ましぬ。

凡て、此の倭建命、國平けに廻行まし、時、久米直の祖、名は、七拳脛、恒も膳夫として、御從仕へ奉りき。

此の倭建命、伊玖米天皇の女王、布多遲能伊理毘賣命に娶ひまして、御子、帶中津日子命を生みましき。(一柱)又、其の海に入りまし、弟橘比賣命に娶ひまして、生みませる御子、若建王。(一柱)又、近淡海の安の國造の祖、意富多牟和氣が女、布多遲比賣を娶して、生みませる御子、稻依別王。(一柱)又、吉備の臣、建日子の妹、大吉備建比賣を娶して、生みませる御子、建貝兒王。(一柱)又、山代の玖玖麻毛理比賣を娶して、生みませる御子、足鏡別王。(一柱)又、一妻の生める御子、息長田別王、凡て、是の倭建命の御子等、并せて、六柱坐せり。

故、帶中津日子命は、天の下治しめしき。次に、稻依別王は、(犬上君、建部君等が



祖)次に、建具兒王は、(讚岐の綾君、伊豫の別君、登袁の別、麻佐首、宮首の別等が祖。)足鏡別王は、(鎌倉の別、小津君、石代の別、漁田の別の祖なり。)

次に、息長田別王の御子、杵俣長日子王。此の王の御子、飯野眞黒比賣命。次に息長眞若中比賣。次に、弟比賣。(三柱)

故、上に云へる若建王、飯野眞黒比賣に娶ひて、生みませる御子、須賣伊呂大中日子王。此の王、淡海の柴野入杵が女、柴野比賣に娶ひて、生みませる御子、迦具漏比賣命。故、大帯日子天皇、此の迦具漏比賣命を娶して、御子、大江王を生みまじき。

(二柱)、此の王、庶妹、銀王に娶ひて、生みませる御子、大名方王。次に、大帯日子天皇、此の大帯日子天皇の御年、壹佰參拾漆歳。御陵は、山邊の道の上に在り。

志賀の宮(成務天皇)

若帯日子天皇、海近淡の志賀の高穴穂の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の

天皇、穗積臣等が祖、建忍山垂根の女、名は、弟財郎女を娶して、御子、和訶奴氣王を生みまじき。(一柱)

故、建内宿禰を大臣と爲給ひ、大國小國の國造を定め給ひ、亦、國々の堺、及、大縣小縣の縣主を定め給ひき。

この天皇、御年、玖拾伍歳。御陵は、沙紀の多他那美に在り。

訶志比の宮(仲哀天皇)

帶中日子天皇、穴門の豊浦の宮、及、筑紫の訶志比の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、大江王の御女、大津津比賣命に娶ひまして、生みませる御子、香坂王、忍熊王。(二柱)、又、息長帯比賣命に娶ひまじき。是の太后の生みませる御子、品夜和氣命。次に、大鞞和氣命。亦の御名は、品陀和氣命。(二柱)

此の太子の御名、大鞞和氣命と負はせる所以は、初め生れませる時に、御腕に、鞞如せる肉生し故に、其の御名に著け奉りき。是を以て、御腹中に坐しまして、國定め



給へりし事、知らえたり。

此の御世に、淡道の屯家を定め給ひき。

其の太后、息長帯日賣命は、當時、神託り給へりき。故、天皇、筑紫の訶志比の宮に坐しまして、熊曾の國を撃け給はむとせし時に、天皇、御琴を弾かして、建内宿禰大臣、清庭に居て、神の御命を請ひ奉りき。於是、太后、神懸りして、言教へ覺し詔ひつらくは、「西の方に國あり、金銀をはじめて、目の眩耀く種種の珍寶、其の國に多なるを、吾、今、其國を歸せ賜はむ」と詔り給ひき。

爾、天皇、答へ白し給はく、「高地に登りて、西の方を見れば、國土は見えず、唯、大海のみこそあれ」と白して、詐り爲す神と謂して、御琴を押し退けて、弾き給はず、默坐ましぬ。爾、其の神、大く忿らして、「凡、茲の天の下は、汝の知らすべき國に非ず。汝は、一道に向ひませ」と詔り給ひき。

於是、建内宿禰大臣、白しけらく、「恐し、我が天皇、猶、其の大御琴彈奏ばせ」と白しき。爾、稍、其の御琴を取り寄せて、濫々に、彈きましけるに、幾程もあらずて、

御琴の音、聞えずなりぬ。即、火を擧げて見まつれば、既く崩りましにき。

爾、驚き懼みて、殯宮に坐せまつりて、更に、諸國の大幣を取りて、生剝、逆剝、畔離、溝埋、尿戸、上通下通婚、馬婚、牛婚、鶏婚、犬婚の罪の類ひを、種々求ぎて、國の大祓して、再、建内宿禰、清庭に居て、神の御命を請ひ奉りき。

於是、教へ覺し給ふ狀、具に、先日之の如くにて、「凡、此の國は、汝が命の御腹に坐す御子の、知らさむ國なり」と教へ覺し給ひき。爾、建内宿禰、「恐し、我が大神、其の神の御腹に坐す御子い、何の御子ぞ」と白せば、「男御子ぞ」と答詔り給ひき。

爾、具に請ひまつりけらく、「今、如此、言教へ給ふ大神は、其の御名を知らまく欲し」と白せば、答詔ひつらく、「是は、天照大神の御心なり。亦、底筒男、中筒男、上筒男、三柱の大神なり。(此の時にぞ、其の三柱の大神の御名は、顯はし給へるなり。)今、寔に、其の國を求めむと思さば、天神地祇、亦、山神河海の諸神に、悉に、幣帛奉り、我が御魂を御船の上に坐せて、眞木の灰を瓠に納れ、亦、箸と葉盤を多に作りて、皆々、大海に散らし浮けて、渡りますべし」と詔り給ひき。



故、備に、教へ覺し給へる如くして、御軍を整へ、御船を連並めて、渡り幸ます時に、海原の魚ども、大きなる小さき、悉に、御船を負ひて渡りき。爾、順風、大に起きて、御船、浪のまに／＼行きつ。故、其の御船の波瀾、新羅の國に、押し騰りて、既に國半らまで到りき。

於是、其の國主、畏惶みて、奏言しけらく、「今より以後、天皇の御命の隨、御馬飼ひとして、毎年、船並めて、船腹乾さず、楫乾さず、天地の共與、無窮に、仕へ奉らむ」と白しき。故、是を以て、新羅國をば、御馬飼と定め給ひ、百濟國をば、渡の屯家と定め給ひき。爾、其の御杖を、新羅の國主の門に、衝き立て給ひき。即ち、墨江の大神の荒御魂を、國守ります神と、祭鎮りて、還り渡りましき。

故、其の政、未だ、竟へ給はざる間に、懷妊せる御子、産れまさむとしつ。即、御腹を鎮ひ給はむ爲に、石を取らして、御裳の腰に纏かして、筑紫の國に渡り來ましてぞ、其の御子は生れましける。故、其の御子生み給へる地を、宇美とぞ謂けける。亦、其の御裳に纏かせりし石は、筑紫の國の伊斗村になも在る。

亦、筑紫の末羅縣の玉島の里に、到りまして、其の河邊に、御食せず時、四月の上旬なりしかば、其の河中の磯に坐して、御裳の糸を抜き取り、飯粒を餌に爲て、其の河の年魚をなも釣らしける。(其の河の名を小河といふ。亦、其の磯の名を勝門比賣といふ。)故、四月の上旬の時、女人、裳の糸を抜き、飯粒を餌に爲て、年魚釣る事、今に絶えず。

於是、息長帶日賣命、倭に還り上ります時に、人の心、疑はしきに因りて、喪船一艘具へて、御子を、其の喪船に、載せ奉りて、先づ、「御子は、既に崩りましぬ」と言ひ漏さしめ給ひき。

如此して上り幸ます時に、香坂王、忍熊王、聞きて、待ち取らむと思ほして、斗賀野に進み出て、祈狩爲給ひき。爾、香坂王い、歷木に騰り坐して、見給ふに、大きな怒猪出で、其歷木を掘りて、即ち、其の香坂王を咋食ひつ。其の御弟、忍熊王、其の態をも畏ますて、軍を興し、待ち迎へ給ふ時に、喪船に赴ひて、空船を攻め給はむとす。爾、其の喪船より軍を下して戦ひき。



此の時、忍熊王は、難波の吉師部の祖、伊佐比宿禰を將軍と爲給ひ、太子の御方には、丸邇の臣の祖、難波根子建振熊命をぞ將軍と爲給ひける。故、追ひ退けて、山代に到れる時に、還り立ちて、各、退かずて、相戦ひき。

爾、建振熊命、權りて、「息長帶日賣命は、既に、崩りましぬれば、更に、戦ふべき事なし」と云はしめて、弓絃を絶ちて、欺陽りて歸服ひぬ。於是、其の將軍、既に、詐りを信みて、弓を弭し、兵器を藏めてき。爾、頂髪の中より、設けたる弦を探り出で、(一名を宇佐由豆留といふ)更に、張りて追ひ撃らき。故、逢坂に、逃げ退きて、對立ちて、亦、戦ひけるを、追ひ迫め敗りて、沙沙那美に出で、なも、悉に、其の軍を斬りける。

於是、其の忍熊王、伊佐比宿禰と共に、追ひ迫めらえて、船に乗り、海に浮びて、歌ひ給はく。

いざ吾君

振熊が

痛手負はずは

鵬鷹の

淡海の海に

潜き爲な吾

と歌ひて、即ち、海に入りて、共に死せ給ひぬ。

故、建内宿禰命、其の太子を率てまつりて、御禊爲むとして、淡海及若狭の國を經歷し時に、高志の前の角鹿に、假宮を造りて、坐せまつりき。

爾、其地に坐す、伊奢沙和氣大神の命、夜夢に見えて、「吾が名を、御子の御名に易へまく欲し」と云り給ひき。爾、言禱ぎて、「恐し、御命の隨、易へ奉らむ」と白しき。亦、其の神詔り給はく「明日の旦、濱に幸ますべし、名易への禮物獻らむ」と詔り給ひき。

故、旦、濱に幸行ませる時に、鼻毀れたる入鹿魚、既に、一浦に依れり。於是、御子、神に白さしめ給はく、「我に御食の魚、給へり」と云さしめ給ひき。故、亦、其の御名號を稱へて、御食津大神と白す。故、今に、氣比大神とも謂す。亦、其の入鹿魚の鼻の血、鼻かりき。故、其の浦を血浦と謂ひしを、今は、都奴賀とぞ謂ふなる。於是、還り上りませる時に、其の御祖、息長帶日賣命、待酒を醸みて獻らしき。爾、



其の御祖の御歌曰

此の御酒は

石立たす

豊壽ぎ

涸さず飲せ、さ、

如此、歌はして、大御酒獻らしき。

爾、建内宿禰命、御子の御爲に、答へ奉れる歌

此の御酒を

歌ひつ、

此の御酒の

此は、酒樂の歌なり。

凡てこの帶中津日子天皇の御年、伍拾貳歲。御陵は、河内の惠賀の長江に在り。

吾が御酒ならず

少名御神の

壽ぎ廻ほし

酒の首長

神壽ぎ

獻り來し

常世國に坐す

壽ぎ狂ほし

御酒ぞ

白に立て、

醸みけれかも

舞ひつ、

あやに

轉樂し、さ、

明の宮（應神天皇）

品陀和氣命、輕島の明の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、品陀真若

王の女、三柱の女王に娶ひませる、一柱の御名は、高木之入日賣命。次に中日賣命。

次に、弟日賣命。（此の女王等の父、品陀真若王は、五百木之入日子命。尾張連の祖、

建伊那陀宿禰の女、志理都紀斗賣に娶ひて、生みませる御子なり。故、高木之入日賣

命の御子、額田大中日子命。次に、大山守命。次に、伊奢之真若命。次に、妹大原郎

女、次に、高目郎女。（五柱）中日賣命の御子、木之荒田郎女。次に、大雀命。次に、

根鳥命。（三柱）弟日賣命の御子、阿倍郎女。次に、阿具知能三腹郎女。次に、木之菟

野郎女。次に、三野郎女。（五柱）又、丸邇之比布禮能意富美の女、名は、宮主矢河枝

比賣を娶して、生みませる御子、宇遲能和紀郎子。次に、妹八田若郎女。次に、女鳥

王。（三柱）又、其の矢河枝比賣の弟、袁那辨郎女を娶して、生みませる御子、宇遲之

若郎女。（一柱）又、咋俣長日子王の女、息長真若中比賣を娶して、生みませる御子、



若沼毛二侯王。(一柱) 又、櫻井の田部連の祖、嶋垂根の女。糸井比賣を娶して生みませる御子、速總別命。(一柱) 又、日向の泉長比賣を娶して、生みませる御子、大羽江王。次に、小羽江王。次に、幡日之若郎女。(三柱) 又、迦具漏比賣を娶して、生みませる御子、川原田郎女。次に、玉郎女。次に、忍坂大中比賣。次に、登富志郎女。次に、迦多遲王。(五柱) 又、葛城の野伊呂賣を娶して、生みませる御子、伊奢能麻和迦王。(一柱)

此の天皇の御子等、并せて、廿六王。(男王十一、女王十五)

此の中に、大雀命は天の下治しめしき。

於是、天皇、大山守命と大雀命とに、「汝等は、兄なる子と弟なる子と、孰れか愛しき」と問はし給ひき。(天皇の斯く發問しける所以は、宇遲能和紀郎子に、天の下治しめさしめむとの御心ましつればなり。) 爾、大山守命、「兄なる子ぞ愛しき」と白し給ひき。次に、大雀命は、天皇の問はし給ふ大御情を知らして、白し給はく、「兄なる子は、既に、成人つれば、悞きこと無きを、弟なる子はぞ、未だ若ければ、愛しき」と

白し給ひき。

爾、天皇、詔り給はく、「雀吾君の言ぞ、我が思ほすが如くなる」と詔り給ひて、即ち、詔り別け給へらくは、「大山守命は、山海の政を爲し給へ。大雀命は、食國の政、執り以ちて白し給へ。宇遲能和紀郎子は天つ日嗣知らせ」と詔り別け給ひき。故大雀命は、天皇の御命に違ひまつらざりき。

一時、天皇、近淡海の國に、越え幸ます時、宇遲野の上に、御立たして、葛野を望けまして、歌曰けらく、

千葉の 葛野を見れば 諸富足る 家庭も見ゆ

國の富も見ゆ

故、木幡村に到りませる時に、其の道衢に、麗美き嬢子遇へり。爾、天皇、其の嬢子に、「汝は、誰が子ぞ」と問はしければ、答へ白さく、「丸邇之比布禮能意富美が女、名は、宮主矢河枝比賣」と白しき。天皇、其の嬢子に、「吾、明日、還幸まささむ時、汝の家に入りまさむ」と、詔り給ひき。故、矢河枝比賣、其の父に、委曲に語りき。



於是、父が答曰らく、「是は、天皇にましけり。恐し、我が子仕へまつれ」と云ひて、其の家を厳しく飭りて、候らひ待てば、明日、入りましぬ。故、大御饗を獻る時に、其の女、矢河枝比賣に大御酒盞を取らしめて、獻りき。

於是、天皇、其の大御酒盞を取らしめながら、御歌曰し給はく、

此の蟹や

何處の蟹

百傳ふ

角鹿の蟹

横去ふ

何處に到る

伊知遅志麻

美志麻に速來

鶺鴒の

潜き息衝き

坂崎嘔

佐々那美路を

直々と

吾が行せばや

木幡の道に

遇はし、嬢子

後方は

小楯ろかも

齒並み嘴

菱如す

櫟井の

丸邇坂の土を

初土は

膚赤らけみ

終土は

土黒きゆるに

三つ栗の

其の中つ土を

頭衝く

眞日には當てず

眉畫き濃に

畫き垂れ

遇はし、女

彼もがと

吾が見し兒等

此もがと

吾が見し兒に

轉宴に

向ひ居るかも

副ひ居るかも

如此て、婚ひまして、生みませる御子ぞ、宇遲和紀郎子にましける。

天皇、日向の國の諸縣君の女、名は、髮長比賣、其れ、顔容麗美と聞しめして、使

ひ給はむとして、喚上げ給ふ時に、其の太子、大雀命、其の嬢子の難波津に泊てた

るを見給ひて、其の姿容の端正に、感で給ひて、即ち、建内宿禰大臣に、詭告へ給は

く、「是の日向より、喚上げ給へる髮長比賣をば、天皇の大御所に請ひ白して、吾に賜

はしめよ」と詔り給ひき。

爾、建内宿禰大臣、大命を請ひしかば、天皇、即ち、髮長比賣を、其の御子に賜ひ

き。賜へる状は、天皇、豊明、聞しめす日、髮長比賣に、大御酒の柏葉を握らしめ

て、其の太子に賜ひき。爾、歌曰し給はく、

いざ子等

野蒜摘みに

蒜摘みに

吾が行く道の

香細し

花橘は

上枝は

鳥居枯し

下枝は

人取り枯し

三つ栗の

中つ枝の



蒼ほつちり

赤ら嬢子ををしめ

いざ誘さば

宜よらしな

又御歌曰

水淳たまる

依網よさみの池の

堰杖みぐひ打ち

菱殻ひしがらの

刺しらしける不知

蕁ぬなはくり

延はへけく不知しら

吾が心し

最痴いやをこにして

今ぞ悔まじしき

如此歌はして賜たまひき。

故かれ、其の嬢をしめ子を賜たまはりて後に、太子のみたまへるの歌曰、

道みちの後のち

古波陀嬢こはたをとも子を

神かみの如ごと

聞きえしかども

相枕あひまくら纏まく

又歌曰

道みちの後のち

古波陀嬢こはたをとも子は

争まをはず

寝ねしくをしぞも

愛うろはしみ思おもふ

又、吉野えしぬの國主くすども等、

大雀命おほささきの佩はかせる御刀みたちを瞻みて、歌曰うたひけらく、

品陀ほむだの

日ひの御子

大雀おほささき

大雀

佩たかせる太刀

本劍もとつるぎ

末振すゑふゆ

冬木ふゆき如ごとす

枯からが下樹したきの

清々さやく

又、吉野えしぬの白檮かしふ生なに、横白よこしろを作りて、其の横白よこしろに、大御酒おほみきを醸かみて、其の大御酒おほみきを

獻けんる時に、口鼓くちつづみを打ち、伎わざを爲なして歌曰うたひけらく、

白檮かしの生なに

横白よこしろを作り

横白よこしろに

醸かみし大御酒

美味うまに

聞きし以もち食をせ

吾まが君

此の歌は、國主くすども等、大贊おほにへ獻けんる時々とき々、恒つねに、今いまに至いたるまで、詠うたふ歌なり。

此の御世みよよに、海部あま、山部やまべ、山守部やまもりべ、伊勢部いせべを定め給たまふ。亦、劍つるぎの池いけを作る。亦、新あらた

羅人らびと、參まる渡り來きつ。是こを以もて、建内宿禰命たけうちすくねのみこと、引率ひきみて、堤池つみいけに役えだ爲なて、百濟ひゃくせいの池いけを作つく

る。

亦、百濟ひゃくせいの國主くすども、照古王せうこわう、牡馬壹疋をまひとつ、牝馬壹疋めまを阿知吉師あちきしに付つけて、貢たま上まつりき。(此

の阿知吉師あちきしは、阿直史等あちきのふみびとらが祖ちち)、亦、横刀たちと及大鏡おほなかがたとを貢たま上まつりき。



又、「百濟國に、若し賢人あらば、貢上れ」と科せ賜ふ。故、御命を受けて、貢上れる人、名は、和邇吉師。即ち論語十卷、千字文一卷、並せて、十一卷を是の人に付けて、貢進りき。(此の和邇吉師は、文首等が祖)

又、手人、韓鍛、名は、卓素、亦、吳服織、西素二人を貢上りき。

又、秦造の祖、漢直の祖、及、酒を醸む事を知る人、名は、仁番、亦の名は、須々許理等、參渡り來つ。

故、是の須々許理、大御酒を醸みて獻りき。於是、天皇、是の獻れる大御酒に浮立

げて御歌曰けらく、

須々許理が

醸みし御酒に

吾酔ひにけり

吾酔ひにけり

吾酔ひにけり

斯く、歌はしつ、幸行ませる時に、御杖以ちて、大坂の道の中なる大石を打ち給ひ

しかば、其の石、走り避りぬ。故、諺に、堅石も酔人を避くる、とぞ曰ふなる。

故、天皇、崩りまして後に、大雀命は、天皇之命の從、天の下を宇遲能和紀郎子に

譲り給ひき。

於是、大山守命は、天皇之命に違ひて、猶、天の下を獲むとして、其の弟皇子を殺さむの情ありて、竊に、兵を設けて、攻めむと爲給ひき。爾、大雀命、其の兄皇子の兵を備へ給ふことを聞かして、即ち、使者を遣りて、宇遲能和紀郎子に告げしめ給ひき。

故、聞き驚かして、兵を河邊に伏くし、亦、其の山の上に、繩垣を張り、帷幕を立て、詐りて、舍人を王に爲して、露に、吳床に坐せて、百官、恭敬び、往來ふ狀、既に、王子の坐す所の如して、更に、其の兄王の河を渡りまさむ時の爲に、船楫を具へ飭り、又、眞葛の根を、臼に舂き、其の汁の滑を取りて、其の船の中の簀橋に塗りて、踏みて仆るべく設けて、其の王子は、布の衣禪を服て、既に、賤人の形に爲りて、楫を執りて、船に、立ち坐せり。

於是、其の兄王、兵士を隱伏し、鎧を衣の中に服せて、河邊に到りて、船に乗りま



楫を執りて、船に立ち坐せる事をば、都て知らずて、即ち、其の楫執れる者に、問ひ曰はく、「茲の山に、忿怒れる大猪ありと、傳に聞けり。吾其の猪を取らむと欲ふを、若し、其の猪、獲てむや」と問ひ給へば、楫執れる者、「得獲給はじ」と答曰へば、「亦、何由」と問ひ給へば、「時々往々にして、取らむと爲れども得獲ず、是を以て、得獲給はじと白すなり」と答曰ひき。渡りて、河中に到れる時に、其の船を傾けしめて、水の中に、墮し入れき。爾、乃ち、浮き出で、水の随流れ下り給ひき。即ち、流れつづ歌ひ給はく、

千早振る

宇遅の渡に

棹取りに

早けむ人し

吾が許に來む

於是、河邊に伏隠れたる兵、彼方此方一時共に興りて、矢、刺して流しき。故、訶和羅の前に到りて、沈み入り給ひぬ。故、鉤を以ちて、其の沈み給ひし處を探りしかば、其の衣の中なる甲に繋りて、訶和羅と鳴りき。故、其地の號を訶和羅の前と謂ふなり。

爾、其の骨を掛出せる時に、弟王の歌曰、

千早振る

宇遅の渡に

渡り瀬に

立てる

梓弓

檀木

い伐らむと

心は思へど

い取らむと

心は思へど

本方は

君を思ひ出

末方は

妹を思ひ出

苛無けく

其に思ひ出

悲しけく

此に思ひ出

伐らずぞ來る

梓弓

檀木

故其の大山守命の御骨は、奈良山に葬しき。是の大山守命は、(土形君、幣岐君、榛原君等が祖なり。)

於是、大雀命と宇遅能和紀郎子と二柱、天の下を各譲り給ふ間に、海入い、大贄を貢りき。爾、兄王は辭みて、弟王に貢らしめ給ひ、弟王は、また兄王に貢らしめて、相譲り給ふ間に、既に、多日經ぬ。斯く相譲り給ふこと、一一時に非ざりければ、海人は、既に、往還に疲れて泣きけり。故、諺に、海人なれや己が物から泣く、とぞ



いふ。然るに、宇遲能和紀郎子は、早く崩りましぬ。故、大雀命ぞ天の下治しめしける。

又、昔し、新羅の國主の子、名は、天之日矛と謂ふあり。是の人、參渡來りけり。參渡來りける所以は、新羅の國に一つの沼あり、名を阿具奴摩と謂ふ。此の沼の邊に、一賤女、晝寢したりき。於是、日の輝、虹の如、其の陰上を指したるを、亦、一賤夫、其の狀を異と思ひて、恒に、其の女人の行ひを伺ひけり。故、是の女人、其の晝寢したりし時より妊身みて、赤玉をなも生みける。

爾、其の伺へる賤夫、其の玉を乞ひ取りて、恒は、裹みて、腰に著けたりき。此の人、山谷間に、田を營れりければ、耕人等の飲食を、一牛に負せて、山谷の中に入りけるに、其の國主の子、天之日矛、遇へり。爾、其の人に問ひけらく、「何ぞ汝、飲食を牛に負せて、山谷へは入るぞ。汝、必ず、是の牛を殺して食ふならむ」といひて、即ち、其の人を捕へて、獄囚に入れむとすれば、其の人、答へけらく、「吾、牛を殺さむとには非ず。唯、田人の食を送るにこそあれ」といふ。然れども、猶、赦さざり

ければ、其の腰なる玉を解きて、其の國主の子に幣しつ。故、其の賤夫を赦して、其の玉を將ち來て、床邊に置けりしかば、即ち、美麗き嬢子に化りぬ。仍、婚ひして、嫡妻と爲たりき。

爾、其の嬢子、常に、種々の珍味を設けて、恒々、其の夫に食めき。故、其の國主の子、心奢りて、妻を罵れば、其の女人、一凡、吾は、汝の妻に爲るべき女に非ず。吾が祖の國に行なむとす」と言ひて、竊びて、小船に乗りて、逃遁渡來て、難波になも留まりける。(此は、難波の比賣碁曾の社に坐す、阿加流比賣と謂す神なり。)

於是、天の日矛、其の妻の遁れし事を聞きて、乃ち、追ひ渡り來て、難波に到らむとする間に、其の渡の神、塞へて入れざりき。故、更に還りて、多遲摩の國に泊てつ。即ちその國に留りて、多遲摩の俣尾が女、名は、前津見に娶ひて、生める子、多遲摩母呂須玖、此れが子、多遲摩斐泥。此れが子、多遲摩比那良岐、此れが子、多遲摩毛理。次に、多遲摩比多詞。次に、清日子。(三柱)

此の清日子、當摩之咩斐に娶ひて、生める子、酸鹿之諸男。次に、妹菅竈由良度美。



故、上に云へる多遲摩比多訶、其の姪、由良度美に娶ひて、生める子、葛城之高額比賣命。(此は、息長帯比賣命の御祖)

故、其の天之日矛の持ち渡り來つる物は、玉つ寶と云ひて、珠二貫、又、浪振る振物、浪切る振物、風振る振物、風切る振物、又、奥つ鏡、邊つ鏡、并せて八種なり。

(此は、伊豆志の八前の大神なり。)

故、茲の神の御女、名は、伊豆志袁登賣神ませり。故、八十神、是の伊豆志袁登賣を得むとすれども、皆、得婚す。

於是、二神あり。兄を秋山之下氷壯夫と號ひ、弟を春山之霞壯夫とぞ名ひける。

故、其の兄、其の弟に謂ひけらくは、「吾、伊豆志袁登賣を乞へども、得婚す。汝、此の嬢子を得てむや」といへば、「易く、得てむ」と白ふ。爾、其の兄の曰く、「若し、汝、此の嬢子を得てあらば、上下の衣服を避り、身の高を量りて、甕に酒を醸み、亦、山河の物を、悉に、備へ設けて、慨憤賭をこそ爲め」といふ。爾、其の弟、兄の言へる如、具に、其の母に白せば、即ち、其の母、藤葛を取りて、一宿の間に、衣禪襪沓

まで織り縫ひ、亦、弓矢を作りて、其の衣禪等を服せ、其の弓矢を取らせて、其の嬢子の家に遣りしかば、其の衣服も弓矢も、悉に、藤の花とぞ成れりける。

於是、其の春山之霞壯夫、其の弓矢を嬢子の厠に繋けたるを、伊豆志袁登賣其の花を異しと思ひて、將ち來る時に、其の嬢子の後に立ちて、其の屋に入りて、即ち、婚ひしつ。故、一子生みたりき。爾、其の兄に、「吾は、伊豆志袁登賣を得たり」と白ふ。

於是、其の兄い、弟の婚つることを懐憤みて、其の慨憤賭物を償はず。爾、其の母に、愁ひ白す時に、御祖の答へらく、「我が御世の事、能くこそ神習はめ。又、現しき青人草習へや。其の物、償はぬ」といひて、其の兄なる子を恨みて、乃ち、其の伊豆志河の河島の節竹を取りて、八目の荒籠を作り、其の河の石を取り、鹽に合へて、其の竹の葉に裏み、詛ひ言はしめけらく、「此の竹葉の青むが如、此の竹葉の萎むが如、青み萎め。又、此の鹽の盈ち乾るが如、盈ち乾よ。又、此の石の沈むが如、沈み臥せ。」斯く詛ひて竈處の上に置かしめき。是を以て、其の兄、八年の間、干き萎み病み枯しき。故、其の兄、患ひ泣きて、其の御祖に請へば、即ち、其の詛戸を返さしめ



き。於是、其の身、本の如くに、安平ぎき。(此は、神慨憤賭くといふことの本なり。)  
 又、此の品陀天皇の御子、若野毛二俣王、其の御母の弟、百師木伊呂辨、亦の名  
 は、弟日賣眞若比賣命に娶ひて、生みませる御子、大郎子、亦の名は、意富富杼王。  
 次に、忍坂之大中津比賣命。次に、田井之中比賣。次に、田宮之中比賣。次に、藤原  
 之琴節郎女。次に、取賣王。次に、沙禰王。(七王)  
 故、意富富杼王は(三國の君、波多の君、息長の君、坂田の酒人の君、山道の君、  
 筑紫の米多の君、布勢の君等の祖なり。)  
 又、根鳥王、庶妹、三腹郎女に娶ひて、生みませる御子、中日子王、次に、伊和島  
 王。(二王)又、堅石王の子は、久奴王なり。  
 凡べて、此の品陀天皇、御年、壹佰參拾歳。御陵は、川内の惠賀の裳伏の岡に在り。

古事記下卷

高津の宮(仁徳天皇)

大雀命、難波の高津の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、葛城の曾  
 都毘古の女、石之日賣命(大后)に娶ひまして、生みませる御子、大江之伊邪本和氣  
 命。次に、墨江之中津王。次に、蝮之水齒別命。次に、男淺津間若子宿禰命。(四柱)  
 又、上に云へる、日向之諸縣君牛諸が女、髪長比賣を娶して、生みませる御子、波多  
 毘能大郎子、亦の御名は、大日下王。次に、波多毘能若郎女、亦の御名は、長日比賣  
 命、亦の御名は、若日下部命。(二柱)又、庶妹、八田若郎女に娶ひまし、又、庶妹、  
 宇遲能若郎女に娶ひましき。此の二柱は、御子まさざりき。凡べて、此の大雀天皇の  
 御子等、并せて、六柱ましき。(男王五柱、女王一柱。)



故、伊邪本和氣命は、天の下治しめし、次に、蝮之水齒別命も、天の下治しめし、次に、男淺津間若子宿禰命も、天の下治しめしき。

此の天皇の御世に、太后、石之日賣命の御名代として、葛城部を定め給ひ、亦、太子、伊邪本和氣命の御名代として、壬生部を定め給ひ、亦、水齒別命の御名代として、蝮部を定め給ひ、亦、大日下王の御名代として、大日下部を定め給ひ、若日下部王の御名代として、若日下部を定め給ひき。

又、秦人を役て、茨田の堤、茨田の屯倉を作り給ひ、又、丸邇の池、依網の池を作り給ひ、又、難波の堀江を掘りて、海に通し、又、小椅の江を掘り、又、墨江の津を定め給ひき。

於是、天皇、高山に登りまして、四方の國を見し給ひて、詔り給ひつらく、「國中に、烟發たず、國、皆、貧窮し。故、今より三年といふまでは、悉に、人民の課役を除せ」と詔り給ひき。

是を以て、大殿、破れ壞れて、悉に、雨漏れども、都て、修理ひ給はず、械を以ち

て、其の漏る雨を受けて、漏らざる處に遷り避けましき。後に、國中を見し給へば、國に、煙滿ちたりき。故、人民、富めりと思ほして、今はと、課役科せ給ひき。是を以て百姓、榮えて、役使に苦しまざりき。故、其の御世を稱へて、聖帝の御世と謂す。

其の太后、石之日賣命、甚多、嫉妬し給ひき。故、天皇の使はす妾等は、宮中をも得臨かず言立てば、足も足搔に、嫉妬み給ひき。

爾、天皇、吉備海部直が女、名は、黒日賣、其れ、容姿端正と聞しめして、喚上げて使ひ給ひき。然れども、其の太后の嫉ますを畏みて、本國に、逃げ下りにき。天皇、高臺に坐して、其の黒日賣の船出するを望瞻けまして、歌ひ給はく、

澳方には 小舟連らく 黒崎の 麻佐豆古吾妹 國へ下らす

故、太后、此の御歌を聞かして、大く、怒りまして、大浦に、人を遣はして、追ひ下して、歩より追去ひ給ひき。



於是、天皇、其の黒日賣を戀ひ給ひて、太后を欺かして、「淡道島、見給はん」と、詔り給ひて、幸行ませる時に、淡道島に坐して、遙に、望けまして歌ひ給はく、  
 押照るや 難波の埼よ 出で立ちて 吾が國見れば  
 淡島 湊能基呂島 檳榔の 島も見ゆ  
 佐氣都島見ゆ

乃ち、其の島より傳ひて、吉備の國に、幸行ましき。

爾、黒日賣、其の國の山方の地に、大坐しまさしめて、大御飯獻りき。於是、大御羹を煮むとして、其地の菘菜を採める時に、天皇、其の嬢子の菘採む處に、到りまして、歌ひ給はく、

山方に 蒔ける菘菜も 吉備人と 共にし採めば  
 樂しくもあるか

天皇、上幸ます時に、黒比賣の獻れる御歌曰  
 西風吹き上げて 雲離れ 退き居りとも

吾忘れめや

又歌曰

倭方に 往くは誰が夫 隱水の 下よ延つ、  
 往くは誰が夫

是より後時、太后、豊樂し給はむとして、御綱柏を採りに、木の國に、幸行ませる間に、天皇、八田若郎女に婚ひましつ。

於是、太后は、御綱柏を御船に積み盈て、還幸ります時に、水取司に使はゆる、吉備の國の兒島の仕丁、是れ、己が國に退るに難波の大渡に、後れたる藏人女の船、遇へり。乃ち、語りけらくは、「天皇は、比日、八田若郎女に婚ひまして、晝夜、戲遊れますを、若し、太后は、此の事聞しめさねかも、靜に、遊び幸行ます」とぞ語りける。

爾、其藏人女、「此の語れる言を聞きて、即ち、御船に追ひ近きて、仕丁が言ひつる如、狀、具に、白しき。於是、太后、大く、恨み怒りまして、其の御船に載せたる御



綱柏をば、悉に、海に投げ棄て給ひき。故、其地を、御津前とは謂ふなり。即ち、宮に入りまさずて、其の御船を引き避きて、堀江に浜らして、河の隨、山代に上幸ましき。此の時に、歌ひ給はく、

繼苗生や

山代川を

川上り

吾が上れば

河の邊に

生ひ立てる

烏草樹を

さしぶの木

其が下に

生ひ立てる

葉廣

五百箇眞椿

其が花の

照り坐し

其が葉の

廣り坐すは

大君ろかも

即ち、山代より廻りて、那良の山口に到りまして、歌ひ給はく、

繼苗生や

山代川を

宮上り

吾が上れば

青土よし

那良を過ぎ

小楯

倭を過ぎ

吾が見が欲し

國は

葛城

高宮

吾家の邊

如此、歌ひて還らして、暫時、筒木の韓人、名は、奴里能美が家に入りましき。

天皇、大后山代より上幸ましぬと、聞しめして、舍人、名は、鳥山と云ふ人を遣は

しける時に、送り給へる御歌曰

山代に

及け鳥山

及け及け

吾が愛し妻に

及き遇はむかも

又、續ぎて、丸邇臣、口子を遣はして、歌ひたまはく、

御室の

其の高城なる

大猪子が腹

大猪子が

腹にある

肝向ふ

心をだにか

相思はずあらむ

又歌曰

繼苗生

山代女の

木鏝持ち

打ちし大根

根白の

白腕

纏かすけばこそ

知らずとも言はめ



故、是の口子臣、此の御歌を白す時しも、雨、大く降りき。

爾、其の雨をも避けず、前殿戸に參伏せば、違ひて、後戸に出で給ひ、後殿戸に參伏せば、違ひて、前戸に出で給ふ。爾、匍匐進退ひて、庭中に、跪き居る時に、水潦、腰に至けり。其の臣、紅紐着けたる青摺の衣を服たりければ、水潦、紅紐に拂れて、青、皆、紅色に變りぬ。

爾、口子臣の妹、口比賣、大后に仕へ奉れり。故、是の口比賣歌ひけらく、

山代の

筒木の宮に

物申す

吾が兄の君は

涙ぐましも

爾、大后、其の所由を問ひ給ふ時に、「僕が兄、口子臣なり」と答白しき。

於是、口子臣、亦其の妹、口比賣、及、奴理能美、三人して議りて、天皇に奏さしめけらくは、「大后の幸行ませる所以は、奴理能美が養ふ虫、一度は、匍虫に爲り、一度は、殼に爲り、一度は、飛鳥に爲りて、三色に變る奇虫あり。此の虫を看行はしに、入りませるにこそあれ。更に、異心はまさず。」如此奏す時に、天皇、「然らば、

吾も奇異と思へば、見に行かな」と詔り給ひて、大宮より、上幸まして、奴理能美が

家に入りませる時に、其の奴理能美、己が養へる三種の虫を、大后に奉りき。

爾、天皇、其の大后の坐せる殿戸に、御立たして、歌はしけらく、

繼苗生

山代女の

木鏝持ち

打ちし大根

清々に

汝が言へせこそ

打渡す

彌木榮え如す

來入り參來れ

此の天皇と大后と、御歌はしたる六歌は、徐歌の返歌なり。

天皇、八田若郎女を戀ひ給ひて、御歌を遣り給へる、其の歌曰

八田の

一本菅は

子持たず

立ちか荒れなむ

可惜菅原

言をこそ

菅原と言はめ

可惜清女

爾、八田若郎女の答歌曰



八田の 一本菅は 獨り居りとも  
天皇し 縦しと詔さば

獨り居りとも

故、八田若郎女の御名代として、八田部を定め給ひき。

亦、天皇、其の御弟、速總別王を媒として、庶妹、女鳥王を乞ひ給ひき。爾、女鳥

王、速總別王に語り曰はく、「大后の強剛に因りて、八田若郎女をも召寵め給はず。故、

仕へ奉らじ。吾は、汝が命の御妻に爲りなむと思ふ」といひて、即ち、相婚ひましき。

是を以て、速總別王、復、奏し給はざりき。

爾、天皇、直に、女鳥王の坐す所に、幸まして、其の殿戸の闕の上に坐しき。於是、

女鳥王、機に坐して、服織らせり。爾、天皇、御歌曰みし給はく、

女鳥の 吾が王の 織す服 誰が料ろかも

女鳥王、御答歌曰

高行くや 速總別の 御襲料

故、天皇、其の情を知らして、宮に還りましき。

此の後、其の夫、速總別王の到來せる時に、其の御妻、女鳥王、歌ひたまはく、

雲雀は 天に翔ける 高行くや 速總別

鷓鴣取らさね

天皇、此の歌を聞かして、即ち、軍を興して、殺り給はむとす。

爾、速總別王、女鳥王、共に逃げ退りて、倉椅山に騰りましき。於是、速總別王、

歌ひ給はく、

梯立の 倉椅山を 嶮しみと 岩搔き不得て

吾が手取らすも

又歌曰

梯立の 倉椅山は 嶮しけど 妹と登れば

嶮しくもあらず

故、其地より逃亡げて、宇陀の蘇邇に到りませる時に、御軍追ひ到りて、殺せまつ



りき。其の將軍、山部大楯連、其の女鳥王の、御手に纏かせる、玉釧を取りて、己が妻に與へたりき。

此の後、豊樂し給はむとする時に、氏々の女等、皆、朝參す。爾、大楯連が妻、其の王の玉釧を、己が手に纏きて參赴れり。於是、太后、石之日賣命、自ら大御酒の柏葉を取らして、諸氏々の女等に賜ひき。爾、太后、其の玉釧を見知り給ひて、御酒の柏葉を賜はずて、乃ち、引き退け給ひて、其の夫、大楯連を召し出で、詔り給はく、「其の王等、禮無きに因りて、退ひ賜へる、是は、異事なくこそ。夫れの奴や、己が君の御手に纏かせる玉釧を、膚も熅けきに、剥ぎ持ち來て、己が妻に與へたること」と詔り給ひて、乃ち、死刑に行ひ給ひき。

亦、一時、天皇、豊樂し給はんとして、日女島に幸行ませる時に、其の島に、雁、卵生みたりき。爾、建内宿禰命を召して、御歌以て、雁の卵を生める状を、問はし給へる、其の歌曰

玉來經る

内の吾兄臣

汝こそは

世の長人

虚空見つ

日本の國に

雁子産と

聞くや

於是、建内宿禰、歌以て、語り白さく、

高光る

日の御子

諾しこそ

問ひ給へ

眞こそに

問ひ給へ

吾こそは

世の長人

虚空見つ

日本の國に

雁子産と

未だ聞かず

如此白して、御琴を賜はりて、歌ひ曰く、

汝が王や

終に知らむと

雁は子産らし

此は、祝壽歌の片歌なり。

此の御世に、免寸河の西の方に、一高木ありけり。其の樹の影、旦日に當れば、淡道島に逮び、夕日に當れば、高安山を越えき。故、是の樹を切りて、船に造れるに、甚、捷く行く船にぞありける。時に、其の船の號を枯野とぞ謂ひける。故、是の船を以て、旦夕に、淡道島の寒泉を酌みて、大御水、獻りき。

茲の船、破壊れたる以て、鹽を焼き、其の焼け遣れる木を取りて、琴に作りたりし



に、其の音、七里に響えたりき。爾、歌曰

枯野を 鹽に焼き 其が餘り

搔き弾くや 由良の門の 門中の

振れ立つ 浸漬の木の 亮々

此は、徐歌の返歌なり。

此の天皇、御年、捌拾參歳。御陵は、毛受の耳原に在り。

若櫻の宮（履中天皇）

伊邪本和氣命、伊波禮の若櫻の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、葛城の曾都毘古の子、葦田宿禰の女、名は、黒比賣命に娶ひまして、生みませる御子、市邊忍齒王。次に、御馬王。次に、妹、青海郎女、亦の御名は、飯豊郎女。（三柱）本、難波の宮に坐し、時、大嘗に坐して、豊明爲す時に、大御酒に浮上げて、大御寝ましき。爾、其の御弟、墨江中王、天皇を殺りまつらむとして、大殿に火を著

けたりき。

於是、倭の漢直の祖、阿知直、盗み出で、御馬に乗せまつりて、倭に幸でまさしめき。故、多遲比野に到りまして、寤めまして、「此間は、何處ぞ」と詔り給ひき。爾、阿知直、白さく、「墨江中王、大殿に火を著け給へり。故、率て奉りて、倭に逃げ行くなり」と白しき。爾、天皇、歌曰く、

多遲比野に 寝むと知りせば 防壁も 持ちて來ましもの

寝むと知りせば

波邇賦坂に到りまして、難波の宮を望見り給へば、其の火、猶、炳く見えたり。爾、

天皇、亦、歌曰く、

埴生坂 吾が立ち見れば 炫火の 燃ゆる家群

妻が家の邊

故、大坂の山口に到りませる時に、一女人遇へり。其の女人の、白さく、「兵器を持たる人等、多、茲の山を塞き居り。當岐麻道より廻りて、越え幸でますべし」と白し



爾、天皇、歌曰く、

大坂に 遇ふや處女を 道問へば 直には告らず

當麻道を告る

故、上幸まして、石上の神宮に坐しましき。

於是、其の同母弟、水齒別命、參赴まして、謁さしめ給ふ。爾、天皇、詔らしめ給はく、「吾、汝が命を、若し墨江中王と、同心ならむかと、思ほせば、相言はじ」と詔らしめ給へば、「僕は、穢邪心無し。墨江中王と、同心にもあらず」と答へ白し給ひき。亦、詔らしめ給はく、「然らば、今、還り下りて、墨江中王を殺して、上り來ませ。彼の時にこそ、吾、必ず、相言はめ」と詔らしめ給ひき。

故、即ち、難波に、還り下りまして、墨江中王に、近習まつる隼人、名は、曾婆加理を欺きて、「若し、汝、吾が言ふことを従かば、吾、天皇と爲り、汝を大臣に作して、天の下治さむとす、那何に」と云り給ひき。曾婆訶理、「御命の隨」と答白しき。爾、其の隼人に、祿、多に給ひて、「然らば、汝の王を殺りまつれ」と曰り給ひき。於

是、曾婆訶理、己が王の厠に入りませるを、竊伺ひて、矛以ちて、刺して殺せまつりき。

故、曾婆訶理を率て、倭に、上幸ます時に、大坂の山口に到りまして、以爲さくは、曾婆訶理、吾が爲に、大功あれども、既に、己が君を殺せまつれるは、不義なり。然れども、其の功を賽いずば、無信せしになりぬべし。既に、契約し如、行はゞ、還りて其の情こそ惶けれ。故、其の功は報ゆとも、其の正身をば、滅してむ、とぞ以爲しける。

是を以て、曾婆訶理に詔り給はく、「今日は、此間に、留りて、先づ、大臣の位を給ひて、明日、上幸まさむ」と詔り給ひて、其の山口に留りまして、即ち、假宮を造りて、忽に、豊樂爲して、乃ち、其の隼人に、大臣の位を賜ひて、百官をして、拜しめ給ふに、隼人、歡喜びて、志、遂げぬ、とぞ思ひける。

爾、其の隼人に、「今日大臣と、同蓋の酒を飲みてむとす」と詔り給ひて、共に飲ます時に、面を隠す大鏡に、其の進むる酒を盛りたり。於是、王子、先づ飲み給ひて、



隼人、後に飲む。故、其の隼人、飲む時に、大鏡、面を覆ひたりき。爾、席の下に置  
 かける劔を取り出で、其の隼人が頸を斬り給ひき。乃して、明日ぞ上幸ましける。故、  
 其地を近飛鳥と號く。倭に上り到りまして、詔り給はく、「今日は、此間に留りて、祓  
 禊して、明日、參出て、神宮を拜まむとす」と、詔り給ひき。故、其地を遠飛鳥と號  
 けき。

故、石上神宮に參出て、天皇に、「政、既に、平け訖へて參上りて侍ふ」と奏さし  
 め給ひき。爾召入れて語らひ給ひき。

天皇、於是、阿知直を、始めて藏官に任し給ひ、亦、粮地をも給ひき。亦、此の御  
 世に、若櫻部の臣等に、若櫻部と云ふ名を賜ひ、又、比賣陀君等に、比賣陀君と謂ふ  
 姓を賜ひき。亦、伊波禮部を定め給ひき。

天皇の御年、陸拾肆歲。御陵は、毛受に在り。

多治比の宮（反正天皇）

水齒別命、多治比の柴垣の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、御身の  
 長、九尺二寸半、御齒、長さ、一寸、廣さ、二分、上下等しく、齊ひて、既に、珠  
 を貫けるが如くなりき。

此の天皇、丸邇之許碁登の臣の女、都怒郎女を娶して、生みませる御子、甲斐郎女。  
 次に、都夫良郎女。（二柱）又、同臣の女、弟比賣を娶して、生みませる御子、財王。  
 次に、多訶辨郎女。并せて、四王ましき。

此の天皇の御年、陸拾歲、御陵は、毛受野に在り。

遠飛鳥の宮（允恭天皇）

男淺津間若子宿禰命、遠飛鳥の宮に坐して、天の下治しめしき。此の天皇、意富  
 本杼王の妹、忍坂之大中津比賣命に娶ひまして、生みませる御子、木梨之輕王。次に、  
 長田大郎女。次に、境之黒日子王。次に、穴穗命。次に、輕大郎女、亦の名は、衣通  
 郎女。（御名を、衣通王と負はせる所由は、其の身の光、衣より通り出でつればなり。）



次に、八瓜之白日子王。次に、大長谷命。次に、橘大郎女。次に、酒見郎女。(九柱) 凡て、此の天皇の御子等、九柱(男王五、女王四)。此の九王の中に、穴穂命は、天の下治しめしき。次に、大長谷命も、天の下治しめしき。

天皇、初め、天つ日嗣知しめさむと爲し時に、辭びまして、「我は、一長病しあれば、日繼得知らさじ」と詔り給ひき。然れども、大后を始めて、諸卿等堅く奏し給へるに因りてぞ、天の下治しめしける。

此の時、新良國王、御調、八十一艘、貢進りき。爾、御調の大使、名は、金波鎮漢紀武とぞ云ひける。此の人、薬方を深く知れりき。故、帝皇が御病を治差めまつりき。

於是、天皇、天の下の氏々名々の人等の、氏姓の忤ひ過てることを、愁ひまして、味白禱の言八十禍津日前に、探湯瓮を居ゑて、天の下の八十部屬長の氏姓を定め給ひき。又、木梨之輕太子の御名代として、輕部を定め給ひ、大后の御名代として、刑部を定め給ひ、大后の御弟、田井中比賣の御名代として、河部を定め給ひき。

天皇、御年、漆拾捌歳。御陵は、河内の惠賀の長枝に在り。

天皇、崩りまして後、木梨之輕太子、日嗣知しめすに定まれるを、未だ、位に即き給はざりし間に、其の同母妹、輕大郎女に好けて、歌曰し給はく、

足曳の 山田を佃り 山高み 下樋を走せ

下聘ひに 吾が聘ふ妹を 下泣きに 吾が泣く妻を

今日こそは 休く肌觸れ

此は、後舉歌なり。又歌曰

小竹葉に 打つや霞の 慥々に 率寢てむ後は

人議ゆとも

愛はしと 眞寢し眞寢てば

刈薦の 亂れば亂れ

眞寢し眞寢てば

此は、夷振の上歌なり。



是を以て、百官を始めて、天の下の人等、輕太子に背きて、穴穗御子に歸りぬ。爾、輕太子、畏みて、大前小前宿禰大臣の家に逃げ入りて、兵器を備へ作り給ひき。(爾時に、作れる矢は、其の箭の前を銅にしたり。故、其の矢を輕箭と謂ふ。)穴穗王子も、兵器を作り給ふ。(此の王子の作らせる矢は、即ち今時の矢なり。是を穴穗箭といふ。)是に、穴穗御子、軍を興して、大前小前宿禰の家を圍み給ふ。爾、其の門に、到りませる時に、大冰雨零りき。故、歌ひ給はく、

大前

小前宿禰が

家門陰

如此倚り來ね

雨立ち止めむ

爾、其の大前小前宿禰、手を擧げ、膝を打ち、儼ひ舞で、歌ひ參來 其の歌は、

宮人の

足結ひの小鈴

落去きと

宮人響動む

里人も謹め

此の歌は、宮人振なり。

如此、歌ひつ、參歸て、白しけらく、「我が天皇の御子、同母兄の王を攻め給ふな。

若し攻め給はゞ、必ず、人咲はむ。僕、捕へて貢進らむ」と白しき。爾、兵を解めて退りましき。故、大前小前宿禰、其の輕太子を捕へて、率て參出て貢進りき。其の太子捕へらえて、歌ひ給はく、

天飛む

輕の媛女

甚泣かば

人知りぬべし

波佐の山の

鳩の

下泣に泣け

又歌曰

天飛む

輕媛女

下々にも

倚り偃て行去れ

輕媛女等

故、其の輕太子をば、伊余の湯に流ちまつりき。亦、流たえ給はんとせし時に歌ひ

給はく、

天飛ぶ

鳥も使ぞ

鶴が音の

聞えむ時は

吾が名問はさね

此の三歌は、天田振なり。又、歌ひ給はく、



大君を

島に放らば

船餘り

還り來むぞ

吾が疊謹め

言をこそ

疊と言はめ

吾が妻は謹め

此の歌は、夷振の片下なり。

其の衣通王、歌を獻る。其の歌曰

夏草の

阿比泥の濱の

蠣貝に

足踏ますな

明して行去れ

故、後に、亦、戀慕不堪て、追ひ往ます時に、歌ひ曰はく、

君が行

月日長くなりぬ

山鉾の

迎へを行かむ

待つには待たじ

(此に山多豆と云へるは、是、今の立削なり。)

故、追ひ到りませる時に、待ち懷ひて、歌ひ曰はく、

隠り國の

長谷の山の

大峽には

幡張り立て

眞小峽には

幡張り立て

大峽にし

なかさだめる

念妻何怜

槻弓の

伏る伏りも

梓弓

立てり立てりも

後も取り見る

念妻何怜

又歌曰

隠り國の

長谷の川の

上つ瀬に

齋杵を打ち

下つ瀬に

眞杵を打ち

齋杵には

鏡を掛け

眞杵には

眞玉を掛け

眞玉如す

吾が思ふ妹

鏡如す

吾が思ふ妻

在りと

云はゞこそに

家にも往かめ

國をも偲ばめ

如此歌ひて、即ち、共に自ら死せ給ひき。故、此の二歌は讀歌なり。



穴穂の宮（安康天皇）

穴穂御子、石上の穴穂の宮に坐して、天の下治しめしき。天皇、母同弟、大長谷王子の爲に、坂本臣等が祖、根臣を、大日下王の御許に遣はして、詔らしめ給へらくは、「汝が命の妹、若日下王を、大長谷王子に婚はせむとす。故、貢るべし」と、詔らしめ給ひき。

爾、大日下王、四度拜みて、白し給はく、「若し如此大命もあらむかと疑へる故に、外にも出さずて置きつ。是れ恐し、大命の隨、奉進らむ」と白し給ひき。然れども、言以て白す事は禮無しと思ほして、即ち、其の妹の禮物として、押木の玉纒を持たしめて、貢獻りき。

根臣、即ち、其の禮物の玉纒を盗み取りて、大日下王を讒しまつりけらく、「大日下王は、勅命を受け給はらずて、己が妹や、等族の下席に爲らむ」といひて、横刀の手上取り撫りて、怒りましつ」と曰しき。故、天皇、大く怒りまして、大日下王を殺

して、其の王の嫡妻、長田大郎女を取り持ち來て、皇后と爲給ひき。

此より以後に、天皇、神牀に坐しまして、晝御寢ましき。爾、其の后と語らひて、「汝思ほす事ありや」と、詔り給ひければ、「吾が天皇の御敦澤の被ければ、何の思ふ事かあらむ」と答白し給ひき。於是、其の太后の先子、目弱王、是年七歳になり給へり。是の王、其の時しも、其の殿の下に遊びませりき。爾、天皇、其の少王の殿の下に遊びませる事を知しめさずて、太后に詔り言はく、「吾は、恆思ほす事あり、何ぞといへば、汝の御子、目弱王、成人たらむ時、吾が其の父王を殺せし事を知りなば、還して、邪心あらむか」と詔り給ひき。

於是、其の殿の下に遊びませる目弱王、此の御言を聞き取りて、便ち天皇の御寢ませるを竊伺ひて、其の傍なる大刀を取りて、其の天皇の御頸を打斬りまつりて、圓大臣が家に、逃げ入りましき。

此の天皇、御年、伍拾陸歳。御陵は、菅原の伏見の岡に在り。爾、大長谷王子、當時、童男にましける。此の事を聞かして、慷慨忿怒まして、乃



ち、其の同母兄、黒日子王の御許に到して、「人、天皇を、取殺りまつれり。那何に爲まし」と曰し給ひき。然るに、其の黒日子王、打も驚かすて、怠緩に思ほせり。於是、大長谷王、其の同母兄を罵りて、「一つには、天皇にまし、一つには、兄弟にますを、何ぞも恃心なく、人の其の同母兄を殺りまつれる事を聞きつつ、驚きもせず、怠に思ほせる」と言ひて、即ち、其の衿を握りて、控き出で、刀を抜き打ち殺し給ひき。

亦、其の同母兄、白日子王に到して、前の如、狀告げ白し給ふに、此の王も、亦、黒日子王の如、怠に思ほせりしかば、即ち、其の衿を握りて、引き率て来て、小治田に到りて、穴を掘りて、立ちながらに埋みしかば、腰を埋む時に至りて、兩目、走り抜けてぞ死せ給ひぬる。

亦、軍を興して、圓大臣の家を圍み給ひき。爾、軍を興して、待ち戦ひて、射出づる矢、葦の、盛りに、散るが如くなりき。於是、大長谷王、矛を御杖に爲して、其の内を臨みまして、詔り給はく、「我が相言へる嬢子は、若し此の家によりや」と詔り給

ひき。

爾、圓大臣、此の詔命を聞きて、自ら參出て、佩ける兵器を解きて、八度拜みて、白しけるは、「先日、問ひ賜へる女子、訶良比賣は侍はむ。亦、五處の屯宅を副へて獻らむ。(所謂、五村の屯宅は、今の葛城の五村の苑人なり。)然るに其の正身、參向ざる所以は、往古より今に至るまで、臣連の王の宮に隠る事は聞けど、王子の臣の家に隠りませる事は、未だ聞かず。是を以て思ふに、賤奴、大臣は、力を竭して戦ふとも、更に、得勝ちまつらじ。然れども、己を恃みて、賤奴の家に入りませる王子は、死ぬとも棄てまつらじ」如此白して亦、其の兵器を取りて、還り入りて戦ひき。

爾、力窮き、矢も盡きぬれば、其の王子に白しけらく、「僕は、痛手負ひぬ。矢も盡きぬ。今は、得戦はじ。如何せむ」と白しければ、其の王子、「然らば、更に、可爲なし、今は、吾を殺せよ」と答詔り給ひき。故、刀以て、其の王子を刺し殺せまつりて、乃ち、己が頸を切りて死せにき。

茲より以後、淡海の佐佐紀山君の祖、名は、韓侷、白さく、「淡海の久多綿の蚊屋野



に、猪鹿多かり。其の立てる足は、荻原の如く、指擧げたる角は、枯樹の如し」と白しき。此の時、市邊之忍齒王を相率ひて、淡海に幸行まして、其の野に到りませば、各々異に、假宮を作りて、宿りましき。

爾、明旦、未だ日も出でぬ時に、忍齒王、何の御心も無く、御馬に乗らしながら、大長谷王の假宮の傍に到き立たして、其の大長谷王子の御伴人に詔り給はく、「未だ寤めまさぬにこそ、早く白すべし、夜は、既に、曙けぬ、獵場に幸ますべし」と詔り給ひて、乃ち、御馬を進めて、出行ましぬ。

爾、其の大長谷王の御所に侍ふ人等、「轉、物云ふ王子なれば、慎し給へ。御身をも堅め給ふべし」と白しき。即、衣の中に甲を服まし、弓矢を取り佩かして、御馬に乗らして、出行まして、倏忽に、馬より往き雙ばして、矢を抜きて、其の忍齒王を射落して、乃ち、亦、其の御身を切りて、馬楢に入れて、土と等しく埋みき。

於是、市邊王の王子等、意富祁王、袁祁王（二柱）、此の亂を聞かして、逃げ去りましき。故、山代の苜羽井に到りまして、御糧食しめす時に、面黥ける老人來て、其の

御糧を奪りき。爾、其の二王、「糧は惜まぬを、汝は、誰人ぞ」と言り給へば、「我は山代の猪飼なり」と答白しき。故、玖順婆の河を逃げ渡りて、針間の國に至りまし、其の國人、名は、志自牟が家に入りまして、身を隠して、馬飼、牛飼にぞ役はえ坐しける。

朝食の宮（雄略天皇）

大長谷若建命、長谷の朝倉の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、大日下王の妹、若日下部王に娶ひましき。（御子まします）又、圓大臣が女、韓比賣を娶して、生みませる御子、白髮命。次に、妹若帶比賣命。（二柱）

故、白髮太子の御名代として、白髮部を定め給ひ、又、長谷部舍人を定め給ひ、又河瀬舍人を定め給ひき。

此の御代に、吳人、參渡り來つ。其の吳人を吳原に置き給ひき。故、其地を吳原とは謂ふなり。



初め、太后、日下に坐しける時、日下の直越の道より、河内に幸行ましき。爾、山の上に登りまして、國望しければ、堅魚木を上げて、舎屋を作る家あり。天皇、其の家を問はしめ給はく、「其の堅魚木を上げて作れる舎は、誰が家ぞ」と問はしめ給ひしかば、「志幾の大縣主が家なり」と答白しき。爾、天皇、詔り給へるは、「奴や、己が家を、天皇の御舎に似て造れり」と詔り給ひて、即ち、人を遣はして、其の家を焼かしめ給ふ時に、其の大縣主、懼ぢ畏みて、稽首白さく、「奴にあれば、奴ながら覺らずて、過ち作れり。甚畏し」と白しき。故、稽首の御幣物を獻る。白き犬に、布を繫けて、鈴を著けて、己が族、名は、腰佩と謂ふ人に、犬の繩を取らしめて獻上りき。故、其の火著くることを止めしめ給ひき。即ち、其の若日下部王の御許に幸行まして、其の犬を賜ひ入れて、詔らしめ給はく、「此の物は、今日、道に得つる奇物なり。故、媯の物」と云ひて、賜ひ入れき。

於是、若日下部王、天皇に奏さしめ給はく、「日に背きて幸行ませる事甚恐し。故、己、直に、參上りて、仕へ奉らむ」と奏さしめ給ひき。是を以て、宮に還り上ります

時に、其の山の坂の上に行きた、して、歌ひ曰はく、

日下部の	此方の山と	疊菰	平群の山の
此方此方の	山の峽に	立ち榮ゆる	葉廣熊白檮
本には	入組み竹生ひ	末方には	立繁み竹生ひ
入組み竹	入籠みは寝ず	立繁み竹	慥には率宿す
後も籠み寝む			

其の思ひ妻 何怜

即ち、此の御歌を持たしめて、返し使はしき。

亦、一時、天皇、遊行しつゝ、美和河に到りませる時に、河邊に、衣、洗ふ童女あり。其れ、容姿、甚、麗かりき。天皇、其の童女に、「汝は誰が子ぞ」と問はしければ、「己が名は、引田部の赤猪子と謂す」と答白しき。爾、詔らしめ給へらくは、「汝、嫁夫がすてあれ、今、喚してむ」と詔らしめ給ひて、宮に、還りましき。故、其の赤猪子、天皇の御命を仰ぎ待ちて、既に、八十歳を経た



りき。於是、赤猪子、思ひけるは、御命を望ぎ待ちつる間に、已に、多くの年を経て、姿體、瘦み萎けてあれば、更に、恃みなし。然れども、待ちつる情を顯し白さずては、悞くて、得忍じ、と思ひて、百取の机代物を持たしめて、參出て貢獻りき。

然るに、天皇、先に、命り給へりし事をば、既く忘らして、其の赤猪子に問はしけらく、「汝は、誰やし老女ぞ、何由以ぞ參來つる」と問はしければ、赤猪子、答白しけらく、「其の年の其の月に、天皇の御命を被りて、今日まで、大命を仰ぎ待ちて、八十歳を經にたり。今は、容姿、既に、耆いて、更に、恃みなし。然はあれども、己が志を顯し白さむとしてこそ、參出つれ」と、答しき。

於是、天皇、大く驚きまして、「吾は、既く、先の事を忘れたり。然るに、汝、守志に、御命を待ちて、徒らに盛年を過し、事、甚、愛悲し」と詔り給ひて、婚ま欲しく思ほせども、其の極く老いぬるに憚り給ひて、得婚さずて、御歌を賜ひき。其の歌曰

御室の

嚴白禱が本

白禱が本

忌々しきかも

白禱原媛女

又歌曰

引田の

若栗栖原

若く間に

率寢てましもの

老いにけるかも

爾、赤猪子が泣く涙に、其の服せる丹摺の袖、通りて濕れぬ。其の大御歌に、答へまつれる歌曰

御室に

築くや玉垣

築き餘し

誰にかも依らむ

神の宮人

又歌曰

日下江の

入江の蓮

花蓮

身の盛り人

乏しきろかも

爾、其の老女に、祿多に給ひて、返し遣り給ひき。故、此の四歌は、徐歌なり。天皇、吉野の宮に幸行ませる時、吉野川の濱に、童女の遇へる、其れ、形容美麗か



りき。故、是の童女を婚して、宮に還りましき。後に、更に亦、吉野に幸行ませる時に、其の童女の遇へりし所に留りまして、其處に、大御吳床を立てて、其の御吳床に坐しまして、御琴を弾かして、其の嬢子に、儼せしめ給ひき。爾、其の嬢子、好く儼へるに因りて、御歌作し給へる、其の歌曰

吳床座の 神の御手以ち 彈く琴に 儼する女  
常世にもがも

即ち、阿岐豆野に幸でまして、御獵せす時に、天皇、御吳床に坐しませけるに、蝸、御腕を咋ひけるを、蜻蛉來て、其の蝸を咋ひて、飛び去にき。於是、御歌作し給へる、其の歌曰

御吉野の 袁牟漏賀岳に 猪鹿伏すと 誰れぞ  
大前に 申す 安見し、 吾が大君の  
猪鹿待つと 吳床に座まし 白服の 袖着具ふ  
手舂に 虻搔き著き 其の虻を 蜻蛉速咋ひ

此の如 名に負はむと 虚見つ 倭の國を  
蜻蛉島云ふ

故、其の時よりぞ、其の野を阿岐豆野とは謂ひける。

又、一時、天皇、葛城の山の上に登り幸でましき。爾、大猪出でたりき。即ち、天皇、鳴鏑を以ちて、其の猪を射給へる時に、其の猪、怒りて、怒吼き依り來。故、天皇、其の怒吼を畏みて、榛の木の上に登りましき。爾、歌曰し給はく、

安見し、 射ばし、 猪の  
病猪の 怒吼き畏み 吾が逃げ 登りし  
荒岳の 榛の木の枝

又、一時、天皇、葛城山に登り幸でませる時、百官の人等、悉に、紅紐著ける青摺の衣を給はりて、服たりき。彼の時に、其の向ひの山の尾より、山の上に登る人あり。既に、天皇の鹵簿に等しく、其の装束の狀、及、人衆も、相似てわかれず。爾、天皇、望らして問はしめ曰はく、「茲の倭の國に、吾を除きて、亦、王は無きを、今、誰



人ぞ、斯くて行く」と問はしめ給ひしかば、答へ曰せる状も、天皇の大命の如くなり  
 於是、天皇、大く忿らして、矢刺し給ひ、百官の人等も、悉に、矢刺しければ、其  
 の人等も、皆矢刺せり。故、天皇、亦、問はしめ曰はく、「然らば、其の名を告らさね、  
 各、名を告りて、矢弾たむ」と詔り給ひき。於是、答へ曰さく、「吾、先づ問はえたれ  
 ば、吾、先づ名告り爲む。吾は、悪事も一言、善事も一言、言離之神、葛城之一言主  
 の大神なり」と申し給ひき。

於是、天皇、惶畏みて白し給はく、「恐し、我が大神、現大身有さむとは、覺らざり  
 き」と白して、大御刀、及、弓矢を始めて、百官の人等の服せる衣服を脱がしめて、  
 拜みて獻りき。爾、其の一言主大神、手打ちて、其の捧物を受け給ひき。故、天皇の  
 還幸ます時、其の大神、山を降り來まして、長谷の山の口に送り奉りき。故、是の一  
 言主之大神は、彼の時にぞ顯れませる。

又、天皇、丸邇之佐都紀臣が女、袁杼比賣を婚ひに、春日に幸行ませる時、媛女の

道に逢へる、幸行ましを見て岡邊に、逃げ隠りき。故、御歌作し給へる、其の御歌曰

媛女の 隠る岡を 金鉏も 五百箇もがも

鉏撥ぬるもの

故、其の岡を、金鉏の岡とぞ謂けける。

又、天皇、長谷の百枝槻の下に坐しまして、豊樂爲す時に、伊勢の國の三重媛、  
 大御蓋を指擧げて獻りき。爾、其の百枝槻の葉落ちて、大御蓋に浮べりき。其の媛、  
 落葉の御蓋に浮べるを知らずて、猶、大御酒獻りけるに、天皇、其の御蓋に浮べる葉  
 を看行して、其の媛を打ち伏せ、刀を其の頸に刺し充て、斬り給はむとする時に、  
 其の媛、天皇に白しけらく、「吾が身をな殺し給ひそ、白すべき事あり」と曰して、即  
 ち、歌ひけらく。

纏向の	日代の宮は	朝日の	日照る宮
夕日の	日陰る宮	竹の根の	根足る宮
木の根の	根蔓延ふ宮	八百土よし	杵築の宮



眞木析く	檜の御門	新嘗屋に	生ひ立てる
百足る	槻が枝は	上枝は	天を覆へり
中つ枝は	吾妻を覆へり	下枝は	鄙を覆へり
上枝の	枝の末葉は	中つ枝に	落ち觸らばへ
中つ枝の	枝の末葉は	下つ枝に	落ち觸らばへ
下枝の	枝の末葉は	鮮衣の	三重の子が
指擧せる	瑞玉盃に	浮きし脂	落ち浮ひ
水凝る	凝るに	是しも	あやに畏し
高光る	日の御子	事の	語言も
是をば	此の高市に	小高る	市の高處

故、此の歌を獻りしかば、其の罪赦さえにき。  
爾、太后、歌はしける其の歌曰  
倭の

新嘗屋に	生ひ立てる	葉廣	五百箇眞椿
其が葉の	廣り坐まし	其の花の	照り坐ます
高光る	日の御子に	豊御酒	獻らせ
事の	語言も	是をば	

即ち、天皇、歌はしけらく、

百敷の	大宮人は	鶉鳥	領巾取り掛けて
鶴鶴	尾行き合へ	庭雀	群統り居て
今日もかも	酒飽らし	高光る	日の宮人
事の	語言も	是をば	

此の三歌は、天語歌なり。故、此の豊樂に、其の三重の姦を譽めて、祿、多に給ひ

是の豊樂の日、亦、春日の袁杼比賣が、大御酒獻る時に、天皇の歌ひ給へる、

水灌ぐ  
臣の嬢子  
秀樽取らすも



秀樽取り  
堅固く取らせ  
下堅く  
彌堅く取らせ

秀樽取らす子

此は、酒盞歌なり。

爾、袁杼比賣、歌を獻れる、其の歌曰

安見し、  
吾が大君の

朝戸には

倚り立たし

夕戸には  
倚り立たす

脇机が

下の

板にもが  
吾兄を

此は、徐歌なり。

此の天皇、御年、壹佰貳拾肆歳。御陵は、河内の多治比の高鷗に在り。

甕栗の宮（清寧天皇）

白髮大倭根子命、伊波禮の甕栗宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、皇

后ましまさず、御子もましまさざりき。故、御名代として、白髪部を定め給ひき。

故、天皇、崩りまして後、天の下治すべき王ましまさず。於是、日嗣知しめさむ王

を問ふに、市邊忍齒別王の妹、忍海郎女、亦の御名は飯豊王、葛城の忍海の高木の角

刺の宮に坐しませしき。

爾、山部連小楯、針間の國の宰に任れる時に、其の國の人民、名は、志自牟が新

室に到りて、宴樂す。於是、盛りに、宴樂げて、酒酣時、次第のまゝに、皆、儼す。

故、焼火少子二口、寵の傍に居たる、其の少子等にも儼はしむるに、其の一少子、

「汝兄、先づ儼ひ給へ」と曰へば、其の兄も、「汝弟、先づ儼ひ給へ」といふ。如此相讓

る時に、其の會へる人等、其の相讓ふ状を咲ひき。爾、遂に、兄、先づ儼ひ訖りて、

次第に、弟、儼はむとする時に、詠言爲つらく、

物部の  
我が夫子が  
取り佩ける  
大刀の手上に

丹畫き著け

取り佩ける

大刀の手上に

其の緒には  
赤服を裁ら

赤幡立て、

見ゆれば隠る



山の三尾の竹を 本搔き刈り 末押し糜かす如す

八絃琴を 調べたる如

天の下 治めたまひし

伊邪本和氣の 天皇の 御子

市邊の

押齒王の 奴御末

と、詔り給へば、即ち、小楯連、聞き驚きて、床より墮ち轉びて、其の室なる人等を追ひ出して、其の二柱の王子を、左右の膝の上に坐せまつりて、泣き悲みて、人々を集へて、假宮を作りて、其の假宮に坐せまつり置きて、早馬使貢上りき。於是、其の御姨、飯豊王、聞き歡ばして、宮に上らしめ給ひき。

故、天の下治しめさむとせし間、平群臣の祖、名は、志毘臣、歌垣に立ちて、其の袁祁命の婚さむとする美人の手に取れり。其の嬢子は、菟田首等が女、名は、大魚といへり。爾、袁祁命も歌垣に立たしき。於是、志毘臣、歌ひけらく、

大宮の 彼つ鰭手 隅傾けり

如此、歌ひて、其の歌の末を乞ふ時に、袁祁命歌ひ曰はく、

大匠 拙劣みこそ 隅傾けれ

爾、志毘臣、亦、歌ひけらく、

大君の 心を寛み 臣の子の 八重の柴垣

入り立たずあり

於是、王子、亦、歌ひたまはく、

潮瀬の 波折を見れば 遊び來る 鮪が鰭手に

妻立てり見ゆ

爾、志毘臣、愈、忿りて、歌ひけらく、

王の 柴垣 八節結り 結び廻し

截れむ柴垣 焼けむ柴垣

爾、王子、亦、歌ひ曰はく、

大魚よし 鮪衝く海人よ 其が荒れば 心裏戀しけむ



鮪衝く鮪

如此、歌ひて、鬪ひ明して、各退けましぬ。明旦時、意富祁命、袁祁命二柱、議り云はく、「凡て、朝廷の人等は、旦には、朝廷に参赴り、晝は、志毘が門に集ふ。爾、今は、志毘、必ず、寝ねたらむ、其の門に人も無けむ。故、今ならずは、謀り難けむ」と謀りて、即ち、軍を興して、志毘臣が家を圍みて、殺り給ひき。

於是、二柱の王子等、各に天の下を譲り給ひて、意富祁命、其の御弟、袁祁命に譲り給はく、「針間の志自牟が家に住めりし時、汝が命、名を顯し給はざらましかば、天の下臨さむ君とは、ならざらましを、既に、汝が命の功にぞありける。故、吾、兄にはあれども、猶、汝が命、先づ天の下を治しめしてよ」といひて、堅く譲り給ひき。故、得辭み給はずて、袁祁命ぞ、先づ天の下治しめしける。

近飛鳥の宮（顯宗天皇）

袁祁之石巢別命、近飛鳥の宮に坐しまして、捌歷、天の下治しめしき。此の天皇、

石木王の御女、難波王に娶ひましき。御子はましまさざりき。

此の天皇、其の父王、市邊王の御骨を求ぎ給ふ時に、淡海の國なる賤しき老媪、參出で、白しつらく、「王子の御骨を埋みたりし所は、専ら、吾、能く知れり。亦、其の御齒以て知るべし」と白しき。（御齒は、三枝如す、押齒坐せりき。）爾、民を起て、土を掘りて、其の御骨を求ぎて、即ち、其の御骨を獲給ひて、其の蚊屋野の東の山に、御陵を作りて、葬めまつりて、韓帝が子等に、其の御陵を守らしめ給ひき。然後持上其御骨也。

故、還り上りまして、其の老媪を召して、其の地を失れず、見置きて知れりし事を譽めて、置目老媪と號ふ名を賜ひき。仍くて、宮の内に召し入れて、敦く廣く慈み給ひき。故、其の老媪の住む屋をば、宮の邊近く作りて、日毎に、必ず、召しき。故、大殿の戸に、鐸を懸けて、其の老媪を召さむとする時は、必ず、其の鐸を引き鳴し給ひき。爾、御歌作し給へる、其の歌曰

淺茅原

小谷を過ぎて

百傳ふ

鐸瑯々も



置目來らしも

於是、置目老媪、「僕、甚く、耆老にたれば、本國に退らま欲し」と白しき。故、白せる隨、退り給ふ時に、天皇、見送らして、歌ひたまはく、

置目もや

淡海の置目

明日よりは

御山隠りて

見えずかもあらむ

初め、天皇、難に逢ひて、逃げまし、時に、其の御糧を奪りし、猪飼老人を求ぎ給ひき。是に求ぎ得たるを、喚び上げて、飛鳥河の河原に斬りて、皆、其の族等の膝の筋を断ち給ひき。是を以て今に至る迄、其の子孫、倭に上る日、必ず、自ら、跋くなり。故、其の老人の所在を、能く見しめき。故、其地を志米須と謂ふ。

天皇、其の父王を殺し給ひし、大長谷天皇を深く怨みまつりて、其の御靈に報いむと、欲しき。故、其の大長谷天皇の御陵を、毀らむと欲して、人を遣はす時に、其の同母兄、意富祁命の奏し言はく、「是の御陵を破壊らむには、他人を遣はすべからず。専ら、僕、自ら行きて、天皇の御心の如、破壊りて參出む」と、奏し給ひき。

爾、天皇、「然らば、命の隨、幸行ませ」と詔り給ひき。是を以て、意富祁命自ら下り幸でまして其の御陵の傍を少し掘りて、還り上らして、「既に、掘り壞りぬ」と復言し給ひき。爾、天皇、其の早く還り上りませる事を、異みまして、「如何に破壊り給ひしぞ」と詔り給へば、「其の御陵の傍の土を、少し掘りつ」と答白し給ひき。天皇詔り給はく、「父王の仇を報いむと欲ふなれば、必ず、其の御陵を、悉に、破壊りてむを、何ぞ、少し掘り給ひしぞ」と詔り給へば、答し曰はく、「然爲つる所以は、父王の怨を、其の御靈に報いむと欲すは、誠に、理なり。然れども、其の大長谷天皇は、父王の怨にはあれど、還りては、我が從父にまし、亦、天の下治しめし、天皇にますを、今、單に、父王の仇といふ志をのみ執泥りて、天の下治しめし、天皇の御陵を、悉に、破りなば、後世の人、必ず、誹謗まつりてむ。唯し、父王の仇は、報いずばあるべからず。故、其の御陵の邊を、少し掘りつ。既に、是く、恥辱せまつりてあれば、後世に示すにも、足へなむ」と如此、奏し給ひつれば、天皇、「是も亦、大理なり。命の如く可し」とぞ答詔り給ひける。故、天皇、崩りまして、即ち、意富祁命、天つ日嗣知



しめしき。  
此の天皇、御年、參拾捌歳。八歳、天の下治しめしき。御陵は、片岡の石坏の岡の上<sup>へ</sup>に在り。

廣高の宮（仁賢天皇）

意富祁命、石上<sup>いそのかみ</sup>の廣高の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、大長谷若建<sup>たけの</sup>天皇の御子、春日大郎女に娶ひまして、生みませる御子、高木郎女。次に財郎女。次に、久須毘郎女。次に、手白髮郎女。次に、小長谷若雀命。次に、眞若王。又、丸邇<sup>にのひつまのおみ</sup>日爪臣の女、糠若子郎女を娶して、生みませる御子、春日山田郎女。  
此の天皇の御子等、并せて、七柱ます。此の中に、小長谷若雀命は、天の下治しめしき。

列木の宮（武烈天皇）

小長谷若雀命、長谷<sup>はつせ</sup>の列木の宮に坐しまして、八歳、天の下治しめしき。此の天皇、太子<sup>ひつぎのみこ</sup>子まします。故、御子代として、小長谷部を定め給ひき。  
御陵は、片岡の石坏の岡に在り。此の天皇、既に、崩りまして、日嗣知しめすべき王<sup>みこ</sup>まします。故、品<sup>かれ</sup>太<sup>ほむだの</sup>天皇の五世の孫、袁本杼命<sup>をほどの</sup>を、近淡海<sup>あふみ</sup>の國より、上りまさせ、手白髮命<sup>たしらかの</sup>に婚<sup>あは</sup>せまつりて、天の下を授けまつりき。

玉穗の宮（繼體天皇）

袁本杼命、伊波禮<sup>いはれ</sup>の玉穗の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、三尾君<sup>みのきみ</sup>等<sup>ら</sup>が祖、名は、若比賣<sup>わかひめ</sup>を娶して、生みませる御子、大郎子<sup>おほいらつこ</sup>。次に、出雲郎女<sup>いづもの</sup>。（二柱）又、尾張連<sup>おほしの</sup>等<sup>ら</sup>が祖、凡連<sup>おほし</sup>が妹、目子郎女<sup>めこの</sup>を娶して、生みませる御子、廣國押建金日命<sup>ひろくにおしたけかなひの</sup>。次に、建小廣國押楯命<sup>たけをひろくにおしたての</sup>。（二柱）又、意富祁<sup>いほ</sup>天皇の御子、手白髮命<sup>たしらかの</sup>（是は、大后にます）に娶ひまして、生みませる御子、天國押波流岐廣庭命<sup>あめくにおしはるきひろにはの</sup>。（一柱）又、息長眞手王<sup>おきながのまての</sup>の御女、麻組郎女<sup>まぐみの</sup>を娶して、生みませる御子、佐々宜郎女<sup>ささぎの</sup>。（一柱）又、坂田大俣王<sup>さかたのおほまたの</sup>の御女、黒



比賣を娶して、生みませる御子、神前郎女。次に、茨田郎女。次に馬來田郎女。(三柱) 又、茨田連、小望が女、關比賣を娶して、生みませる御子、茨田大郎女、次に、白坂活日郎女。次に、小野郎女、亦の御名は、長目比賣。(三柱) 又、三尾君、加多夫が妹、倭比賣を娶して、生みませる御子、大郎女。次に、丸高王。次に、耳王。次に、赤比賣郎女。(四柱) 又、阿倍之波延比賣を娶して、生みまる御子、若屋郎女。次に、都夫良郎女。次に、阿豆王。(三柱)

此の天皇の御子等、并せて、十九王。(男七、女十二)

此の中に、天國押波流岐廣庭命は、天の下治しめしき。次に、廣國押建金日命も、天の下治しめしき。次に、建小廣國押楯命も、天の下治しめしき。次に、佐佐宜王は、伊勢神宮を拜きまつり給ひき。

此の御世に、竺紫の君、石井、天皇之命に従はずして、禮無き事多かりき。故、物部荒甲之大連、大伴之金村連、二人を遣はして、石井を殺らしめ給ひき。

此の天皇、御年、肆拾參歲。御陵は、三島の藍に在り。

金箸の宮 (安閑天皇)

廣國押建金日命、勾の金箸の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、御子ましまさざりき。御陵は、河内の古市の高屋村に在り。

檜桐の宮 (宣化天皇)

建小廣國押楯命、檜桐の廬入野の宮に坐しまして、天の下治しめしき。此の天皇、意富祁天皇の御子、橘之中比賣命に娶ひまして、生みませる御子、石比賣命。次に、小石比賣命。次に、倉之若江王。又、川内之若子比賣を娶して、生みませる御子、火穗王。次に、惠波王。

此の天皇の御子等、并せて、五王。(男三、女二) 故、火穗王は、(志比陀君の祖) 惠波王は、(韋那君、多治比君の祖なり。)